

末日聖徒イエス・キリスト教会・1999年6月号

リア村



ホリスティック



8ページ参照



表紙

青少年が教会で必要とされ求められていると感じられるようにするにはどうしたらよいだろうか。本誌「若人に帰属感を持たせる」42ページ参照（写真—表紙/©トニー・ストーン・イメージ、裏表紙/リチャード・M・ロムニー）。

フレンド

この二人は、末日聖徒の開拓者が行った旅の再現に参加しました。はきつぶしたくつが目立ちますね。6ページの「世界のお友達」を見ましょう。写真/ウエルデン・C・アンダーセン。

一般

- 2 大管長会メッセージ— 靈感を伝える言葉

大管長 ゴードン・B・ヒンクレー

- 8 王妃に育てられたわたし

ジョアン・ポーター・フォード、ラリー・ポーター・ガント

- 11 「この教が わかるであろう」 七十人 ケネス・ジョンソン

- 16 我が家でデート ゲオック・リー・トン

- 22 「すばらしい その1か所を除けば」 アニヤ・ベイトマン

- 25 家庭訪問メッセージ— 自制心を養う

- 28 寄り合い家庭を一つの家族にするには 七十人名誉会員、ロバート・E・ウエルズ

- 42 若人に帰属感を持たせる ブラッド・ウィルコック

- 48 すべてはバスの中から エルニー・ロザ・A・シルバ

青少年

- 18 質疑応答— 祈りが単なる繰り返しになるのを防ぐにはどうすればよいでしょうか。

- 26 主に仕える夢 ジョン・ジャイロ・ブスタマンテ

- 36 彼女が祈り求めたのは、わたしの助けでした エリザベス・クワッケンブッシュ

- 38 「君にはここにいてほしくないんだ」 サム・ジルズ、クリスティー・ジルズ

- 41 人とうまくなじめないとき ジャネット・ウェイト・ベネット

フレンド

- 2 サミュエルの聖典 シーラ・キンドレッド作

- 4 分かち合いの時間— いましめをまもりなさい シドニー・S・レイノルズ

- 6 世界のお友達

- 8 おもちゃばこ— かいたくしゃたち

- 10 たんけん— 命を救ったゆり ジェラルディン・T・フィールディング

- 12 イエスのように

初めての家族の断食 ロレンソ・プレゼンサ

正しい選択 ジョーダン・ステンジャー

- 14 食事の祝福 ファーン・R・ロー

42ページ参照



本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の国際機関誌で、以下の言語で出版されています。

月刊—イタリア語、英語、オランダ語、韓国語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、ノルウェー語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語。隔月刊—インドネシア語、タイ語。季刊—アイスランド語、ウクライナ語、ギルバート語、セブアン語、タガログ語、チェコ語、ハンガリー語、フィジー語、ブルガリア語、ベトナム語、ポーランド語、ルーマニア語、ロシア語。(五十音順)

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト

十二使徒定員会：ボイド・K・バッカー、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリヴ

編集長：ジャック・H・ゴースリンド

顧問：ジェイ・E・ジェンセン、ジョン・M・マドセン

教科課程管理部責任者

実務部長：ロナルド・L・ナイトン

企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク

国際機関誌スタッフ

編集主幹：マービン・K・ガードナー

編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集補佐：ジェニファー・グリーンウッド

工程管理：ベス・デーリー

出版補佐：コニー・シェークスピア

デザインスタッフ

機関誌グラフィックスマネージャー：M・M・カワサキ
アートディレクター：スコット・バン・カンペン

デザイナー主任：シェリー・クック

制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ

制作：レジナルド・J・クリステンセン、トーマス・S・グローバーク、デニス・カービー、ジェーン・L・マンフォード、ディーナ・L・ソレンソン

デジタルプリプレス：ジェフ・マーティン

予約購読スタッフ

ディレクター：ケイ・W・ブリッグス

配送部長：クリス・クリステンセン

マーケティング部長：ジョイス・ハンセン

●定期購読は、『リアホナ』予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて教会管理本部配送センターへご送金いただければ、直接郵送いたします。●『リアホナ』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133-0057東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会 管理本部配送センター ☎03-5668-3391

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106-0047東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 理工印刷株式会社

定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)

半年予約1,200円(送料共)

普通号/大会号200円

英語版承認—1996年8月 翻訳承認—1996年8月
原題—International Magazines June, 1999,
Japanese, 99986 300

June 1999 no. 6. *LI AHONA* (ISSN 1344-8595) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, UT 84150, U.S.A. subscription price is \$10.00 per year; Canada, \$14.00. Periodicals Postage Paid at Salt Lake City, Utah. Sixty days' notice required for change of address. Include address label from a recent issue; Subscription help line: 1-800-537-5971. Credit card orders (Visa, MasterCard, American Express) may be taken by phone.

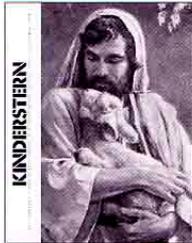
POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, PO Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368.

教会員の愛

『リアホナ』(韓国語版)を読むようになってから、いろいろな問題を克服できると感じています。『リアホナ』にはすばらしいメッセージがたくさん掲載されており、主についてさらに多くを学べるよう助けてくれます。また、教会の兄弟姉妹に対する見方が変わりました。彼らの勇気を感じて、とてもうれしく思います。『リアホナ』を通して、ほかの会員の方々からの愛と心遣いを感じます。

わたしは物質的には特に恵まれているわけではありません。しかしわたしには福音があります。1998年7月号の表紙を見る度に、主の御霊を近くに感じます。

フサン
韓国釜山西地方部 影島支部
ジョン・ユン・モ
鄭允模



子供のページをもっと使いやすく

子供向けのページ、『キンダーシュテルン』(ドイツ語版。「子供の星」の意)が『デア・シュテルン』(ドイツ語版。「星」の意)のほかのページと一緒にホッチキスでとじられています。子供を持つ多くの会員にとって、使いやすいものではありません。子供たちは『キンダーシュテルン』を家庭や初等協会で用い、一方青少年や成人会員は『デア・シュテルン』をクラスや話に、また、ホームティーチングや家庭訪問に利用しています。この二つを同時に使うときは、子供向けのペー

ジを丁寧に外し、何らかの方法でそれをとじなくてはなりません。子供向けのページは、一般と青少年のページの間に隠れ、子供にとって簡単には見つけられないところにあるので、子供たちが記事を読んで動機づけられる機会が非常に少ないのです。このすばらしい道具をほとんど毎日のように利用しているわたしたちは、『キンダーシュテルン』を子供たちのためにもっと利用しやすくして下さるよう願っています。

スイス、チューリッヒステーク、
アルトシュテッテンワード
クリスチャン・グローブ、ラヘル・グローブ

編集者より—あらゆる年代の読者の皆さんにとって、『リアホナ』ができるだけ読みやすく、利用しやすい機関誌になることがわたしたちの目標です。昨年1998年の6月号からは製本に際し、子供向けのページを接着剤でとじるようにしました。とじたものはこれまでどおりほかのページにホッチキスで留めていますが、子供向けのページを取り外しても、別個のセクションとしてのりづけされているのでばらばらになることはありません。このように製本することで、子供向けのページをほかのページと離して利用していたできるように願っています。

読者の皆様からの国際機関誌に関するご要望、ご提案をお聞かせください。また、手紙や記事、アイデアを募集しています。あて先は以下のとおりです。
Internatioanl Magazine
50 East North Temple Street, Floor 25,
Salt Lake City, UT 84150-3223, USA

(日本語版編集室注—この記事は英語版『リアホナ』についての記述であり、日本語版『リアホナ』では現在のところ上記のような製本をいたしておりません。)



靈感を伝える言葉

大管長
ゴードン・B・ヒンクレー

教会

「末日聖徒イエス・キリスト教会はこの世の中でユニークな存在です。それは、永遠の父なる神と復活した主イエス・キリストが、まだほかの教会の教義や世の哲学によって心が鈍らされていない少年に御姿を現されることにより、もたらされました。その少年の心は純粹でした。その見通しは明らかでした。そのため、全能者から授けられた啓示を受け入れることができたのです。こうして、皆さん一人一人が読まれたであろう最初の示現に引き続き、神の力を示すほかの現れが続きました。イエス・キリストのもう一つの証である『モルモン書』、すべてのふさわしい男性に授けられる、神の御名により語る権能である聖なる神権です。この地上でこの教会に匹敵するものはありません。」¹

末日聖徒はクリスチャンである

「最大の誤解は、わたしたちがキリストに従う者ではないという考えです。この主張は常にわたしたちにまとわりついてきました。しかし、内容を伴ったものではまったくありません。この世界にキリストを信じている人がいるとすれば、それはこの教会の会員です。この教会の名称には主の御名が付いています。わたしたちの礼拝の中心はイエス・キリストです。わたしたちがクリスチ



「主はその民に偉大なことを期待しておられます。わたしたちは主の民の中に数えられます。主はわたしたちが主を愛し、主を礼拝し、主の御心を実践することを期待しておられます。」

ヤンではないという誤解は繰り返し語られ、宣伝されてきましたが、次第に沈静化しつつあります。状況は変化し、わたしたちは過去の時代よりもっと受け入れられるようになってきているのです。教会について言えば、今は偉大な善意の時代ではないかと思えます。」²

せいさん 聖餐会

「毎週聖餐にあずかることは、何と栄光ある祝福でしょうか。聖餐会に出席してイエス・キリストの犠牲の象徴であり、主が行われた偉大な贖いの業の記念である聖餐にあずかることは、何という特権でしょうか。わたしたちは主の犠牲と贖いの業によって、墓を超え、栄光の未来へと進むことができます。わたしたちすべてが聖餐会に集うように願っています。聖餐会を、与えられた機会として、すばらしい祝福としてとらえていただければと思います。」³

夫の責任

「伴侶を持つ男性の皆さん、皆さんには善き男性、善き夫となる大きな責任があります。伴侶を虐待してはなりません。子供を虐待してはなりません。妻子を腕の中に引き寄せ、あなたの愛と感謝と、妻子を大切に思う気持ち伝えてください。善き夫であってください。善き父親であってください。次のことを絶対に忘れないでください。日の栄えの王国の最高の位には、伴侶と手に手を取って行くのです。独りでは行けません。行くときは一緒に行きます。皆さんの伴侶は、皆さんが神の息子であると同一ように神の娘です。皆さんから最高のものを受け資格があります。皆さんが結婚した相手に愛と感謝と忠実心を示すようにしてください。」⁴

じゅうぶん 什分の一

「幼いころ、12月になるとわたしたち子供は全員、両親と一緒に監督の家に出かけて行きました。当時は集会

所に監督室がなかったのです。監督に会うには自宅に行かなければならなかったのです。監督はわたしたちを順番に呼んで、什分の一を幾ら納めたか、幾ら納めたかたかを聞きました。子供ですからほんのわずかな金額です。記録しておく手間の方が高くつくような額です。でも、価値はありました。幼いころから教会の什分の一の記録に載ったわたしたちは、それ以来、什分の一を納めることに苦痛を感じなかったからです。」⁵

若人よ、忠実でありなさい

「アロン神権を持つ少年の皆さん。そして、教会の若い女性の軍勢に加わる少女の皆さん。セミナーとインスティテュートに通う皆さん。信仰を守ってください。忠実な教会員であることを妨げるものは、すべて遠ざけてください。義の模範として誠実であってください。朝晩ひざまずき、祈りをささげてください。天の御父に導きと守りと祝福を求めてください。不道徳なことにはかかわらないでください。誘惑に駆られることもあるかもしれませんが、不道徳は皆さんを滅ぼします。文字どおり滅ぼすのです。わたしの方から何が誤りかを言う必要はないでしょう。何が誤りで何が正しいか、皆さん一人一人がもう分かっているからです。正しい方を選んでください。」⁶

教育

「若い兄弟姉妹の皆さんが可能なかぎり教育を受けることは非常に大切なことです。主は民が教育という過程を通じて、研究と信仰により、国々や王国、世界に関する知識を得るべきであると、実に明快に述べておられます。教育は皆さんにとって、機会という扉を開ける鍵です。犠牲を払ってでも受けてしかるべきもの、取り組む価値のあるものです。皆さんが精神と技術の両方を鍛えるならば、属する社会に大いなる貢献をすることができ、皆さんの模範は属するこの教会にも栄誉を与えることに



なるでしょう。愛する若い兄弟姉妹の皆さん、受けることのできる教育の機会をすべて活用してください。両親の皆さん、息子や娘たちが教育を受けて人生に祝福をもたらすことができるように励ましてください。」⁷

宣教師への勧め

「皆さんはよきおとずれである福音を^の宣べ伝える人々です。皆さんが教えることはよきことです。人々を幸福にし、生活を豊かにしてくれるものです。ですから皆さんはほほえみをもって、主が皆さんのために定めてくださった業を成し遂げるために出て行かなければなりません。それを実行すれば主が祝福してくださいます。そして、宣教師として得た強さは皆さんの人生の金字塔となり、伝道の日々は、生涯を通して喜びと感謝をもって振り返る日々となることでしょう。伝道期間はほんのつかの間です。全力で頑張りましょう。」⁸

「愛する若い兄弟姉妹の皆さん、受けることのできる教育の機会をすべて活用してください。両親の皆さん、息子や娘たちが教育を受けて人生に祝福をもたらすことができるように励ましてください。」

親切でありなさい

「中央幹部の一人としてジョセフ・アンダーソン長老がいました。102歳まで生きましたから、どの中央幹部よりも長生きです。彼は長年の間、ヒーバー・J・グラント大管長の私設秘書を務めました。グラント大管長が脳卒中で倒れて重態になったとき、ジョセフ・アンダーソン長老が夜に具合を見に行くと、大管長がアンダーソン長老にこう言いました。『ジョセフ、これまであなたに対して思いやりのない行いをしたことはありませんでしたか。』アンダーソン長老は答えました。『いいえ、グラント大管長。決してそのようなことはありませんでした。』すると大管長は涙を流しながらこう言ったそうです。『あなたに対して思いやりのない行いをしたことがなかったのであれば、うれしい限りです。』そして翌日、大管長は息を引き取りました。それにしても、長年仕えた人が仕えた相手のことを、思いやりのないことは一度もなかったと言えるのは何とすばらしいことでしょう。』⁹

新しく改宗した人々を養いなさい

「わたしは皆さん一人一人にお願いしたいと思います。バプテスマを受けた人の世話をしてください。宣教師は彼らに福音を教えますが、彼らの肩に腕を回して友達になり、質問に答え、問題を解決できるように力になることは、皆さんに与えられた機会であり、責任です。この教会に加わるのは簡単なことではありません。改宗者はそれまでの友達と別れ、交友関係を断ち切り、生活を変えて教会員になるのです。助けが必要です。友達が必要です。責任が必要です。^{ろうじやくなんによ}老若男女の区別なく、皆さんには機会が与えられています。それはバプテスマを受けた人々が教会の中で信仰をはぐくむことができるように見守ることで。これを怠れば、神はわたしたちに責任を求められることでしょう。」¹⁰

主の期待

「主はその民に偉大なことを期待しておられます。わたしたちは主の民の中に数えられます。ここにおられるほとんどすべての人が、罪の赦しを受けるためにバプテスマの水に入りました。皆さんは言うてみれば、一度墓に入り、古い自分を脱ぎ捨てて、新たな命を得て水から上がったのです。罪は赦され、主が行うように言われることを行う準備ができています。主は皆さんやわたしに何を求めておられるでしょうか。主は何をするように命じておられるでしょうか。主がわたしたちに期待しておられるのは、善良な男女になること、つまり、正直で、誠実で、信仰深く、思いやりのある男女になることです。主は御自分が完全であられるように、わたしたちにも完全を求められておられます。これは偉大な教えです。そして、主の王国であるこの教会に加わった人に期待されていることです。主はわたしたちが主を愛し、主を礼拝し、主の御心^{みこころ}を実践することを期待しておられます。『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』これがいちばん大切な、第一のいましめである。』（マタイ22：37—38）これはどうでもいい言葉ではありません。主がわたしたちに何を求めておられるかを示している言葉です。主を愛し、主のすばらしい生涯の模範に従って成長するということです。』¹¹ □

注

1. 1998年2月22日、サンチャゴのプライアでの集会
2. 1997年3月7日、カリフォルニア州ロサンゼルスでのKNBCのチャック・ヘンリーによるインタビュー
3. 1998年3月15日、メキシコのシューダードファレスでの地区大会
4. 1998年3月14日、メキシコのシューダードファレスでの地区大会の神権指導者会
5. 1997年8月12日、エクアドルのキトでのファイヤサイド
6. 1997年11月9日、メキシコのプロエブラでの集会



写真/シエリー・ガーンズ・挿入写真/ジョン・ルーク

- 7. 1998年3月9日、メキシコのエルモシーヨでの集会
- 8. 1998年2月16日、ガーナのアクラでの集会
- 9. 1998年2月14日、ナイジェリアのポートハーコートでの地区大会の神権指導者会
- 10. 1998年3月11日、メキシコのレオンでの集会
- 11. 1998年2月13日、カナリヤ諸島のラスパルマスでの集会

ホームティーチャーへの提案

1. 「そして、何であろうと聖霊に感じて語ることは、聖文となり、主の心となり、主の思いとなり、主の言葉となり、主の声となり、救いを得させる神の力となる。」(教義と聖約68：4)
2. 以上の抜粋の中から、ホームティーチングの担当家族にとって励ましや祝福になると思われるメッセージを祈りの気持ちで選びましょう。

**「皆さん〔たち宣教師〕は
よきおとずれである福音を
の
宣べ伝える人々です。
皆さんが教えることはよきことです。
人々を幸福にし、
生活を豊かにしてくれるものです。
ですから皆さんはほほえみをもって、
主が皆さんのために定めてくださった
業を成し遂げるために
出て行かなければなりません。
それを実行すれば
主が祝福して下さいます。」**



王妃 に育てられたわたし

ジョアン・ポーター・フォード、ラリー・ポーター・ガント

シ ユリラクサナ・「シュリ」・スーンタラフトは1924年7月4日、タイのバンコクで生まれました。父は王室の王子の主治医で、母はインタラサクサジ王妃の友達でした。シュリの家族はロイヤル・ティーク・パレスに住む王妃をしばしば訪れていました。シュリが6歳のとき、家族は王妃からシュリを引き取って育てたいという申し出を受けました。シュリがいつでも家族を訪問できるという条件でこの話はまとまりました。

王妃はまるで自分の娘のようにシュリを愛しました。「わたしは王妃のベッドの前にマットレスを敷いて、同じ寝室で眠りました」とシュリ姉妹は話しています。「窓にはカーテンなどがついていなかったため、ベッドの周りには大きな絹のネットが巡らされていました。毎朝、王妃と一緒に起きて、着替えをし、朝食を取り、そして王妃の前で本を読むのが朝の日課でした。朝食が終わると、ヨーロッパから来た修道女が教える学校へ行きました。学校にいる間は英語しか話すことができませんでした。授業が終わると、わたしは宮殿に戻り、王妃と一緒に食事をして、また本を読みました。このような生活が8年続きました。このため、学位を取った多くの人たちよりも、優れた教育を受けることができました。」

シュリは学校で、英語の『聖書』を

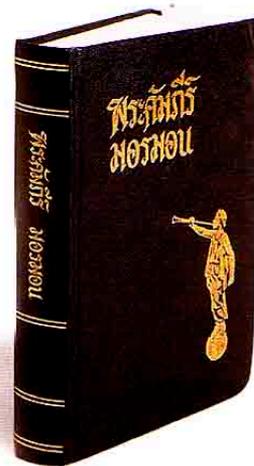
目にしていました。「わたしは、いつかこの本を読むことになるに違いないと思っていました」と当時を振り返ってシュリ姉妹は話してくれました。「けれども、家族の伝統で、国の宗教を大切にするように言われていました。」

シュリは17歳になるまで王妃と一緒に暮らしました。そして、チューラランコーン大学へ進みました。語学力が非常に優れていたため、彼女は第二次世界大戦後、政府高官グループの財務を担当する仕事を任せられました。

1968年にラリー・ホワイト長老とカール・ハンセン長老に出会ったとき、彼女は結婚して、子供にも恵まれていました。「わたしは最初、宣教師が大嫌いでした。けれども、長老たちはあきらめずにやって来ました。『モルモン書』は3か月間、本棚に置かれたままでした。ある日の晩、わたしは少し読んでみることにしました。『モルモン書』を手にとってお祈りしました。『この本の中に何か良いことが書かれているのであれば、どうかそれを知らせてください。』『モルモン書』を開いて、読み始めましたが、やがて読めなくなってしまいました。涙があふれてきたのです。わたしは『モルモン書』を抱き締めました。間もなく、わたしは2階の自分の部屋に入って、鍵をかけた。ひざまずいてお祈りしたのはそれが初めてでした。わたしは大声



左ページ——シュリラクサナ・「シュリ」・スーンタラフト。
背景——タイ式建造物の細部。
上——ロイヤル・ティーク・パレス。
下——タイ語の『モルモン書』





で呼びかけました。『お父様、わたしのお父様。』お父様がわたしの声を聞いておられることを感じました。長い間、祈りそして叫び求めました。祈りを終えて、起き上がると、一気に読み始めました。」シュリと二人の子供は、シュリの44回目の誕生日に当たる1968年7月4日にバプテスマを受けました。

王妃と暮らしていた間に身に付けた教育によって、シュリは『モルモン書』を英語で読めただけでなく、『モルモン書』をタイ語に翻訳するために大切な役割を果たすことになりました。翻訳作業は1970年に始まりました。そして、シュリは翻訳委員会の主任翻訳員を任されることになりました。1974年に翻訳が完成して、1976年にはタイ語の『モルモン書』が出版されました。

「わたしはこの翻訳作業を通して霊的な力を与えられました。異言と言語の賜物を授けてくださった天の御父を愛しています」とシュリ姉妹は話しています。

『モルモン書』の翻訳の承認を待っていた1975年に、彼女は『教義と聖約』の翻訳に着手しました。翻訳委員会のほかのメンバーは様々な理由で翻訳から離れたため、シュリは聖典翻訳作業にとって欠かせない存在となりました。シュリは日中は職場で働いていましたが、帰宅すると駆り立てられるように翻訳の作業に取りかかりました。できるだけ多くの節を翻訳して、毎日開かれる翻訳委員会の集会に提出するため

に、夜遅くまで机に向かっていたこともしばしばでした。ある日シュリはほかの教会員とともに清掃活動に参加しました。職場で数時間、一生懸命に働いた後だったため、ほかの人たちから家に帰って休むように勧められました。するとシュリはここにいる方が休まると言いました。家に帰れば、翻訳しなければならないという気持ちになって、眠ることができなかったからです。こうして『教義と聖約』の翻訳は1979年に完成しました。

王妃は1974年にこの世を去りましたが、その前にシュリは入院中の王妃を訪れました。王妃のベッドが置かれている部屋には王妃を取り囲むようにして大勢の侍女がそれぞれの階級に従って控えていました。「激しい痛みに襲われていたにもかかわらず、王妃はわたしが入って行くと起き上がって、『こちらへおいでなさい』と声をかけてくださいました。わたしが王妃のそばへ行くと、『あなたのことを今でも愛していますよ』とおっしゃいました。わたしはこれからもずっと王妃に感謝の気持ちを抱き続けると思います。王妃に育てられた間に多くのことを学んだことによって、わたしは『モルモン書』を読んで、福音を受け入れることができました。王妃のおかげで、タイ語を正しく書き、話すことを学び、この言語に『モルモン書』と『教義と聖約』を翻訳するに至ったのです。」□

**左上——1990年6月、タイから
初めての神殿訪問として
フィリピン・マニラ神殿に参入した
約200人の会員たち。
左——タイ式建造物の細部。**

おしえ
「この教が……わかるであろう」

七十人
ケネス・ジョンソン
絵/ブラッド・ティア

主の御心を行うことによるのみ、わたしたちは、福音の原則には永遠の価値があると確かに知ることができるのです。

何年も前のこと、わたしに仕事上の助言を求めてきたある依頼人が、彼の業務の内容を話してくれました。彼は父親と共同で中古の家具や家庭用品の販売を行っていました。オークションやマーケットセールに参加したり、家庭の不用品を買い取ったりして、商品を手に入れていました。そして、購入金額以上の値段で確実に売ることができるように、いつも注意を払っていました。

あるとき彼は、一人のお年寄りが亡くなった後で、家財をすべて買い取る契約を結びました。その家のある部屋に一枚の絵が飾られていました。彼はその絵を調べながら、自分がいつか、前の持ち主が気づかないでいたとても高価な品物や絵に出会うのではないかと考えていました。しかし彼は、その絵はそういうたぐいのものではないと判断し、壁から外すと、車に運び込んでほかの物と一緒にしました。

後で父親と二人で車から荷物を下ろしていたとき、父親はその絵を手にとってしげしげと見詰めながら、「絵のことをもっとよく知っていて、価値があるかどうか分かれば

いいのだが」、と言いました。すると息子は、決してそのような価値のあるものではないと答えました。それでも父親は、画廊を経営している友人にその絵を調べてもらう価値はあると感じました。

数日後、その友人からの知らせで、その絵は恐らく、少なくとも1万2,000ポンド（1970年代初頭の日本通貨で約1,044万円）、の価値はあるということでした。

その知らせに興奮した父親と息子は、すぐに画廊までその絵を取りに行くことにしました。今回は毛布を持って行き、その絵をそっと包みました。そして息子はしっかりと腕に抱えて店に帰りました。その後のオークションで、その絵は1万2,500ポンド（約1,087万円）で売られました。

この話をしながら、その依頼人は次のように言葉を結びました。「あのような平凡な絵にどうしてそれほどの多額のお金を払おうとする人がいるのか、わたしには考えられません。」

わたしはこの経験についてしばしば考え、またその若者の反応について思いをはせました。彼は絵にまったく興味がありませんでした。そしてその絵はほとんど、あるいはまったく価値がないと

わたしたちは福音の実を食べたいならば、自分自身の生活の中に進んでその種をまき、従順によってそれらに養いを与える信仰を持たなければなりません。



判断したのです。

わたしたちは自分の生活の中で福音の価値をどのように判断しているでしょうか。わたしたちは救い主に恩があることをほんとうに理解しているでしょうか。わたしは自分自身の気持ちを突き詰めていくとき、しばしば聖文について深く思い巡らします。ヨハネによる福音書に記されているとおり、イエスが5つのパンと2匹の魚で5,000人に食物を与えられたその奇跡の後にイエスを捜した人々と同じ動機で、わたしは行動していないか、と。

「群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知って、それらの小舟に乗り、イエスをたずねてカペナウムに行った。

そして、海の向こう岸でイエスに出会ったので言った、『先生、いつ、ここにおいでになったのですか。』」（ヨハネ6：24-25）

ヨハネによる福音書第6章26節のジョセフ・スミス訳によれば、彼らはイエスの勧告に従いたいと思ったからでも、奇跡を見たからでもなく、パンを食べて飢えを満たされたのでイエスを捜したと、イエスは彼らに告げておられます。

それはあの若者と絵の経験にどれほど似ているのでしょうか。救い主がこの地上で教導の業に携わっておられたときに、救い主にまみえた多くの人は、救い主が何を行い、どのような人物であったかを表面的に理解したにすぎません。このことは、5,000人に食物が与えられた後のもう一つの出来事によって立証されています。

「そして郷里に行き、会堂で人々を教えられたところ、彼らは驚いて言った、『この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか。』」

この人は大工の子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。

またその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか。こんな数々のことを、いったい、どこで習ってきたのか。』（マタイ13：54-56）

イエスと一緒にいた多くの人が、イエスを、神の御子ではなく、偉大な奇跡を行う人、あるいは教師と見ていたことは明らかです。

それでは、わたしたちが真の理解を得るにはどうすればよいのでしょうか。その答えはユダヤ人にあてた救い主の言葉の中に明らかにされていると思います。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも……この教が……わかるであろう。」（ヨハネ7：17）

わたしは、クリスチャンの価値を教え、それを守った家庭で育てられたことに感謝しています。しかし、福音の回復を知ることから得られる恵みは得ていませんでした。後に、わたしは末日聖徒イエス・キリスト教会のメッセージを探究するように勧められたとき、新しい教義を一つ一つ深く考える必要に迫られ、その結果しばしば生活スタイルを変えることになりました。しかし、それらの変化は受け身の信仰、あるいは単なる知

わたしたちは従順を植えた後、主の言葉によって生活を続ける必要があります。そうするならば、従順の実が生活の中で生長するのを目にするでしょう。





識上の同意の結果として起こったものではありません。行いによって、すなわち信仰を働かせることによってそれを実証してきました。わたしは、自分にとって新しい福音の原則を学び、試すことによって、その原則が真実であることをいつも理解してきました。

この過程を踏んだ一例が断食の律法です。わたしが新たに信じるようになった宗教のことを両親に詳しく話したところ、両親は心から賛成してくれました。しかし、わたしが24時間の断食をしたいと言ったとき、母はほんとうに心配しました。母はあきれられるばかりで、良いことだと認めてはくれませんでした。そして母は、わたしの健康が損なわれるのを恐れ、家にいる間は断食することを決して許さないといい、断固として譲りませんでした。

わたしは、福音について始めにわたしに紹介してくれた会員であるパメラに、母が反対しているので残念ながら断食できないことを告げると、気持ちが楽になりました。ところが、彼女はすぐさまこう言いました。「それなら簡単に解決できるわ。あなたが週末にわたしたちの家に泊まって一緒に断食できるように、わたしの両親に話してみるわ。」

このようにして、わたしは断食の律法を守ることになったのです。わたしは断食日ごとにこの律法を守り続け、次第に断食の原則について証^{あかし}を得るようになりました。

ヒーバー・J・グラント大管長はしばしば次の言葉を述べました。「継続して行う事柄は、容易に行えるようになる。それは物事の性質が変わるからではなく、わたしたちの力が増すからである。」(Bryant S. Hinckley, Heber J. Grant: Highlights in the Life of a Great Leader [1951], 49)

新たな真理の原則が一つ一つわたしたちの生活の中に生かされると、それらは一つとなって、真理の神聖な源についての究極の証となるのです。ブリガム・ヤング大管長は、「神が明らかにされたすべての原則はそれらが真実であることを人の心に確信させる」と自分の信念を述べています(『歴代大管長の教え——ブリガム・ヤング』78)。わたしは福音の中で成長するにつれて、自分の経験から、行うことによって、また知ることによって永遠の真理を学ぶというこの教えが分かってきました。

わたしはパメラと一緒に歩きながら話をした1959年7

月の晴れた日曜日の午後のことを、今でもはっきりと思い出すことができます。わたしはバプテスマの儀式によって教会の会員になろうと考えていました。するとパメラが言いました。「宣教師たちは什分の一^{じゅうぶん}についてあなたに教えたかしら。」

「その什分の一って、何？」わたしは尋ねました。

パメラは、会員は神の律法に従って、そして天の御父が与えてくださったすべてのものに対する感謝のしるしとして、収入の10パーセントを納めることを話してくれました。

ショックのあまり気が遠くなる思いをしたことが、人生の中で何度かありましたが、このときもそうでした。「10パーセント！」わたしは繰り返しました。「それはできないよ。什分の一を納める余裕などないよ。」

パメラは静かに答えました。「わたしの父は納めているわ。妻と4人の子供がいて、父の収入はあなたよりも少ないのよ。」彼女はわたしが支部で知り合いになった別の家族のことも述べて、彼らはわたしよりも少ないお金で生活しており、6人の子供もいると言いました。パメラの話から分かったのは、什分の一がわたしにとっても価値のある目標だということでした。彼らができるのなら自分にもできる、そう思ったのです。

11年後、什分の一の律法への決意を試すほんとうの試練に直面して、わたしは、それまで什分の一を納め続けることによって信仰がとて深まっていたことに気づいたのです。什分の一を納めることはもはや、わたしにとって単なるお金の問題ではありませんでした。その試練への対応として、わたしは信仰を働かせました。そして、それによって祝福を受けたのです(マラキ3:10参照)。

回復された福音を紹介される以前、わたしは安息日の試合も含めて、フットボールをすることに多くの時間を費やしてきました。わたしは主の日を尊ぶように育てられてはいましたが、安息日に関する教義を理解し、それに伴う祝福を頂いたのは、この教会に出会って原則に従うようになってからのことでした。日曜リーグのチームから抜けることは大きな犠牲でしたが、それがわたしの改宗につながりました。安息日を守ることが人生における福音の価値を認識する助けとなったのです。

3年後、イギリスのノーウィッチで教会堂の建築が始





まったとき、わたしはその建築プロジェクトで手助けができるように、土曜リーグのチームからも抜けました。それまで、わたしの視界を制限していた利己主義の霧が消散し始め、新たにパノラマのような視野が開けて、人生をより深く理解し、大切に作る気持ちが増してきました。

わたしたち自身の中に起こるこの変化が、ユダヤ人であつた救い主の言葉の中に述べられています。ヨハネによる福音書第8章31節から32節です。

「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら（これを次のような意味に解釈してほしいと思います。「もしわたしの教義にかなった生活を続けるなら」）、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。

また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」

これらの言葉は、行うことと知ることの関係を強調しています。

健康管理プログラムを行うことと、生活の中で福音の原則を応用し、それを理解することとの間には、類似点があると思います。わたしたちが定期的に体を動かす活動をしていても、その効果は目を見張るほどではないかもしれません。しかし、病氣やけがで、あるいは意欲がなくて健康管理プログラムを長い期間中断すると、以前の水準を取り戻すのはとても難しいことが分かります。中には、がっかりしてやる気をなくし、低い水準に甘んじる人々もいます。

福音の原則にかなった生活をするということについても、このことが言えます。効果は必ずしも顕著ではありません。そのため、教義の真実性に疑問を抱き、信仰を失い、教会の活動をやめてしまう人がいるかもしれません。霊的な健康を取り戻す努力をする人々は、福音には偉大な価値があることに気づきます。そうでない人々は滑り落ちて、主とともに歩まなくなってしまうのです。

知恵の言葉にかなった生活をする人々と「数々の戒めに従順に歩む」人々は「そのへそに健康を受け、その骨に髓を受けるであろう」という約束が与えられています。「これらの言葉を守って行うことを覚え、数々の戒めに従順に歩む」という訓戒は重要です（教義と聖約89：18）。

第19節には、知恵の言葉を超えてさらに多くのものに当てはまるもう一つの要素が加わっています。この節

には大切な鍵^{かぎ}、つまり行うことと知ることの関係が含まれています。「また、知恵と、知識の大きいなる宝、すなわち隠された宝さえ見いだすであろう。」

普通の状況では、容易に試すことのできない教義があるかもしれません。それでも、福音の原則に忠実に従うことによって初めて、救い主の贖罪^{しよくさい}が生活に数々の祝福をもたらすことを身をもって確信し、救いの計画を理解することができるのです。

行うこと（従順であること、あるいは戒めを守ること）と知ること（実践することによって福音の真理を知ること）の関係については、もう一つの真理があります。もう一つのこの真理とは、新しい知識について主がわたしたちの心と意思をお試しになるというものです。主がこのようになさるのは、試練を乗り越えることにより、言ってみれば、福音の真理を自分の魂に強く刻み込むことができるからです。わたしたちの理解とわたしたちの心はさらに清められて金のようになり、わたしたちの心の中の確信は、試練を味わった後に尊いものとなります。例えば、主はモルモンに、わたしたちが終わりの日に受けるはずのある情報については金版に記さないように指示されました。その理由はこうです。「彼らの信仰を試すのに必要である。彼らはこれを与えられたとき、これらのことを信じるならば、そのときにはもっと大いなることが彼らに明らかにされる。」（3ニーファイ26：9）

ヨブの話は、この試練の過程を通して自分自身の人生の中で教訓を得た人の話です。彼は大切なものすべてを奪われました。しかし、試練の間中、義にかなった生活をするにより、もっと大切なものを見いだしたのです。神は「わたしの歩む道を知っておられる。彼がわたしを試みられるとき、わたしは金のように出て来るであろう。」（ヨブ23：10）

回復された福音の証は、神聖な教義と永遠の原則が一緒に織り込まれた、とても美しいデザインの織物に似ています。定められたパターンに従って織り込む人々、すなわち福音に従った生活をする人々だけがその真理を見いだすことができるのです。人の心の内にある潜在能力を十分に発揮させる方法として、これ以上に優れたものはほかにありません。

わたしたちは主の御心を行うとき、教義が真実である



ことを実際に知ることができます。そして、信仰と信頼の試しを受けた後で、わたしたち自身がそうであったように、個人的な知識が「金のように出て来る」ことでしょう。□

定められた方法で福音に従った生活をする人々だけがその真理を見だし、報いを享受できます。人の心の内にある潜在能力を十分に発揮させる方法として、これ以上に優れたものはほかにありません。

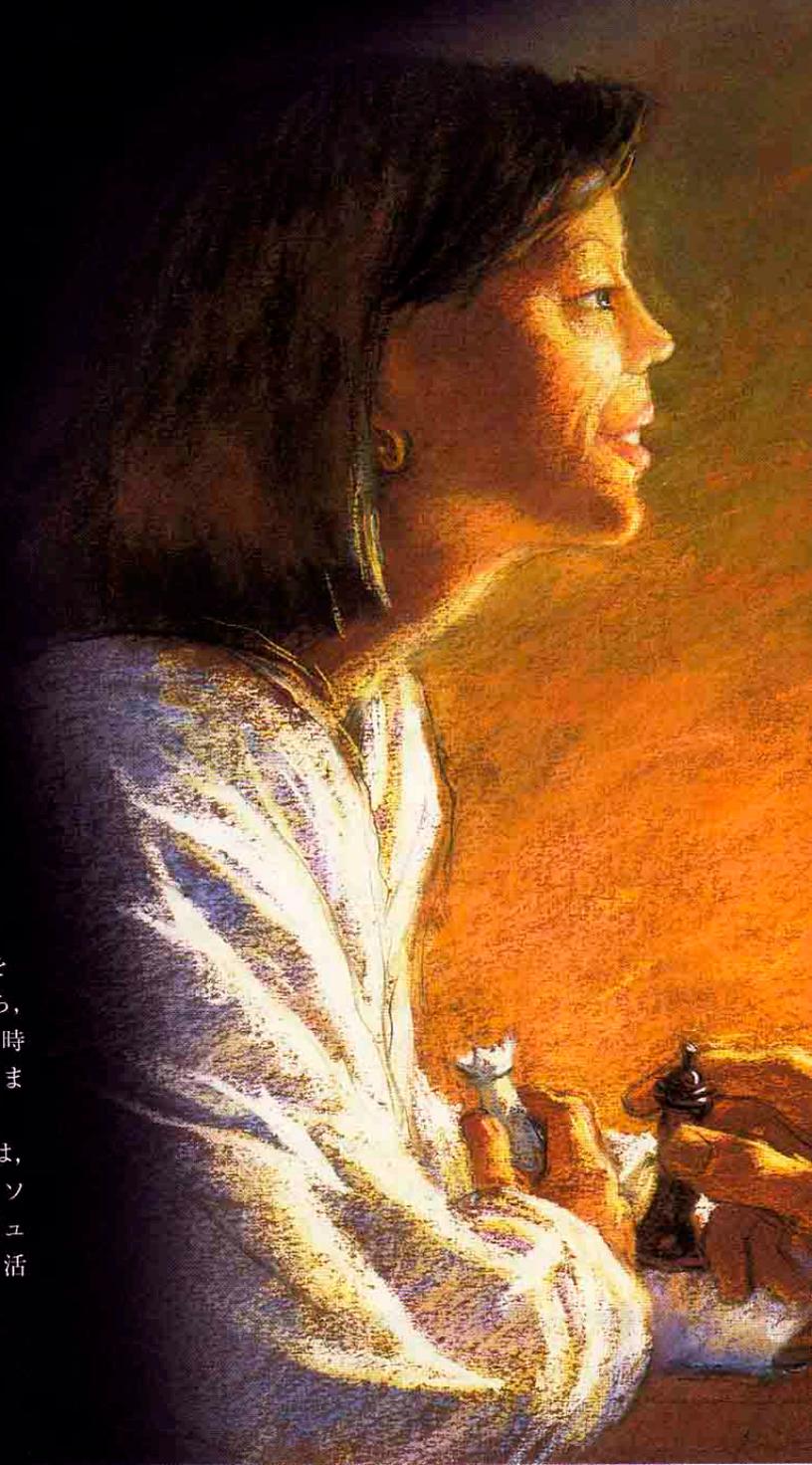
我が家で

マ

レーシアでは、結婚後に伴侶とデートするという習慣は、ほとんど聞きません。主人とわたしが初めてこの勧めを知ったのは、書籍や機関誌、また同じ支部に集う、クアラルンプール在住のアメリカ人の会員からでした。デートは、結婚後も夫婦が引き続き愛を伝え合ううえで良いことだと感じ、わたしたちもこの「外国の」習慣を試してみることにしました。

初めは、手のかかる子供がいなかったので、ともに夕べを過ごすことは容易でした。でも、その後子供が次々に生まれると、新しいデートの方法を考えなければなりません。夜にベビーシッターを見つけるのは大変なので、子供たちが床に就いてから、何度も自宅でデートしました。このホームデートは、時折外出して行くデートに比べ、何ら劣るところはありません。

一緒に楽しめる活動はいろいろありました。時には、ちょうど映画館にいるように、スナックをほおばり、ソーダを飲みながら、ビデオを見ました。また、コンピューターやチェスなどをするときもあります。そういう活動をした夜はいつも、最後は笑い声に包まれました。



デート

ゲオック・リー・トン

絵/アレン・ガーツ



定期的に行っている活動は、家族の写真を大きなポスターにはり付けることです。後で、その完成したポスターを額に入れ、階段の壁につり下げます。今では、かなりたくさんのポスターがあるので、時折差し替えています。ポスターを作る晩は、成果があるばかりか、心が温かく、感傷的な気持ちになります。

あるバレンタインデーの日に、わたしはキャンドルライトをつけて、特別なディナーを準備しました。心地よい音楽を流すと、実にロマンチックな雰囲気を感じました。こうして定期的にデートすることによって、わたしたちの結婚生活はもっとロマンスに満ちたものとなりました。

ホームデートでの活動リストの項目は、着実に増えています。デートをするとは、ともに過ごす方法を見だし、時間を取って互いに良い関係を築き、養うことであると分かりました。日々の暮らして困難な状況にあるときは、ホームデートをして一緒に話ができる時間を心待ちにします。

主人とわたしは、この「外国の」習慣がわたしたちの結婚生活を強めるうえで、大きな助けとなることを知りました。□



「ひざまずき祈り、瞑想されるイエス」マイケル・J・ネルソン画

質疑応答

祈りが単なる繰り返しになるのを防ぐにはどうすればよいでしょうか。

わたしは自分の受けたすべての祝福に感謝していますが、その祝福を挙げていると毎日同じ言葉を祈りの中で繰り返しているような気持ちになります。

祈りが単なる繰り返しになるのを防ぐにはどうすればよいでしょうか。

本誌の答えは、問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

回答

祈りは、わたしたちが天の御父の子供としてできる最も大切な行いの一つです。祈りは、天の御父との霊的な交わりができるよう、天の御父がわたしたちに備えてくださった方法です。祈りは、礼拝の一形式です。わたしたちは、感謝の気持ちを表すため、導きと祝福を求めため、また答えを得るために祈ります。

教会には形式の定まった祈りが3つあります。救いに不可欠な最初の儀式であるバプテスマの祈り、そしてバプテスマの聖約を更新する^{せいさん}聖餐会の二つの祈りです。ほかの場合には、個人で祈るにしろ、ある集まりを代表して祈るにしろ、その場にふさわしくまたは^{みなま}御霊に導かれるままに、自分自身の言葉や言い回しを用います。

わたしたちは無意識のうちに、同じ言葉や言い回しを使う習慣に陥ることがよくあります。これは問題です。自分の語っている言葉について考えなくなると、祈りが意味のないものになる可能性があるからです。祈りに誠意が込められているかどうかは、毎回の祈りに異なる言葉や言い回しが使われているかどうかで計られるものではありません。誠意とは、心の中にあふれる気持ちや霊の奥底に感じる切なる思いにほかならないのです。

イエス・キリストはどのように祈ればよいかわたしたちに教えてくださいました。イエスは、簡潔でありながら深い意味を持つ言葉を用いられました。また、ほかの人に見せるために祈ることがないようにと諭されました。「無益に繰り返すこと」、すなわち誠意のない言葉を何度も繰り返し用いることがないようにと勧められました(マタイ6:5-8; 3ニーファイ13:5-8参照)。

聖文の中にも祈りについて教えた箇所があります。『モルモン書』の中で、アミュレクは次のように勧めています。「牧場にいるときには、まことに、すべての家畜の群れについて神に叫び求めなさい。

家にいるときには、まことに、あなたがたの家のすべての者について、朝も昼も晩も神に叫び求めなさい。

しかし、これだけではない。あなたがたは自分の部屋でも、人目に触れない場所でも、

荒れ野でも、あなたがたの心を注ぎ出さなければならない。

また、声を出して主に叫び求めないときでも、あなたがたの幸いと、あなたがたの周りの人々の幸いを気遣う気持ちを心に満たし、それが絶えず主への祈りになるようにしなさい。」(アルマ34:20-21, 26-27)

主はわたしたちが関心を持つすべての事柄について祈るよう望んでおられます。実際、主はわたしたちに「常に祈」るように命じておられるのです(2ニーファイ32:9)。

祈りの中には、いつも忘れることなく主に感謝していることを盛り込むようにしなければなりません。わたしたちは自分たちが受けている祝福を天の御父に感謝することによって、あらゆる善の源、すなわち天の御父に思いを集中させることができます。わたしたちが受けているあらゆる祝福に思いを向けることによってわたしたちはもっと幸福になることができます。皆さんは、いつも天の御父に感謝したいと思う祝福が数多くあることでしょう。もし、習慣からではなく心からの感謝の気持ちとして行うのであれば、同じ祝福について毎日繰り返し感謝の気持ちを述べることは問題ではありません。

ただ、もし祈りの中で、暗記した言葉を考えもなしに復唱しているだけだとしたら、自分が祈る理由について考え直すべきでしょう。

もしこのような習慣に陥っているとしたら、以下の読者の提案から幾つか試してみてください。

●天の御父に語りかけている自分を想像する。

● 祈る前に少し間を置いて、自分の祈る目的と祈る事柄について考えてみる。

● ある一定の祝福について、なぜ感謝しているのか主に説明する。

● 具体的な問題を解決するために具体的な助けを願う。

● 常に「御心が行われますように」と祈ることを忘れない。

あなたが日々祈る事柄はそれほど大きくは変わらないかもしれませんが。しかし時間を取って、自分が必要とする事柄やこれまで受けた祝福について考え、主が自分に与えてくださったすべてのものに感謝するのは、祈りをより意義深い効果的なものとするきっかけとなる素晴らしい方法の一つとなるでしょう。

読者からの提案

祈りが単調になり、天の御父がわたしの祈りを聞いておられないようでむなしく感じることがありました。そのような祈りに変化がもたらされたのは、真心から祈り、天の御父と自分の思いすべてをお話するようにしたときからです。また、わたしは祈るとき、神が自分に抱いておられる大きな愛について考えるようにしています。

コロンビア・ネイバステーク、

ラスバルマスワード

ホルヘ・アンドレス・アルザテ

わたしたちの祈りは、時々同じ内容の繰り返しになることがあるかもしれませんが、それでも真心からの、信仰によってささげられた祈りであれば問題ありません。イエスはこう言われま

した。「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヨハネ15:7)

フィリピン・マーシン地方部、
マーシン支部

シェリー・S・カンボス

わたしたちは祝福に感謝するときに、祈りそのもの、すなわち天の御父との交流を図る手段が与えられていることに感謝する必要があります。

フィリピン・カビテステーク、
イムスワード

マリアヌ・R・ガルシア

聖文を読み深く考えると、祈るときにもっと霊的になれます。神が持っておられる力について考えると、祈りはまったく違ったものになり、心からわき出る祈りになります。

グアテマラ・グアテマラシティ・

ピヤエルモサステーク、

シューダードリアルワード

マリエラ・パレデス・マルケズ

毎日の日課は同じように思えますが、わたしたちの経験は日々異なり、その経験を通じて進歩成長します。一日の出来事について振り返ると、祈るときに話すことや感謝することがたくさんあると気づきます。

ニュージーランド・

オークランド伝道部、

関口奈津子姉妹



ホルヘ・アンドレス・アルザテ



シェリー・S・カンボス



マリアヌ・R・ガルシア



マリエラ・パレデス・マルケズ



関口奈津子姉妹



ロドリゴ・セザール・ゴボ長老



ディジー・ラケル・サラザール・サラビア



タンギリマ・サホイヤ



ラスガナ・マラ・コルイヤ姉妹



エリサベタ・マランゴン



エルシー・D・ビスガ



ジョル・デ・ロサリオ・デラ・クルーズ



マルセロ・レイバ長老



アントニー・L・シルベリ

天の御父に祈るときにはいつでも、現世での父親に話すようなことについて天の御父にも話すよう努力します。「祈りの段階」にはこだわらないようにしています。天の御父に心を開き、心からの気持ちを伝え、天の御父が自分のそばにいらっしゃるような気持ちで話します。このような方法によって単なる繰り返しの祈りはなくなります。ブラジル・ポルトアレグレ南伝道部、ロドリゴ・セザール・ゴボ長老

人生において受ける祝福には幾つかの種類があるということを考慮に入れるべきです。

だれにでも共通に与えられる祝福、すなわち一般的な祝福と祈りによる願いに対する答えとして与えられる個人的な祝福、それから自分たちは求めなかったけれども主がわたしたちの益となると思って与えられる祝福があります。感謝すべきことがほんとうにたくさんあるのですから、毎日同じ祈りを繰り返す必要はありません。

さらに、天の御父が与えてくださるあらゆる祝福への感謝についてだけ祈るべきではありません。わたしたちはほかの人々に食べ物や住む家、癒しや改宗、贖いなどの祝福が与えられるように祈ることもできます。また自分の弱さに対する赦しや自分が必要としているほかのあらゆる事柄を祈り求めることもできます。

マダガスカル・アンタナナリボ地方部、アンタナナリボ第4ワード
リンダ・アンドリアミサマルアル

家族の祈りを聞きながら成長する中で、どのようにしたらもっと真心から、異なる内容で祈れるかを学びました。真心からの祈りは心の底からわき出るものであり、そのような祈りであれば、同じ内容のことを何度口にしてもかまわないと思います。

サモア・パゴパゴ・マブーサガステーキ、マブーサガ第1ワード、タンギリマ・サホイヤ

主から授かり、自分が享受している数え切れないほどの祝福に感謝すると同時に、心を開いて自分が主をどれほど愛しているか伝えるべきだと思います。主はわたしたちを愛しておられます。主は御自身に対するわたしたちの愛を耳にするときに喜ばれます。主にとって、真心からささげる感謝の祈りは単なる繰り返しではありません。

イタリア・ベニスステーキ、トレビゾ支部
エリサベタ・マランゴン

神がわたしの祈りに疲れることなくこたえられるとすれば、わたしも疲れることなく神に同じことを語るべきだと思います。わたしの祈りの内容が毎回ほとんど同じだとしても、神は真心からの祈りだということを御存じであり、耳を傾けてくださいます。わたしは、このような関係を維持する方が、神に対する感謝の気持ちをまったく表さないよりもずっとましだと思います。

フィリピン・マロロスステーキ、ブストス支部
ジョル・デ・ロサリオ・デラ・クルーズ

救い主は、わたしたちに祈りの方法を教えられました（マタイ6:5-13参照）。わたしたちは祈りの中で、日々必要とする事柄を求める前に、受けた祝福に感謝します。

主はこのように語られました。

「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。

あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。」（マタイ6:6, 8）

オランダ・ロッテルダムステーク、
ロッテルダム第2ワード
アントニー・L・シルベリ

もし天の御父に心から導きを求めるなら、天の御父はあなたの祈りを聞くことを決してやめたりはなさらないことに気づくでしょう。もしあなたが心を開き、信仰をもって祈るなら、たとえ祈りの言葉は同じであっても、天の御父はいつもそこにおられます。

神は、わたしたちの恐れや悲しみも含めて、すべてを御存じですが、それでもわたしたちの祈りを待っておられ喜んで聞いてくださいます。

ニカラグア・チナンデーガ地方部、
チナンデーガ支部
ディジー・ラケル・サラザール・サラビア

『モルモン書』はエノスの経験をを通して、祈りに関する力強い模範を教えてください。エノスは次のように書いています。「すると、わたしの霊は飢

えを感じた。それで、わたしは造り主の前にひざまずき、自分自身のために熱烈な祈りと懇願をもって造り主に叫び求めた。」（エノス1:4）

わたしたちと同様、エノスには具体的に必要としていることがありました。もしわたしたちが自らの思いを御霊の導きにゆだねたら、毎日熱烈な祈りをささげることができます。信仰が増し加えられたら、預言者エノスと同じように、祈りは聞かれるだけでなくこたえられると知ることができます。

ブラジル・ベレム伝道部、
ラスザナ・マラ・コルイヤ姉妹

今日は昨日と違います。また明日は今日と違います。つまり、毎日感謝すべき新しいことが何かあるということです。

わたしたちが友人に話を打ち明けるようにして天の御父に祈ると、御父は喜ばれると思います。わたしは毎日経験するすべての祝福や試練を天の御父に感謝し、わたしの欠点を赦してくださいよう願ひ、次の日にはもっと改善できるように天の御父の助けを祈り求めます。

フィリピン・ラスピナスステーク、
ラスピナス第2ワード
エルシー・D・ピサグ

わたしは祈るときに自分がだれに話しかけているのか考えるようにしています。わたしは天の御父が与えてくださる祝福の一つ一つに感謝し、日々の出来事だけでなく永遠に関する出来事も含めて、毎日の経験の一つ一つに感

謝します。毎朝その日に行おうとする事柄を天の御父に伝え、夜は天の御父に結果を報告し、天の御父の助けに感謝します。

チリ・オソルノ伝道部、
マルセロ・レイバ長老

「質疑応答」のコーナーでは、下記の質問に対する皆さんの意見をお待ちしています。締め切りは1999年8月1日です。あて先は下記のとおりです。QUESTIONS AND ANSWERS, International Magazines, 50 East North Temple Street, Floor 25, Salt Lake City, UT 84150-3223, U.S.A.

またはEメールでCUR-Liahona-IMag@ldschurch.orgまでお送りください。

住所、氏名、年齢、所属ステーク／地方部、ワード／支部名を明記のうえ、日本語で意見をお寄せください。手書き、ワープロ、いずれでもけっこうです。手書きの場合は、かい書で読みやすい文字でお書きください。できれば写真を同封してください。ただし返却は致しかねますので、あらかじめご了承ください。類似した答えの場合は、代表的なもの1通を採用させていただきます。

質問——日曜学校のクラスになかなか集中できません。レッスンがいつも以前に何度も話した内容と同じような気がするのです。レッスンにもっと積極的に参加し興味を持つためにはどうしたらよいでしょうか。□

.....その1か所を除けば」





信仰箇条第13節はわたしたちが適切な娯楽を選ぶうえで指針となる。——「どのようなことでも、徳高いこと、好ましいこと、あるいは誉れあることや称賛に値することがあれば、わたしたちはこれらのことを尋ね求めるものである。」



所を除けば」という言葉についてわたしは考えました。映画やそのほかの娯楽について話す人々の会話の中で、この言葉を何度も耳にしたことがあります。この言葉は、その作品の大部分が良ければ、悪い箇所があっても大目に見ていいということを暗示しています。

しかし、わたしは「気味の悪い部分」がどんどん良い作品の中に入り込んできていることに気づきました。でもこれがほかの種類の商品であれば、その商品から悪い病気に感染するのにだれも耐えられないでしょう。例えば、幾ら「すばらしい」鶏肉でも、わたしたちはサルモネラ菌に感染した部分を除いて食べるでしょう。わたしは映画やテレビ番組の内容を、見てからではなく、見る前に判断することにしました。もし嫌な気持ちを感じたら、その場で映画館を出たり、テレビを消したりします。容易なことではありませんでしたが、大きな報いを受けました。悪い映像で心が乱されることがなくなったので、主の御霊を以前にも増して感じられるようになりました。

何か気になることがあると、決して見過ごしにせず、ほかのだれかに知らせるようにしました。電話や投書による結果は、結果が分からないこともしばしばですが、すぐに分かることもあります。

あるときは、雑貨屋で、会計に並ぶ人から完全に見える所に卑わいな表紙の雑誌が置いてあり、不快に思うことがありました。ある日、わたしは帰宅してから、その雑貨屋の経営者に電話をしました。そしてその店で買い物を楽しんだけれども、性的に誘惑する表紙の雑誌が皆の見える所に置いてあり不快だったことを伝えまし

た。次にその雑貨屋に買い物に行くと、例の雑誌があまり人目につかない所に置いてありました。

わたしの経験によってほかの人々も励まされ、不快なものに対して声を上げるようになりました。ある友人などは自分の娘がダンスグループの衣装を恥ずかしくて着られないということをごっそり話してくれました。その娘は観衆の中にもそのグループの上演中に目をそらしている人がいることに気づきました。わたしはその友人に「ダンスのインストラクターと話してみるよう娘さんを励ましてみたら」と勧めました。彼女は実行しました。後に続く上演からは、そのインストラクターが体を露出する部分ではなく覆う部分の増える衣装を注文したので、わたしも友人も喜びました。

何か建設的で人の心を鼓舞するものがあるときにも声を上げるのは大切です。ある晩、わたしたち家族はあるテレビ番組を見て全員が喜びを感じました。その番組の中に1か所も不快な部分がなかったことに気づいたので。そこでわたしはその番組の制作者に手紙を書き、自分たちがその番組をどれほど楽しんだか伝えました。わたしたちの社会に善を増し加える人々は感謝を受けるに値するのです。

わたしは御霊から続けて靈感を受け、家族の娯楽として何を選ぶかじっくり考えたり、娯楽が福音の精神と調和しているかどうか確認したりするときに積極的な役割を果たすことができたことに感謝しています。わたしは、自分たちを「気味の悪い」気持ちにさせるものに忍耐する必要はまったくないと気づきました。わたしたちは周囲に影響を及ぼすことができるのです。□

自制心を養う

わたしたちは地球に来て、肉体を頂きました。そして今、その肉体を従わせる方法を身に付けるよう要求されています。ブリガム・ヤング大管長は、自制は永遠の命を得るうえで欠かすことができないと教えています。「[肉体]を完全に霊に従わせなければなりません。そうでなければ、肉体がよみがえって永遠の命を受け継ぐことはできないのです。」

皆さんはすべてをキリストの律法に従わせるまで、熱心に求めてください。」「『歴代大管長の教え——ブリガム・ヤング』224)。

どのようにして自制心を身に付けるか

自制心を身に付ける基本は、神に関する教義を学び、それに従って生活することです。努力の成果を見る度に、わたしたちは強められ、「キリストの満ちみちた徳の高さに」近づいていきます(エペソ4:13)。わたしたちの目標は、わたしたちの偉大な模範である御方が「父よ、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」と言われたように(マタイ26:39)、わたしたちも自分の要求を抑えてそう言えるようになることです。

誘惑を受けたときに直ちにそれに抗すること、またふさわしくない行動に駆り立てる思いを打ち消すことが、自制心を身に付ける大切な要素です(1テサロニケ5:22参照)。このことは、中毒になりやすい物質や習慣となりやすい行動について特に言えることです。このような中毒症状や習慣に打ち勝つには、宗務指導者の助けや専門家の助けさえ必要かもしれません。神の助けが必要なことは言うまでもありません。

自制心を養おうとするとき、わたしたちは、祈りと断食が大きな力を発揮

することに気づくはずで、祈りと断食は自制心に働きかけます。またわたしたちは、祈りと断食によって天の力の助けを得ます。事実、主がわたしたちに求めておられることの多くは、自制心を養ううえで助けとなります。スペンサー・W・キンボール大管長は次のように述べています。「自分が働いて得たすべてのものの10分の1を財布から取り出して、再分配するためにそれを指導者に渡すことは、信仰の試しの一つです。断食は自分に勝つことです。自分自身よりもほかの人々のことをいつも考え、まったく利己心を持たなくなることは、自分に勝つための大きな一歩です。卑劣で無礼な人を赦すことは、完全に近い人の行為です。」(The Teachings of Spencer W. Kimball edited by Edward L. Kimball [1982], 204)

互いに助け合う

苦勞しながら自制心を養おうと努力している人のあら探しをすることは簡単です。しかし神がわたしたちに望んでおられるのは、努力を助けることであって、じゃまをすることではありません。マービン・J・アシュトン長老(1915-1994年)は、家庭の問題で心を悩ましていたために扶助協会会長の集会でかんしゃくを起こしてしまった一人の姉妹の話を紹介しています。その姉妹は集会の後、恥ずかしく思い、おわびの電話をかけました。

「会長の友人たちは、だれもが寛大な態度で、そのことはもう気にしないようにと言ってくれました。しかし彼女は、皆が自分のことを軽べつしているのではないか、それだけの人間にしか見てくれなくなるのではないかと思い、心配になりました。その夕方、

夕食の時間を迎えようとしていたところにドアのベルが鳴りました。ドアを開けると、会長会の姉妹たちが食事を手にして立っており、こう言ったのです。『今朝の集会であなたがいつものあなたらしくなかったのは、きっと疲れているからだだろうと思ったの。それでわたしたち、簡単な食事でもお持ちすればお役に立てるかしらと思って。あなたに愛をお伝えしたかったの。』(「舌は鋭い剣となる」『聖徒の道』1992年7月号, 21)

幼い子供は、倒れたり起き上がったりしながら、歩くことを学びます。自制心もしばしば同じ過程を踏みます。イエス・キリストは、この地上で完全であられたただ一人の御方です。わたしたちはイエス・キリストに従おうするときに、時々、つまづくかもしれません。しかし、そのようなときに御父の助けを求め、自他ともに赦すことができれば、わたしたちは強くなって、再び歩めるようになるのです。□





主に仕える 夢

ジョン・ジャイロ・ブスタマンテ

飛行機の窓から
外を見たわたしは突然、
それまで意味の分からなかった、
昔見た夢のことを思い出しました。
わたしは宣教師の一行を率いて
飛行機に乗り、神殿つまり
地上で最も神聖な場所である
主の宮を目指して
旅をしていました。
そしてわたしには
一行が無事
目的地に到着するための
責任が与えられていたのです。

14歳のころ、わたしは、ある夢を見ました。それは、何人かのひとと一緒に飛行機に乗って、イエス・キリストがおられる麗しく平和な場所へ旅をするというものでした。そこへは飛行機で行かなければならず、わたしには旅行に参加する人が安全に目的地に到着できるようにするという責任がありました。

この夢に少々戸惑ったわたしは、翌日母にそのことを話しました。すると母は、少し不思議だけれどもとても良い夢だと思おうと言いました。そのときは、母もわたしもその夢が何を意味するのかわかりませんでした。それ以来二人ともその夢について話すことはありませんでしたが、その後何年もの間、その夢は心の片隅にありました。

わたしはコロンビアのボゴタで生まれました。両親からは神を信じることを教わり、とても感謝しています。しかし、すべての人と同様、わたしも過ちを犯し、そのために家族とのきずなが次第に弱まった時期がありました。家の中に張りつめた雰囲気があり、生活を改善したいという思いから、わたしは休暇を取って、ボゴタの近くにあるフサガスガという町に行く決心をしました。しかし、そこでも問題は依然として残ったままでした。

ある日、散歩に出かけたわたしは、だれに助けを求めるときか悩んだ末に、神に助けを求めることにしました。その決断が正しいと心の中ではっきりと感じました。

何日かたち、一人の若い女性に出会い、彼女の集っている教会について聞きました。その話に興味を覚え、希望を得たような気がしたわたしは、自分もその教会の集會に参加できるか尋ね

ました。

教会に着くと、すぐに親切な人々から温かな歓迎を受けました。そして宣教師を紹介され、彼らから初めて福音を学び、『モルモン書』を受け取りました。

ところが休暇の終わりにボゴタに戻ったわたしは、事故に遭って足をけがしてしまいました。歩くこともおぼつかなくなったわたしは、宣教師からもらった『モルモン書』を読み始めました。そこには、人生の目的や、神への正しい礼拝の方法などそれまで抱いていた多くの疑問に対する答えが載っていました。ニーファイ、モーサヤ、そのほか多くの預言者の教えを知って、わたしはこの教会についてもっと宣教師に聞いてみたいくなりました。

事故のおかげで出歩くのは大変でしたが、教会についてもっと知りたいと思う一心で再びフサガスガに戻り、宣教師を捜しました。やっと捜し当てたわたしは、自宅の近くに住む宣教師の住所を教えてもらい、ボゴタに戻りました。

足のギブスが外れた日、まだよく歩くことはできませんでしたが、家からいちばん近い末日聖徒の教会堂を探して、そこで宣教師を見つけることができました。彼らはあたかもわたしを待っていたかのようなようでした。カストロ、ママニ、デュランという3人の長老は、わたしのたくさんの質問に一つ一つ答えてくれ、神の王国の一員になるよう招いてくれたのです。

わたしは宣教師と話す度に、この道は正しく、神がわたしの切実な祈りにこたえ、助けを与えてくださっていると感じました。多くの人々と同様、わたしもひざまずいて真理を祈り求めました。福音のメッセージで最もすばら

しいと感じたのは、自分で福音が真実であると実感できたことです。こうして2か月後の1994年6月4日にわたしはバプテスマを受けました。

それから1年後、わたしは専任宣教師に召されました。自分が学んできたイエス・キリストと、わたしたちに対する主の大いなる愛について、また現代の預言者や『モルモン書』について、人々に分かち合うことができるのは幸せなことでした。伝道に出る1週間前に、わたしは母にバプテスマを施す特権を得ました。母もまたイエス・キリストの真の教会を見いだしたのです。

1995年7月14日、わたしはコロンビアのボゴタにある宣教師訓練センターに入りました。研修も終わるころ、わたしたちはペルーにあるリマ神殿に行くことになりましたが、わたしは訓練センターの所長から、一行のリーダーに召されました。コロンビア、エクアドル、ベネズエラから集まった21人の宣教師と一緒に神殿訪問の旅に出発したわたしは、飛行機の窓から外を見ました。すると突然、それまで意味の分からなかった、昔見た夢のことを思い出しました。わたしは宣教師の一行を率いて飛行機に乗り、神殿つまり地上で最も神聖な場所である主の宮を目指して旅をしていました。そしてわたしには一行が無事目的地に到着するための責任が与えられていたのです。

今振り返ってみると、天の御父はわたしが若いころから教会員になるよう道を備えていてくださったことが分かります。わたしが時間をすべて注ぎ、コロンビア・バランキヤ伝道部で主の^{あかし}の教えを宣べ伝える使いとして真理を証^{あかし}できるよう、備えてくださったのです。

□

寄り合い家庭を 一つの家族にするには

七十人名誉会員、チリ・サンチャゴ神殿長 ロバート・E・ウエルズ

寄り合い家庭をつくることにな
った親たちは、自分たち
の夫婦関係を育て、強める
というチャレンジに直面す
ると同時に、その新しい家
族の子供たちとも関係を築
いていくというチャレン
ジが待っています。



わたしの父が亡くなったとき、母のもとには二人の幼い男の子が残されました。やがて母は、妻を亡くした子供のいない男性と結婚し、二人の間に男の子が一人生まれました。わたしは、両親が互いの持ち物を「お母さんのもの、夫婦共有のもの」と区別する関係の中で成長しました。しかしながら、わたしたちは5人そろった自分たちを一つの伝統的な家族だと考えていました。

わたしたちは、「継父」とか「異父兄弟」といった言い方は避けていました。例えば、わたしは自分には二人の父親が存在する事実は受け入れていました。一人はわたしの実の父親で、わたしはこの父から豊かな気高い資質を受け継いでいました。もう一人は、育ててくれた父親で、わたしは同じようにこの父からも豊かな気高い資質を受け継ぎました。わたしは二人の弟たちと、協調しながら、平等に育てられました。ただ一つの違いは、末の弟

の姓が違っていただけです。わたしたちの、いわば「寄り合い家庭」は、わたしたち子供たちにも奉仕したり犠牲を払ったりする機会が与えられ、また同時に愛と敬意も注がれたため、実にうまくいっていました。

ここで、「寄り合い家庭」を定義すれば、ひとり親あるいは両親ともに生物学的にその子供たちの親ではない親子で構成されている家族ということになります。「寄り合い家庭」を生み出す背景は様々です。例えば、再婚とか、伴侶との離婚あるいは死別後の養子縁組などの例があります。

核家族と同様、教会の中においても、外においても、寄り合い家庭は、うまく営むことが可能ですし、また、愛に満ちた、一致した関係を築くことも可能です。しかしながら、寄り合い家庭は、両親も子供たちも新しい関係や新しい環境の中で生活することになるため、それまで経験することのなかったようなチャレンジに直面することがあります。例えば、離婚後の再婚の場合、子供たちは、二人の大人と二つの家族の間に立って、引き裂か

れていると感じている場合があります。寄り合い家庭をつくることになった親たちは、自分たちの夫婦関係を育て、強めるといふチャレンジに直面すると同時に、その新しい家族の子供たちとも関係を築いていくというチャレンジが待っています。

再婚を決めるまで

寄り合い家庭をつくるという決定には、数多くの要素について、十分な関心と配慮が必要です。寄り合い家庭をつくる時には、結婚を計画している二人だけでなく、それぞれの子供たち、子供たちの伴侶たち、姻族、血族、そして二人の元の伴侶といった人々との関係の在り方を綿密に考えなければなりません。

スペンサー・W・キンボール大管長は次のように言っています。「結婚はあらゆる決断の中で最も重大なものであり、永遠にわたって影響を及ぼ



すものと言えるでしょう。それは、結婚が目の幸福だけでなく、永遠の喜びにも通じているからです。結婚は当事者のみならず、二人の家族とりわけ子供や孫に、引いては後々の子々孫々にまで影響を及ぼすのです。」(Marriage and Divorce [1976], 10)

主は、「人がひとりでいるのは良くない」と言われました(創世 2:18)。にもかかわらず、再婚や寄り合い家庭をつくってうまくやっという努力は、双方が適切な準備をしていかなないと、決してスムーズにはいきません。再婚を決めるのは、非常に大変なことですし、一朝一夕に決定するようなことはありません。離婚の相手によっては、以前の結婚のことをいまだに怒っている人や、今なお傷ついている人もいるかもしれません。あるいはまた、過去の出来事を十分に精算できない一方で、反対に将来に対して根拠のない期待を抱いている人がいるかもしれません。伴侶と死別した人々には、悲しみを癒す時間が必要です。独りでいることは決して理想的なことではありませんが、準備ができていないうちに、再婚したり、寄り合い家庭をつくるチャレンジや責任を引き受けたりすることも、賢明なことではありません。

結婚や、母親と父親双方に育てられる子供たちのいる家庭というものは、天の御父の神聖な計画の一部です。しかし、「心身の障害や死別、そのほか様々な状況で、個々に修正を加えなければならないことがあるかもしれません。」(「家族——世界への宣言」『聖徒の道』1998年10月号, 24)

わたしが成人してからの生活は、そのようなことの連続でした。わたしは、高校時代のガールフレンドと結婚し、3人のかわいらしい子供をもうけました。そして、計画していたとおり、また望んでいたとおりに、家族そろって楽しい生活を送っていました。しかし、そんなさなかに、妻が悲劇的な事故で亡くなってしまったのです。わたしは悲しみに打ちひしがれ、2年近く、失意のうちに過ごしました。そのうち、わたしの両親や妻の両親が、わたしのためにも、残された子供たちのためにも、再婚について考えてみたらどうかと励ましてくれたのです。

断食をし、その問題について天の御父のもとへ持って行って、熱心に祈った後、わたしは自分にとって再婚は正しいことであると感じたのです。

伴侶を選ぶ

ある人が再婚を決意したとしても、実際に伴侶を選ぶまでには多少時間はかかるかもしれません。わたしの場

合、まず、こちらの状況を理解してくれている友人や親戚に手紙を書き、自分に再婚の意志があることを伝えました。そして、3人の子供の母親となり、教会の地方部長の妻となり、時間的に様々な制約のある南アメリカの銀行員の妻になるということを積極的に考えてくれる人をだれか知っていたら紹介してほしいと依頼したのです。6人の女性を紹介されたわたしは、休暇を取ってアメリカ合衆国へ戻り、最終的には、現在の愛する妻のヘレンとデートをしてみたいという気持ちになり、結果として再婚のプロポーズをしたのでした。

ヘレンには、2歳になる娘がおり、その子も家族の一員になりました。わたしには、3歳の息子と6歳の息子、そして9歳になる娘がいました。結婚後、わたしたちは3人の娘をもうけたため、この寄り合い家庭には、7人の子供たちがいることになったのです。

最初のうち、わたしたちの間にきずなができ、それがうまく機能したのは、わたしたちが二人とも、天の御父から答えを頂き、結婚するというわたしたちの決断を天の御父が認めてくださったという確信があったからです。そのような確固とした基盤がなかったとしたら、結果的には非常に短い交際期間しかないまま結婚したのは賢明ではなかった、ということになったかもしれません。しかし、わたしは自分が決めるべきことを天の御父に代わってしていただくなどというつもりは毛頭ありませんでした。そのことを祈りを通じて天の御父のもとへ持って行く前に、わたしは、ヘレンの家族環境や家族の習慣、証、主に対する献身の決意などについて尋ねました。ヘレンの方でも、わたしについて十分に研究し、彼女もわたしたちはやっていると感じたのでした。

二人が交際を進めていたとき、お互いに、結婚や寄り合い家庭をうまく機能させるためには、3つの非常に重要な特徴が必要だということに気づきました。

●**人格**。あなたが結婚を考えているその人は、神殿推薦状を持っているだろうか。その人は御霊を受けるにふさわしい生活をしているだろうか。その人は神の王国で奉仕の生活をしてきただろうか。

●**能力**。あなたの夫となる人は、家族を養うことができるだろうか。あなたの妻となる人は、あなたたちが自分たちの子供を育てるに当たって、喜んで有能な助け手となってくれるだろうか。あなたがたは二人とも、新しい寄り合い家庭をうまくつくり上げていこうという決意ができていだろうか。また、そのことで、天の御父に頼ろうという決意ができていだろうか。

●**霊的な力**。あなたがた二人には、信仰や祈りや奉仕や犠牲を通じて生み出されてきた霊的な蓄えがあるだろうか。それは、寄り合い家庭を一つの家族としていく過程で生じる様々なチャレンジに直面したとき、どうしても必要とされるものである。

キンボール大管長は、次のように言っています。「伴侶の選択に当たっては、これ以上はできないという入念な計画を立て、考え、祈り、断食をし、数ある決断の中でもこれだけは間違っていないという確信を得る必要があります。ほんとうの結婚には、心と同様に思いの一致がなければなりません。感情に任せて決断を下してはなりません。断食と祈りと真剣な熟考によって高められた心と思いで決断するとき、この上なくすばらしい結婚生活を体験することができるのです。」
(Marriage and Divorce, 11)

チャレンジに直面する

結婚の儀式が終わった後、「それからずっと、みんな幸せに暮らしましたとき。めでたし、めでたし」という経験をしたと望むならば、寄り合い家庭では、少なくとも、一生懸命努力すること、祈ること、忍耐すること、粘り強いことが必要です。家族は皆、様々なチャレンジを抱えます。しかし、チャレンジによっては、寄り合い家庭だからこそ、もっと大変だという場合もあります。新婚の二人がどれほど馬が合っとうとも、寄り合い家庭に必ず訪れる様々な試練を乗り越えていくために、二人は備えをしておく必要があります。

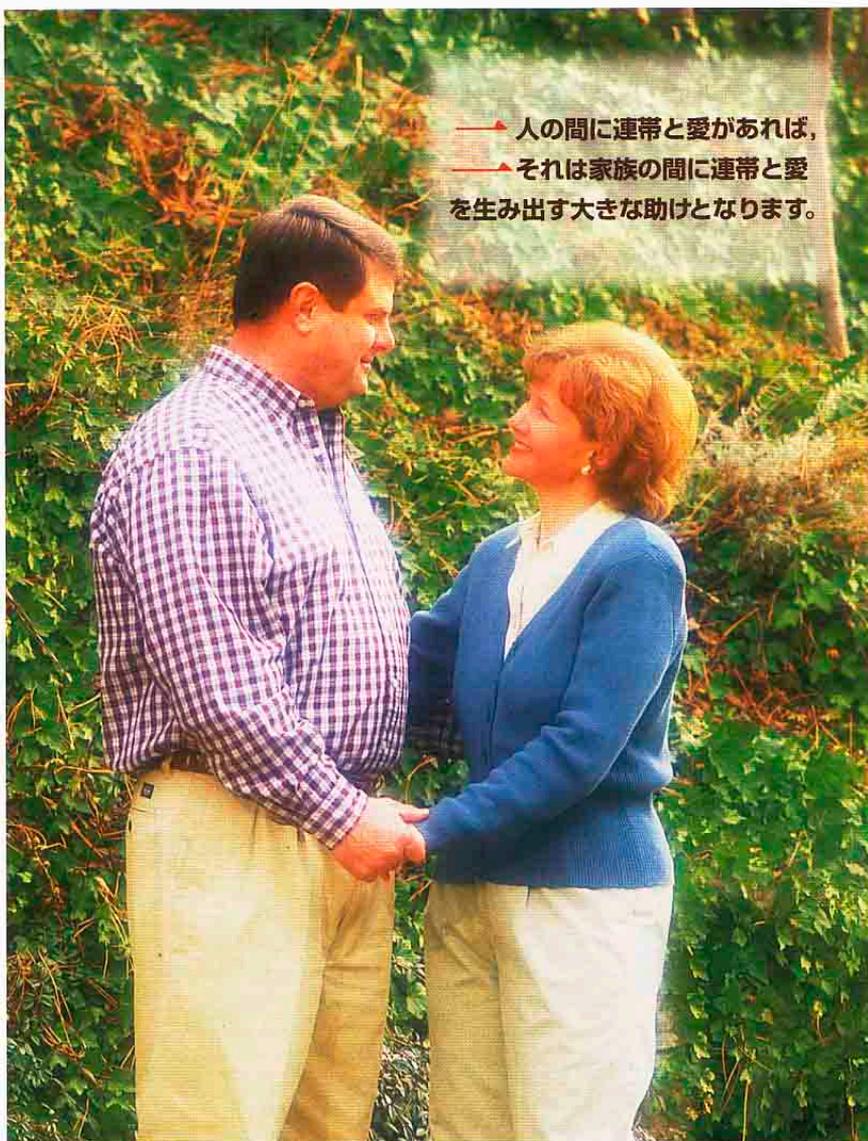
次に、幾つかの課題を、関連した提案とともに挙げておきますが、これは寄り合い家庭においては、皆で話し合っておかなければならない事柄です。

●**一致**。主は、「もしもあなたがたが一つでなければ、あなたがたはわたしのものではない」と言われています(教義と聖約 38:27)。主から認められたいと願う寄り合い家庭は、一致を求めて精いっぱい努力する必要があります。家族の一致は両親から始まり

ます。二人の間に連帯と愛があれば、それは家族の間に連帯と愛を生み出す大きな助けとなります。強く一致した家庭においていちばん大切な関係とは夫と妻の関係であると言われるのは、そのためです。

一致を生み出すためには、家族は同じ目標を持ち、一緒に時間を過ごすことが必要です。教会に出席し、家庭の夕べを開き、家族の祈りをささげ、家族会議を開き、一緒に汗水を流し、休暇をともに過ごし、余暇の活動を一緒にすること。こうしたことを一緒に行うことによって一体感が生まれてきます。寄り合い家庭の場合には、以前の家族の目標や伝統を有効に活用すると同時に、新しい目標や伝統を作り上げることが大切です。

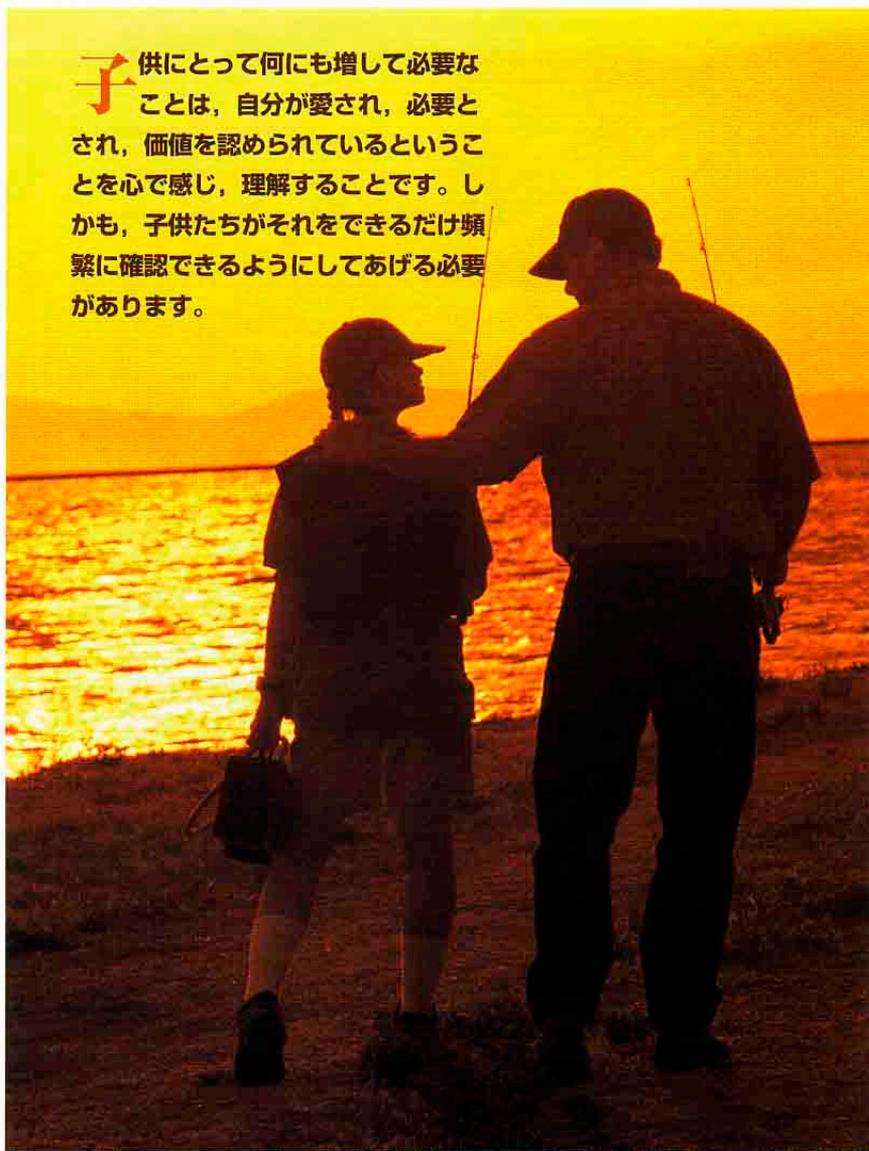
継父や継母の場合には、忍耐が必要です。継父や継母



とその子供たちの間に感情的な結びつきが生まれるためには時間が必要なため、寄り合い家庭が一つになり協調していると実感できる生活を送れるようになるまで、時には数年間もかかることがあるかもしれません。大人たちにしても子供たちにしても、寄り合い家庭には、様々な経験や期待を持ち込んできます。そして、それが新しい家族の関係に影響を与える可能性が大きいわけです。継父や継母によっては、子供の生き方の中では、補助的な役割しか果たし得ない場合もあるかもしれません。すでに一緒に暮らしていない親と子供との関係にやきもきするよりも、継父や継母は、子供たちと新しい関係を築くことに集中する必要があります。

新しい親となかなかなじめない子供たちがいるかもし

子 子供にとって何にも増して必要なことは、自分が愛され、必要とされ、価値を認められているということを感じ、理解することです。しかも、子供たちがそれをできるだけ頻繁に確認できるようにしてあげる必要があります。



れません。しかし、彼らは新しい親の愛をすぐに心から受け入れられるようにならなければいけないわけではありません。例えば、ある継母は、子供の心の中で、亡くなった母親と同じ場所を占めることは決してできないかもしれませんが、愛を示し、忍耐強く接することで、その子供の心の中に、自分なりの場所を作り出すことも可能なのです。

あらゆる家族が、大管長会と十二使徒定員会によって書かれた家族に関する宣言を心にとどめておくといよいでしょう。「実りある結婚と家庭は、信仰と祈り、悔い改め、赦し、尊敬、愛、思いやり、労働、健全な娯楽の原則にのっとって確立され、維持されます。」（『聖徒の道』1998年10月号、24）

● **コミュニケーション**。相手を気遣いつつ率直で正直なコミュニケーションを図ることは、寄り合い家庭で、それぞれの責任を明確にし、それぞれの境界線を定め、心の問題を解決していくためには、どうしても不可欠な要素です。死別や離婚によって心に残された傷、例えば、不安定な精神状態、自尊心や自信の欠如、他人への不信感といったものについては、心を割って話し合い、解決を図っていく必要があります。そうすれば、それまでとはまた違った健全な家族の依存の図式が生まれてくる可能性があります。家族全員が、同時に過去に対して扉を閉ざすわけではありません。妻を亡くした夫としては、子供たちが新しい母親を受け入れる準備ができる以前に、新しい妻を迎える準備ができることもあります。そういう子供たちのためには、自分の心の思いや感情を率直に表現するよう励ましてくれる親が必要となります。

十二使徒定員会の会員であった故マービン・J・アシュトン長老は、次のように言っています。「家族の交流を効果的に行うには、感情と情報の交換を図らなければなりません。みんなが時間を取ってそこに加わる

ことが必要なことを知っていたら、家族は皆自由に、思うままに話ができることでしょう。家族の話し合いでは、意見の相違は無視せず、穏やかに比較考察し、評価することです。たいていの場合、個人の意見よりも、良い関係が続くことの方がもっと大切です。」（「家族の交流」『聖徒の道』1976年8月号、366）

寄り合い家庭の場合、家族の中にそれまでかわりのあった愛する人について、美しい思い出や感情を抱き続けている人がいれば、それを尊重することが大切です。離婚の場合、親たちは、子供たちの心に与えた痛みや苦しみに対して敏感になる必要があります。そうした痛みや苦しみから回復の途中だという場合があるからです。感情を素直に表現し合うことができるような、温かい思いやりのある率直さを育てることは、子供対子供、親対子供、親対親、伴侶対新しい親戚などといったあらゆるレベルにおいて、新しく健全な関係を築き上げるために、どうしても必要です。

●**結び固め**。合衆国の上院議員であったジェイク・ガーンは、1976年に最初の妻のヘイゼルを亡くした後、再婚には消極的でした。しかし、間もなく、残された子供たちのために自分は父親と母親の両方を兼ねることはできないことに気づき、キャサリン・ブルーワートンとの交際を始めました。結局はこの女性が再婚相手になるわけですが、交際直後には、もし二人目の妻としてこの女性と結び固めをすることになったら、最初の妻はどのような気持ちになるだろうかという疑問がわきました。そこでこの二人はその疑問をもってスペンサー・W・キンボール大管長を訪ねました。

そのときの様子を、ガーン兄弟は後に次のように記しています。「大管長は、そのような関係がどのような結果を生み出すのか、御自分にも正確には分からないとおっしゃいました。しかし、忠実でありさえすれば、すべてのことがうまくいくし、わたしたちも多くの喜びを味わうことになることは知っているともおっしゃいました。キャサリンは大管長に、自分としてはヘイゼルの気持ちを損ねるのではないかと心配していると打ち明けました。すると大管長の物腰に変化が起こったように思えました。それまで答えてくださっていたときの何かためらいがちな様子とは打って変わって、今度は確固たる様子で、確信をもって語り始められました。大管長は、キャサリンの目を真っ直ぐに見詰め、目に涙を浮かべながらこうおっしゃったのです。『わたしはこれだけは知っています。あなたは何も心配することはありません。

彼女はあなたを受け入れてくれるだけでなく、あなたを抱き寄せて、彼女の子供たちを育ててくれたことに感謝してくれるはずですよ。』」（*Why I Believe* [1992], 13）

寄り合い家庭で結び固めを行う場合、次の世でどうなるかといったことについて、家族は心配する必要はありません。わたしたちの関心事は、今、福音に従った生活をし、人を愛すること、特に家族を愛することにあります。もしわたしたちが力の限りを尽くして福音に従った生活をするならば、主はその愛と慈悲のうちに、次の世でわたしたちを祝福してください、万事がうまくいくことになるのです。

次の世でどの子がどの親と結びつくのかとか、だれとだれと一緒に暮らすことになるのかといったことに悩んだがためにバラバラになってしまった新しい寄り合い家庭を、わたしは幾つか見てきました。わたしの母は、すでに亡くなっているわたしの父と結び固めを受けていますが、妻を亡くした男性と結婚しています。その男性は、その最初の妻とは結び固められており、二人には子供はいませんでした。わたしの母はその二人目の夫との間に、一人の息子をもうけましたが、その男の子がわたしの弟です。わたしたちは、だれがだれに結び固められているかといったことには、まったく関心がありません。ただ主の知恵と愛を信頼し、義にかなった生活をしようと努力しているだけなのです。

●**愛情表現**。結婚した二人は互いに「結ばれ」「一体となる」よう命じられています（マタイ19：5）。新しい結婚生活において愛情表現を具体化していくためには、理解と思いやりと関心と思慮深さがなければなりません。

二人は互いに温かい思いやりのある接し方で隠し事のない関係を築き上げる必要があります。もし二人のうちの一方でも、新しい寄り合い家庭は人数も多いのだから愛情表現などは不要であると考えていたり、あるいは、ある年齢になれば肉体的な愛情表現はもはや重要ではないと考えていたりすると、誤解が生じる可能性があります。たとえそのような問題について結婚前に話し合っていたとしても、気持ちや健康状態や環境が変わったことを考慮して、再度話し合う必要があるかもしれません。

ゴードン・B・ヒンクレイ大管長は次のように助言しています。「結婚生活での幸福の本質は、情熱的な愛情よりも、むしろ伴侶の安らぎと幸福を切に願う気持ちにあることを、わたしは学びました。自分のことだけを考え、自分の欲望だけを満たそうとする姿勢からは、信頼も愛も幸福も生まれません。無私の心があるときにだけ、

愛はそれに伴う優れた特質とともにいきいきと育つものなのです。」(「わたしは信じる」『聖徒の道』1993年3月号, 7)

●**家計**。寄り合い家庭の家計は、前の結婚から持ち越した遺産や負債のために非常に複雑になっている場合があります。元の伴侶や子供のために支払う月々の生活費や養育費も負債の一部になるかもしれません。また、収入に変化があったり、家族が増えて食費や衣料費が増加するために、それまでの支出の習慣を多少手直しする必要もあるかもしれません。

家族は皆、家計の状態や金銭的な制約について理解しておく必要があります。家族全員の支援を受けて、適切な支出計画を立て、支出の優先順位を決めることは、誤解を防ぐことにもなります。できるだけ頻繁に家計の状況を見直してください。また、金銭に関することについては恣意的に処理することは避けてください。必要に応じて、監督や資格のあるコンサルタントから助言を受けることもできます。

寄り合い家庭も、ほかのあらゆる家族と同様、主が自分の一を忠実に納める人々に約束された数々の祝福について心にとどめておく必要があります。

ジョセフ・F・スミス大管長は次のように言いました。「わたしはこの点に関して、わたしが兄弟、隣人、仕事の同僚に対する負債を返済する最も良い方法は、まず、わたしの負債を主に返すことである。もし隣人に借金があっても、主に正直に負債を納めるなら、わたしはそうしない場合よりもはるかによく隣人に負債を返済することができる。」(『福音の教義』252)

●**しつけ**。どのような親であっても、効果的に子供をしっかりとしつけたりするためには、それ以前に、愛や好意、信頼や思いやりといったきずなが確固としたものとなっている必要があります。新しい親から愛を受けることができなければ、子供たちは「しつけ」を「拒否」と解釈する可能性があります。

エズラ・タフト・ベンソン大管長の言葉です。「子供にとって何にも増して必要なことは、自分が愛され、必要とされ、価値を認められているということを感じ、理解することです。しかも、子供たちにはそれをできるだけ頻繁に確認できるようにしてあげる必要があります。」(「家族を永遠のものとするために」『聖徒の道』1983年1月号, 106)

寄り合い家庭の両親は、家庭内における適切な習慣やしつけの方法について、結婚後できるだけ早い時期に、

考え方を一致させておく必要があります。そして、新しい寄り合い家庭で子供たちとどう接するかについて考えておいたことを、少しずつ微調整していく心積もりもしておく必要もあります。これらの点で両親が一致していなければ、子供たちは混乱してしまうかもしれません。

「しつけについての伴侶の考え方を理解するためには、積極的に耳を傾け、考え方の違いを尊重することが必要です。理解さえできれば、しつけの基準に対する考え方の違いを埋めることもできますし、夫婦として一致した基準を作り出すこともできるのです。」(Jeffrey H. Larson, "How to Unite a Step-Family," *Ensign*, February 1987, 48-49)

子供たちが、離婚した二人の実際の親の間を往来するために自分の時間を割かなければならないとしたら、それも混乱のもととなる可能性があります。決まりや期待は家庭によって異なるため、子供たちには、適応したり、自分に求められていることを真に理解したりするための時間が必要です。

家庭の夕べや親子の面接や教会の出席といった活動は、新しく受け入れる習慣について教えたり、正したり、定着を図ったりするための貴重な機会を生み出します。また、少なくとも継父や継母が自信を持ったり、子供たちの愛を受けるようになってきたりするまでは、生みの親の方で、新旧の両親のために、親の権威の代弁者となることが必要だということが分かったという夫婦もいました。

子供たちの中には、親を分裂させたり、あるいは、操ったりしようとする子供もいます。公平にしかも首尾一貫して決まりや結果について教え込むには、夫婦の間で二人だけで、決意を固めておくことが必要です。そうしないと、しつけは成立しません。親としては、「わたしの子供たち」や「あなたの子供たち」を「わたしたちの子供たち」として接することができるようになれば、効果的にしつけをすることができるはずですが。

●**元の伴侶**。離婚の場合、元の伴侶は、自分たちのためにも、子供たちのためにも、個人的な偏見や憤りは抑える必要があります。むしろ実際には、良い関係を維持できるように努めなければなりません。離婚した生みの親とそれぞれの新しい伴侶が、もし協力できれば、もっと効果的に子供たちを育てることができます。元の伴侶との様々な問題は、当事者だけで処理する必要があります。子供たちと、彼らと同居していない生みの親との間で何らかの関係が続いている場合、その関係を維持できるよう励まし支える必要もあります。元の伴侶を批判し

たからといって益を受ける人はだれもいません。むしろ、元の伴侶は、寄り合い家庭の一致しようという努力に重要な影響を与える可能性があるのです。

もし元の伴侶が子供との関係に終止符を打ちたいと考えたり、あるいはまた、一切関係がなかったことにしたいと考えたりした場合、家族は、子供の人生で生じる空白感を埋める助けを一致して行うことができます。その子供が、継父や継母を含む家族全員から愛され、受け入れられ、支えられているということを深く感じられるようにしてあげることがどうしても必要です。また、そのような子供には、そうした状況になったことについて子供にはまったく責任がないのだということを再確認してやる必要もあるかもしれません。恐らく、関係を断った親も、いつの日か、心に変化が訪れるかもしれませんし、考え方にも良い変化が現れて子供との関係を維持したいと思う日が来るかもしれません。また、現在は悲しみや当惑があったとしても、完全に家族が一致する祝福やほかの子供と同じように育てられる祝福を享受することができるのだということを、子供が理解できるよう、家族そろって助けていく必要があるかもしれません。

寄り合い家庭の子供たちは、以前の家族に比べて、祖父母の数もおじお婆の数もいとこの数も2倍になります。一方、親の方も親戚の数が倍になってきます。こうした人たちが皆、子供の親戚を構成することになるわけで、同時に、ある程度までは、子供たちとの関係づくりに関心を持っているとも言えます。訪問、家族の集い、祝祭日のお祝いなどについては、妥協と事前の計画が必要です。

家族がうまく機能するためには、並々ならない霊的なスタミナと我慢強さが必要です。寄り合い家庭の大人たちは、自分の家族の永遠の進歩と幸福のために、いかなる犠牲もいとわず、求められる限りの霊的な助けを求め、効果的なテクニックをことごとく活用しなければならないことを知っています。寄り合い家庭をうまくまとめるためにその代価を支払う人たちは、わたしたちが「ともに愛をもって生活する」ときにもたらされる喜びを実感することができるのです（教義と聖約 42：45）。□

寄り合い家庭をうまくまとめるためにその代価を支払う人たちは、わたしたちが「ともに愛をもって生活する」ときにもたらされる喜びを実感することができるのです。



彼女が祈り求めたのは



エリザベス・クワッケンブッシュ

絵/グレッグ・ニューボールド

通路を隔てた所に座っているその女性に、わたしは目を留めずにはいられません。その女性は、やせ細った手を体の前で組み、目を大きく見開いてバスの周りを見回していました。薄い髪を振り、奇妙な音を立てながら窓の外をにらみ続けていました。そしてますます落ち着きを失い始めたので、今にも

騒ぎ出すのではと心配になるほどでした。わたしは窓の方を向き、なるべくその女性を見ないようにしていました。けれども好奇心に駆られて、振り返ってしまいました。

そのとき、彼女の目に涙が見えました。何か困ったことがあるのかと心配になり、助けてあげたいと思いはしましたが、騒がれたらどうしていいかわかりませんでした。それに、わたしは学校に遅れるわけにはいかなかったのです。もう少ししたら降りなければなりません。

けれども、もう一度振り返ると、その女性がおかおびえているように見えました。わたしは思わず立ち上がって通路を横切り、その女性の隣に座りました。

「大丈夫ですか」とわたしは尋ねました。「何か助けが必要ですか。」

彼女の目は涙で潤み、手は震えていました。心配そうな顔をわたしの方に向けたとき、彼女の目に困惑の色が見えました。わたしは再び尋ねました。「大丈夫ですか。」

彼女は自分の緑色のハンドバッグに目を落とすと、手探りでペンとノートを取り出してこう書きました。「オタ

わたしの助けでした

ワは過ぎましたか。乗るバスを間違えたように思うのですが。」

わたしはペンを手に取り、「耳が聞こえないのですか」と書きました。彼女はうなずきました。するとわたしは続けてこう書きました。「ご心配なく。すぐに確かめてみます。」

わたしの降りる場所は次の停留所でした。しかし、遅刻を承知のうえで、いつもの停留所で降りずに運転手のところへ行きました。運転手は駅へ電話して指示を仰ぎました。わたしは彼女のために別の道順を書き記しました。すると運転手は、彼女が乗り継ぎのバスにちゃんと乗れるようにすると言ってくれました。

「あなたのお名前は。」わたしは学校から随分離れた停留所でバスを降りる前に、急いでこう書きました。

彼女はこう走り書きしました。「アナです。ありがと。あなたはわたし祈り求めている友達です。」おだやかなほほえみが彼女の顔に広がり、茶色のひとみが輝きました。彼女の愛と感謝の気持ちが伝わりました。ほほえみ返したとき、お互いへの理解がわたしたちを結びつけていることを感じました。

背後でドアがすっと音を立てて閉じたとき、わたしはお別れに手を振りました。わたしは信じられませんでした。もう少しでアナに、恐怖に満ちた旅をたった一人ですべてしてしまうところだったのです。わたしは顔をほころぼせながら、学校へ走って戻りました。聖霊からの促しを聞き、わたしの助けを必要としている人がいることを知り、うれしく思いました。□



「君には ここにいてほしく ないんだ」

信じられませんでした。わたしはクラスの人たちから、もうセミナーには戻って来なくていいと言われていたのです。

サム・ジルズがクリスティー・ジルズに語った話

わたしの家族は1年で最も暑い月に、アメリカにある荒涼とした小さな町に引っ越しました。しかしわたしは、地元の末日聖徒の子供たちから歓迎されませんでした。

当時わたしは15歳でしたが、家族の引っ越しはすでに10回を数えていました。ですから、わたしが友達の作り方を知らなかったわけではないのです。友達になろうと、わたしは知っている方法をすべて試してみました。しかし5か月が過ぎても、わたしにはまだ教会員の友達は一人もいませんでした。

幸いにも、わたしには学校に、会員でない良い友達がたくさんいました。だからといって、早朝セミナーや教会の集会で居心地がよくなったわけではありません。実際、わたしは5か月もの間、セミナーで先生を除いてだれからもあいさつされることがなかったのです。そして日曜学校のクラスでは、わたしとみんなの席との間には、いつも席が一つ空いていました。

トム・ジェップソン（仮名）は末日聖徒の青少年たちの中心的存在でした。彼はわたしに対し、ただの一言も話しかけませんでした。事実、ある朝セミナーの教室の入り口でばったり会うまで、彼はわたしの存在を知っていたのかどうか確信が持てなかったほどです。

「家へ帰れよ。ぼくたちは、君にここにいてほしくないんだ」と彼は言いました。

わたしは笑い出しました。「冗談に決まっている、そうとしか考えられない。」そう思いました。でも彼の顔を見ると、冗談ではないと分かりました。わたしは彼の

すぐ後ろに立っている人たちを見ました。彼らは何も言いませんでした。その態度から、彼らも同じ意見だと思いました。わたしがその場を立ち去ると、戸が強い音を立てて閉まる音が後ろから聞こえ、笑いをこらえる声がありました。

二度とセミナーになんか行くものか。わたしはそう心に決めて高校までのわずかな距離を歩いて行きました。みんな彼らが悪いんだ。

その日は、時間のたつのがとても長く感じられました。放課後、わたしはバスに乗り、家の前を通りましたが、家には帰らず、セミナーの先生の家へ行きました。先生はわたしの家の数軒下った所に住んでいて、わたしは彼が大好きでした。ほんとうに、彼の家族みんなが好きでした。

彼はいつも毎朝、セミナーのために車で迎えに来てくれるので、もう迎えに来る必要はないと伝えたかったのです。実際には、幾らか同情してくれるよう心から望んでいたのです。

呼び鈴を押すとマーレー姉妹が玄関に出ました。マーレー兄弟はまだ家に帰っていませんでしたが、彼女はレモネードでも飲むようにと、中に招いてくれました。今までのいきさつを彼女に話すのに時間はかかりませんでした。もうセミナーには行かないつもりだし、教会にも二度と行かないかもしれない、とわたしが言うまで彼女は同情的でした。

「教会がほんとうに真実なら、会員はあんなふうには振舞わないはずですよ」と、わたしは言いました。

わたしは、教会に来るように彼女が説得してくれることを期待していました。彼女がすべての子供の親に話し、ひどい目に遭わせてほしいと思っていました。わたしがこれからも教会に来るためには何でもしてくれるだろうと思っていました。しかし期待とは異なり、彼女はわた

しにこう言ったのです。「ええ、そうね。あなたが行かなければその子供たちの気持ちを損ねずに済むわ。でもあなた、自分をだめにするだけよ。」

わたしはあまりのショックで何も言えませんでした。わたしはそそくさとレモネードを飲んで、「もう帰ります」と彼女に告げました。

わたしは、3週間セミナーと教会を休みました。わたしのセミナー教師は、何度かわたしの様子をうかがいに来ました。わたしは、セミナーが恋しくなりましたが、頑固にそれを認めませんでした。わたしは、みんながわたしを締め出したので、少し罪の意識を感じているだろうと自分に言い聞かせ続けていました。彼らは裁きの日にひどい目に遭うんだと自分をなだめていたのです。

それでも、マーレー姉妹から、自分をだめにするだけだと言われた言葉が忘れられませんでした。ある日、『モルモン書』を読んでいると、一つの聖文に目が留まりました。「むしろあなたがたは、ふさわしい状態ですべてのを行い、しかも、生ける神の御子イエス・キリストの名によって行うようにしなさい。このように行い、最後まで堪え忍ぶならば、あなたがたは決して追い

出されることはないであろう。」(モルモン9:29)

この言葉を読んでいると、^{みたま}御霊がわたしの心に満ち、マーレー姉妹が正しかったことが分かりました。確かに、クラスの人たちは親切心に欠けていました。しかし、わたしが教会にとどまることを決心すれば、彼らがわたしを教会から引き離すことはできないのです。そして何よりも、彼らがわたしを終わりの日に追い出すことはできないのです。もしわたしが堪え忍ぶなら何ら問題はなかったのです。

わたしはベッドから起き上がり、目覚まし時計を朝5時に合わせました。そうすれば、次の日セミナーに遅れずに済むからです。

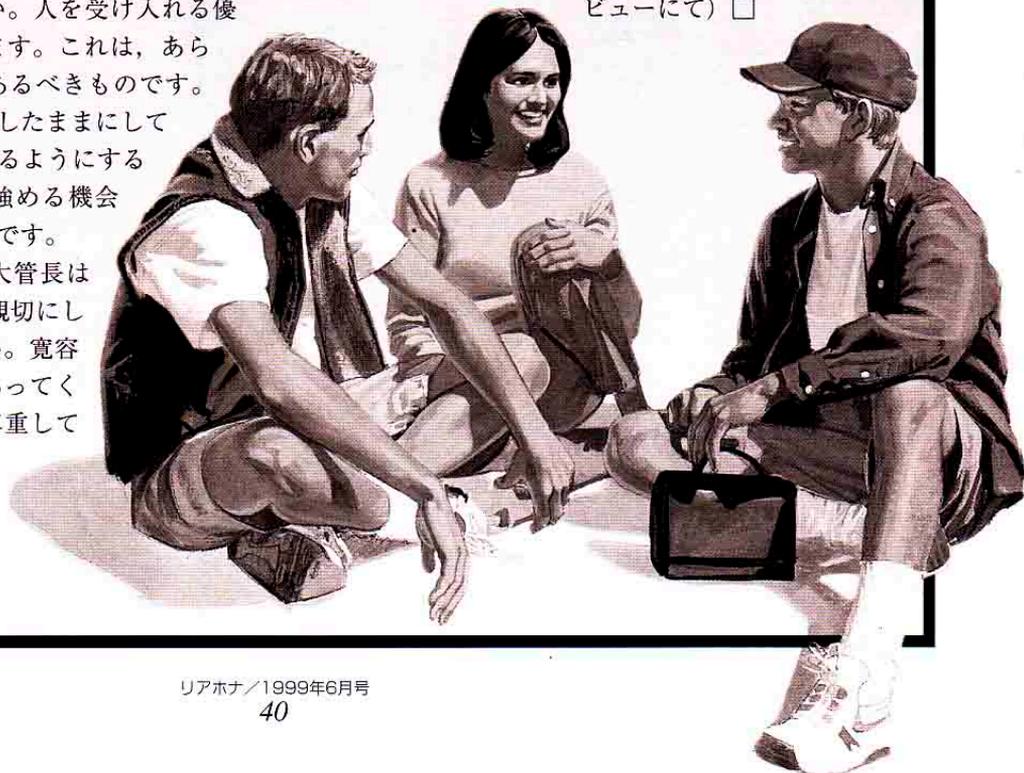
わたしたち家族は、あの暑くて風の強い町にそれから5か月住みましたが、変わったのはわたしの心だけでした。わたしの救いは、わたし以外のだれの責任でもないことが初めて分かりました。それからは、セミナーや教会を一日も休みませんでした。そして、末日聖徒のほかの生徒たちからの冷たい態度は依然続きましたが、それは苦になりませんでした。きっとわたしが、福音のぬくもりを実感していたからでしょう。□

みんな一人ではない

残念なことですが、この話のように、自分が集う青少年のグループから受け入れられていないと感じている人がいます。教会は、だれもが一人であると感じてはならない所です。あなたのワードや支部でだれか新しい人はいませんか。時間を取って彼らと知り合いになってください。人を受け入れる優しい言葉は親切心をはぐくみます。これは、あらゆる青少年のグループの中にあるべきものです。彼らをあなたの友達の輪から外したままにしまうと、彼らの証を強められるようにする機会だけでなく、自分の証を強める機会をも逃してしまうことになるのです。

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は次のように警告しています。「親切にしてください。理解してください。寛容であってください。思慮深くあってください。人の意見や気持ちを尊重してください。人の長所を認めて

ください。人のあら探しをしないでください。人から強さと徳を探してください。そうすれば、自分自身の生活の助けとなる強さと徳を見いだすことでしょう。」(1995年5月12日ユタ州ソルトレーク・シティーで行われたフィル・リーゼンによるテレビインタビューにて) □



人とうまくなじめないとき

ジャネット・ウェイト・ベネット

ほかみんなが仲良く楽しんでいる様子を、ただ外から眺めているだけのように感じることはありませんか。もし感じたことがあるならば、特に教会の中であればなおさら、もうそのように感じる必要はありません。だれもが孤独感を抱くときがあります。しかしもっと心地よい雰囲気を作り、良い友人となる方法があります。

目標達成のためのリストに載せる事柄

■気長に構える。一晩で状況が変わることはありません。しかしあなたの態度なら変えることができます。最初に居心地のよい雰囲気を感じなくても、教会に行くのをやめたりしないでください。

■ほほえむ。そうすれば、相手の人もあなたにほほえみ返してくれるでしょう。

■活動の計画や実行の手伝いを申し出る。活動の中心にいれば、仲間に加わっていると感じられることでしょう。すると、人はたいてい助けを求めてきます。

■人と話すときは、相手の目を見る。

■才能を伸ばし、分かち合う。自分自身によい気持ちを感じれば、周囲の人といるときはもっと心地よく感じることでしょ

■よい身だしなみや清潔な衣服を心がける。そうすることで、人と接するときにさらに自信が増すこと

■ほかの人と共通の関心事を見いだす。自転車に乗ること、ピアノを弾くこと、勉強することなど、一人より大勢でする方が楽しいことはいろいろあります。自分自身よりも、活動そのものに目を向けるなら、人目を気にしたり恥ずかしがったりすることもなくなるでしょう。

ほかの人に目を向ける

■目標を定める。1週間に2、3人の人と会うといった割り当てを自分に課すとよいでしょう。

■人と話すときには、相手のことを話す。質問の方法や相手の褒め方を学んでください。

■人の名前を覚え、話しかけるときに名前で呼ぶ。

■寂しそうな人と友達になる。あなたの助けを必要としている人を探してください。

主はあなたの味方です

■『モルモン書』を毎日読む。そうすれば心が落ち着き、その影響で、人と接するときだけでなく、良い模範を示すうえでもよい気持ちを感じるができるようになります。

■一人ではないことを覚える。自分を哀れむ気持ちを感じ始めたら、ひざまずいてみてください。天の御父はいつも理解を示してください。

■救い主は、親しい人々から必要とされないという試練や迫害に耐えられました。救い主の犠牲を思い起こすことで、自分の試練を正しい観点でとらえる助けとなるでしょう。

■弱さを強さに変えてくださるよう、主に願い求める（エテル12：27参照）。天の御父は耐えられない試練をお与えになることはありません（1ニーファイ3：7参照）。もっと親切で安らぎを与える人になりたいと心から願うならば、天の御父は助けてくださいます。□



若人に 帰属感を 持たせる

ブラッド・ウィルコック

写真/スティーブ・バンダーソン

「わたしは教会になじめるようになるのは絶対に無理だと思いました。」教会のユース活動に初めて参加した一人の若い女性が言いました。すると、別の若い男性は、「ぼくは教会の会員だけど、自分が必要とされているなんて感じたことはほとんどないね。教会に来てもしっかりこなったんだよね。」これら二人の若い末日聖徒の言葉は、それぞれ悪い仲間に入りしていた当時の様子を語ったものです。

これら二人の若者のように、あらゆる人は仲間と一緒にでありたいという気持ちを抱いています。人々との交わりの中で生活しているわたしたちは、だれかとまたは何かと一緒にいることによる安心感と保護を求めるのが普通です。末日聖徒は聖約の民として、宗教に対する独特の理解とビジョンを共有しています。また、わたしたちが皆天の御父の子供であり、天の御父の偉大な幸福の計画に参加しているという認識に立って、お互いの交わりから力と喜びを得ています。さらに、回復された福音に対する証^{あかし}を持ち、教会で奉仕することを通して証を得ることによって、わたしたちは教会員としての強い一体感を持っています。

しかし、一緒にありたいという若者の気持ちを何らかの理由で正しく満たしてあげることができないと、彼らは好ましくないグループに走ることがあります。それが両親や教会の指導者にとって大きな悩みの種と



若人を悪い仲間から遠ざけるには

どうすればよいでしょうか。

教会の友達と一緒に

活動する仲間を作りなさい。



なっています。親や指導者はどうすれば若人に帰属感を持たせることができるのでしょうか。

あるワードで、数人の若人が学校で好ましくないグループに深入りしていました。彼らに心を痛めていた監督は当時の様子をこのように述べました。「若人の指導者と会って、状況について話し合いました。そして、彼らにそのようなグループに入らないように説得するよりも、わたしたちのグループの一員であることを感じさせるように努力しようということになりました。彼らが教会に来て、ほかよりも受け入れられていることを強く感じれば、彼らはほかに安心できる場所を探し求めることはないと考えたのです。」

若人の指導者たちは活動を増やすことを提案しました。けれども監督は、若人を参加させるために親睦会や

活動は優れた手段ではありますが、単に活動を行うだけでは若人が参加するという保証はないし、かりに参加しても、それによって彼らが帰属感を持つ保証にはならないことを指摘しました。そして監督は「活動を行うにしてもよく計画しておかないと、活動を終えるには終えたけれど、若人の気持ちをつかまえることができなかったという結果になりかねません」と発言しました。

若人に帰属感を与えようと努力する親や指導者が心に銘記しておかなければならない事柄を幾つか、紹介したいと思います。

計画段階で若人に参画させる。ある若い女性の会長は多くの若人に参加を促し、一致をはぐくむ活動を計画するための鍵となる事柄を見いだしました。「計画の段階と組織化の段階で若人の積極的な参画を奨励したところ、成果が上がってきました。地域の小学校で奉仕活動を行うとか、持ち回りの夕食会を開くとか、すばらしいアイデアが出てきました。自分たちが出したアイデアですから、彼らも成功させたいと躍起でした。」ユースカンファレンスやダンス、あるいは活動の手伝いを頼んだところ、彼らは準備しているときは、参加しているときと同じくらい楽しかったと言っています。

様々な関心を持っていることを理解する。「ぼくが若い男性の活動に行く気がしないのは、活動といえば必ずバスケットボールだからです。ぼくはバスケットボールが下手だから」と言った若い男性がいます。若人の多くはスポーツ好きですが、スポーツばかりしている活動内



若人に活動の計画を手伝ってもらうことによって、彼らの関心と参加を高める。



容では、一部の若人に入って来させない雰囲気を感じてしまいます。地元の名所を訪れたり、観劇に行ったり、スポーツをするにしても様々な選択肢を与えたりして、同じスポーツを繰り返し行う伝統を断ち切りましょう。ある若い男性会長はいつもと趣を変えてボーリングや、ゴルフ、あるいは水泳を試みようとして提案したときに、若い男性から不満が出るかと思っていました。「ところが、新しいことに挑戦できるということで彼らは大喜びでした」と会長は話してくれました。

この若い男性会長はさらに、スポーツをする際も時々プレーの方法を変えて全員が参加できるように工夫しました。若人はビーチボールを使って屋外でバレーボールをしたり、子供用のバスケットリングとボールを使ってバスケットボールをしたりすることを計画しました。指導者はこのように述べています。「スポーツのプレー方法を変えたり、独自のルールを作ったりすることによって、スポーツがあまり得意でない人にも安心して参加してもらうことができます。」

ワードの伝統を守る、あるいは新しく作る。活動において伝統を守り続けることには、帰属感を築きやすいという利点があります。家族における伝統の重要性については広く知られているところです。例えば、バプテスマを受ける子供のために開く特別な夕食会などの行事は、親子間の一致を強めてくれます。地元の教会指導者は若人が参加する活動をユニット恒例の行事とすることによって、これと同じきずなを築くことができます。例えば、

あるワードでは毎年文化と芸術の夕べを開いています。

若い女性のステージーは、転居した先の新しいワードに出席したときにそのような伝統の持つ価値を知りました。出席し始めてから数週間、ステージーはワードにまったくなじみませんでした。彼女はもう二度と教会へ行かないとまで両親に言ったのです。けれどもその週に若い女性のアドバイザーから電話がありました。それは、近々開かれる青少年の活動への誘いでした。ステージーはそのときのことをこのように振り返っています。「参加しない言い訳を考えようとしていましたが、毎年大勢の人々が参加するデートゲームをすると聞いて、興味を持ちました。毎年しているのなら、きっと楽しいだろうと思ったのです。そして、わたしは参加しました。これがきっかけになって、教会が楽しくなりました。」

12月のクリスマスのキャロリング、夏の洗車活動、『若い女性確認証』を受けるときの特別ディナー、人々に健全な楽しみと目的を与える活動はすべて、定期的な実施する行事とすることができます。

名前を覚える。ある若人の指導者はこのように話しています。「ほかのステークから講演者を招いたユースのファイヤサイドに出席したときのことでした。感銘を受けたのは、この話者は壇上に立つ前と後の時間に、若人の間に混じってお話をしていたことでした。彼は若人に名前を尋ねて、彼らを名前で呼んでいたのです。彼は一人一人がその集まりの一員であり、大切にされていることを感じるようにしていました。訪問者が名前を覚えようと努力しているのなら、わたしはもっと努力しなければならないと決意しました。」

この若人の指導者はワードの若人全員と、ステークの集まりで会う何人かの名前を覚えるという目



標を立てました。「幾つか記憶のテクニックを試してみましたが、わたしがいつも教会へ持って行くフォルダーの内側にメモしておく方法がいちばん効果的でした」と語っています。「週の間の名前を忘れたとしても、フォルダーの内側を見れば、すぐに記憶がよみがえってきます。」

天の御父はわたしたち一人一人の名前を御存じです。天の御父はジョセフ・スミスを訪れたとき、名前を言ってジョセフに呼びかけられました(ジョセフ・スミス—歴史1:17参照)。若人と交わるわたしたちにとって、天の御父の模範はわたしたちがどうすべきかを教えています。

個人的に誘う。壇上から今回の活動を発表することよりも、電話をかけたり、訪問をしたりするのははるかに手間がかかります。しかし個人的に誘うことによって相手に気持ちを伝え、またその人が必要とされていることを感じさせることができます。若い女性のローザはこのように述べています。「わたしは働いているのでファイヤサイドに出席できませんでしたが、ローレルのアドバイザーはわざわざ電話してくれました。彼女がわたしを大切にしてくれていることがそれでよく分かりました。わたしに対して心を砕いてくれていること、また、決して忘れられていないことが分かったのです。」

受け入れていることを表す。わたしたちがほほえみを投げかけ、たとえ小さなことでも必要なまたふさわしい称賛を贈ることによって、若人に対して彼らが愛され、受け入れられていると感じさせることができます。食物が肉体を養うのと同じように、このような態度は霊を養います。若い男性のマッシューはこのように言っています。「大きなことでも小さなことでも成し遂げたことを指導者から褒めてもらうとうれしい気持ちがします。ある人たちはそのようなことを必要とする年齢を過ぎていると考えるかもしれませんが、いくつになっても称賛を必要としない人はいないと思います。」

わたしの妻のデビは10代のときに指導者から頼りになると言って褒められたことをいまだに忘れていません。このささやかな言葉がデビの生活に大きな影響を与えたのです。

若人に働きかける召しを受けている人は皆、誤解されるような方法で体に触れることのないように注意することが大切です。だからといって、あまりに距離を置きすぎて、10代の若人が認められ、受け入れられたいと考えている大切な気持ちを無視することのないようにしなければなりません。拍手を送ったり、肩を軽くたたいたり

することによって、受け入れていること、仲間であること、愛していること、親密な間柄であることを表すことができます。

敬意を込めて耳を傾ける。指導者は若人が話そうとしているときに心から耳を傾けることによって、その若人の助けになることができます。指導者には話しても安全だと考えている若人は大勢います。七十人のボーン・J・フェザーストン長老は管理監督会の副監督時代に、このような説明をしています。「若人との関係において『第三者』の立場にある指導者(家族以外の人。監督など)は善に向かわせる途方もなく大きな影響力を発揮することができます。」(A Generation of Excellence: A guide for Parents and Youth Leaders [1975], 168)

若人は自分の気持ちを打ち明けるとき、通常は指示や助言を求めているのではなく、むしろ共感をもって耳を傾けてくれることを求めています。相手が問題を乗り越えようとしているときに、裁判官としてではなく耳を傾けてくれる人を必要としているのです。若い男性のポールはこのように説明しています。「学校で起きたことを話し始めると、親や指導者はすぐに助言を与えようとすることがあります。彼らは説教を始めます。そして誘惑から遠ざかるように警告します。それはまるで、わたしに何も言うなと言っているようなものです。」

もちろん、彼らにとって大いに役立つと思われる考え方や感じたことを話して、彼らの問題に対処したいと考えるときもあります。無言でいることによって、適切でない行動や態度を支持していると誤解されたくはありません。しかし、ほとんどの時間を聞き手に回り、適切な時が訪れるまで意見を差し控えることによって、わたしたちがほんとうの友達になりたいと思っていること、信頼関係を築きたいと思っていることを相手に伝えることができます。それは、効果的な意思の交流への道を開くことを意味しています。

共通の関心事という土台の上に築く。ある若い男性はセミナーの教師が自分と同じテレビ番組の再放送を見ていることを知りました。ささいなことでしたが、この共通の関心事は、それから二人が顔を合わせる度に言葉を交わすきっかけとなりました。共通の関心事を見つけるための努力、あるいはそれを築くための努力は、帰属感を求める若人を助ける際に大きな違いとなって現れます。

同じ教会員とはいえ、共通点がほとんどない人々に会うことももちろんあります。このような場合に、一人



若人との間に共通の関心事というきずなを築くことによって、指導者は彼らにとって大いに役立つと思われる考え方や感じたことを分かち合う機会を見いだすことができる。

ていくうちに彼らはこれまでとは何か違うものを感じ始めました。カンファレンスの最後に行われた証会は、1年前の証会とはまったく別の集会になっていました。一人の指導者は1年前の証会の様子をこのように述べています。「ほとんどの若人はただじっと座って、くすくす笑ったり、ひじでつき合ったりしていました。」今回の証会では、人々に奉仕を行った喜びと、天の御父とイエス・キリストに対する愛を、熱意を込めて証する若人が次々に壇上に立ちました。

救い主に心を開ける。 教会員は教会で会員たちと交わることによって、心に満たされる一体感を楽しんでいます。同じような感情は多くのグループ、クラブ、あるいは組織でも味わうことができます。教会が差し出しているのは単なる社会的容認にとどまるものではありません。教会員は霊的な一体感という独特の感覚をも味わうことができます。良い羊飼いは自分の羊を知っていること(3ニーファイ18:31参照)、また信仰と霊的再生によって文字どおり救い主に属する者となること(モーサヤ5:7参照)を、わたしたちは約束されています。

けれども、教会の標準に従って生活しないと、この霊的帰属感は失われてしまいます。そのような若人はこう言うことでしょう。「わたしはふさわしくないから、教会へ行けません。聖餐も受けられません。もうお祈りもできません。」日曜日のレッスン、ファイヤサイド、親や監督、支部長あるいは指示を受けた副監督、副支部長による個人面接は、若人に悔い改めについて教え、救い主の贖罪しよくさいがもたらす祝福に心を開けさせる絶好の機会です。

何年もの間教会を離れていた一人の若い男性がついに戻って来ました。彼は証会でこのように話しました。「わたしは学校で人気のあるグループに入りたくて、してはいけないことをたくさんしてきました。けれども、そうしているときにいつも何かが足りないを感じていました。最終的に悔い改めて、教会員としてのすべての祝福にあずかったとき、そのむなしい気持ちはなくなっていました。わたしは戻って来ました。イエス・キリストの救いゆると、主の完全な愛によって、わたしはここがわたしのいるべき場所であることを知りました。」□

の若い男性が話してくれた姿勢を参考にしてみるとよいでしょう。「新しいワードに引越して来たとき、青少年の話題にのぼる音楽や学校の科目、スポーツなど、何から何まで以前のワードと違うことに気づきました。母はほくが友達欲しさに、悪いグループとつきあい始めるのではないかと心配していました。けれども、ほくは続けて教会へ行きました。友達ではなく神様に会いに行くのですから。」教会員の関心は多岐にわたっていることでしょう。けれども、わたしたちは救い主に対する愛と、回復された福音の証を分かち合うことができます。これらがすべての人を一致に導くのです。

霊性を築く。 若人は霊的なチャレンジを乗り越える力を持っています。数年前、ステーキの指導者は若人を遊園地へ連れて行って、そこでユースカンファレンスを開きました。翌年、指導者たちは活動をほかの形で行うことを検討しました。教会指導者からの勧告に従って、娯楽を中心とするのではなく、霊的な研究会と奉仕活動を計画して、まことの喜びを経験してもらうことにしたのです。最初、若人はこのように変更したことがおもしろくありませんでした。けれども、カンファレンスが進行し

すべてはバスの中から

エルニー・ロザ・A・シルバ

絵/スコット・ムーイ

19 87年、二人の娘のうち長女であるマルセラが、ブラジルのティラデントスを走るバスの中で名札を付けた青年二人を見かけました。3人は互いに話をし、宣教師はマルセラにもっと教会について知りたいかどうか尋ねました。

マルセラは興味がありましたが、わたしが末日聖徒に対して強く反対していたことを知っていました。それから、ある会員の家で福音を学ぶようになりました。そしてマルセラはバプテスマを受けました。彼女が19歳のときでした。わたしはまだ教会に強く反対していたので、バプテスマ会には行きませんでした。

その当時、わたしはとても困難な時期に差しかかっていました。ある日、家のマガジンラックの本から何か読もうと思いました。すると『リアホナ』（ポルトガル語版）が何冊もあり、読んだ記事にとっても興味を引かれました。

1986年2/3月号（ポルトガル語版）に、カナダに住む手足の不自由な青年、シー・ピーターソンの記事がありました（ジーニー・タカハシ「模範的で、しかもユニークな末日聖徒」『聖徒の道』1986年3月号、20-24参照）。わたしは特にシーの母親の信仰と不屈の精神力に感動を覚えました。

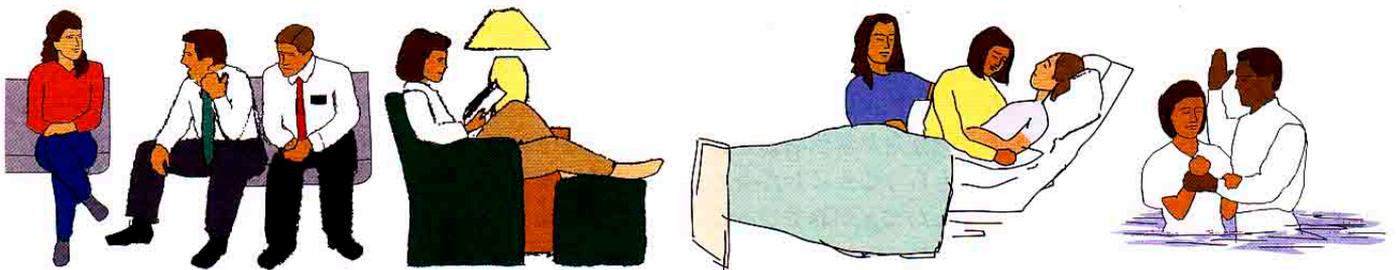
1988年の1月、ほぼ時を同じくして次女のモニカが虫

垂炎の発作を起こし、激痛に襲われました。医者からは緊急手術が必要と言われ、マルセラとわたしはモニカを病院へ連れて行き、できる限りを尽くして彼女を力づけていました。病院でわたしは『リアホナ』で読んだ信仰の模範を思い出しました。特にシーの母親であるアニタ・ベギーンマンのことを思いました。

マルセラとわたしはモニカを抱き締めました。わたしたちはありったけの信仰をもって祈りました。するとすぐにモニカの顔色がよくなっていくのに気づきました。そしてモニカは泣きやんだのです。不思議なことに、その後医者から誤診であったと伝えられました。モニカの手術は必要なくなったのです。3人で喜び、感謝しながら帰宅の途に就きました。

モニカとわたしは宣教師から福音を学ぶことにしました。そして1988年3月19日にバプテスマを受けました。マルセラは後に専任宣教師としてスイスで伝道し、現在は結婚しています。

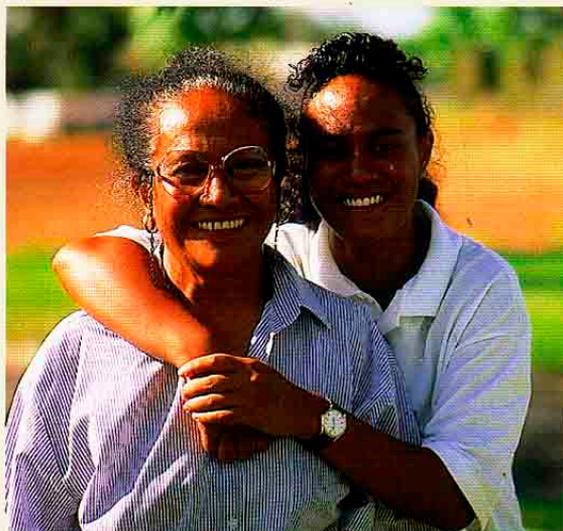
『リアホナ』で読んだ信仰の模範によって、自分がこれまで抱いていた教会に対する考えが間違っていたことに気づき、困難なときに力を得ることができました。その経験をしてからというもの、この機関誌を読む度に証は増しています。□





「墓の傍らに立つ女たち」ウィリアム・ブグロー画（1825-1905年）

十字架につけられた主が墓に横たえられるのを見届けたこの女性たちは、主の体に香油を塗ろうとして後でやって来た。すると、石が入り口から転がしてあり、主の遺体はもはやそこになかった。彼女たちは輝く衣を着た二人の男性を見た。彼らは言った。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ23：55-24：6参照）
ベルギー、アントワープのファインアート美術館の厚意により掲載。/TPS/SuperStock



自分たちが天の御父の子供であり、人を
幸福にする御父の偉大な計画の一部で

あることを知るとき、わたしたちは、強いきずな
と喜びを感じます。どのような理由からであれ、
もし青少年が教会に対して帰属感を持たずにいる
なら、彼らはそれをほかのグループに求めるよう
になるかもしれません。青少年が自分をワードや
支部の一部であると感じられるようにするために、
親や教会の指導者はどうしたらよいでしょうか。
本誌「若人に帰属感を持たせる」42ページ参照。



2 902999 863001

99986 300

大管長会, 新しい集会施設を視察



完成間近となったホールの扇形の屋根。
写真/ポール・バーカー、「チャーチニュース」(Church News)の厚意により掲載。

1月29日, 大管長会は教会の新しい集会用施設の建設現場を視察した。教会の総大会が開かれることになるこの巨大な施設は, テンプルスクウェアの真北に位置している。2000年4月の総大会までに完成する予定である。



教会の建築家リー・グレー兄弟から工事の進捗状況について話を聞くゴードン・B・ヒンクレー大管長, トーマス・S・モンソン第一副管長(右), ジェームズ・E・ファウスト第二副管長(左端)。左から2番目は, プロジェクトの責任者であるトーマス・ハンソン兄弟。

ゴードン・B・ヒンクレー大管長, トーマス・S・モンソン第一副管長, ジェームズ・E・ファウスト第二副管長はH・デビッド・バートン管理監督, キース・B・マクマリン第二副監督とともにこの新しい施設内の講堂を見学した。

この建設プロジェクトの責任者である教会総合施設部のトーマス・ハンソン兄弟が視察の案内役を務めた。ハンソン兄弟によると, 一行は講堂の規模を確認するとともに, 講堂の屋根に付ける最後のトラス(訳注——構造骨組の一形式。節点がすべて, 回転自在の結合から成る)の巨大さを目にした。このトラスはまだ屋根に取り付けられておらず, 地上に置かれていた。

1997年7月24日, 大管長会は開拓者のソルトレイク盆地到着150周年記念行事の一環として, この施設の^{くわい}鉄入れ式を行った。講堂は説教壇を正面にして3階席まであり, 2万1,000人を収容することができる。あわせて地下駐車場や900人収容の劇場も建設中である。□

【チャーチニュース】(Church News)の厚意により, 1999年2月6日付けの記事から記載。

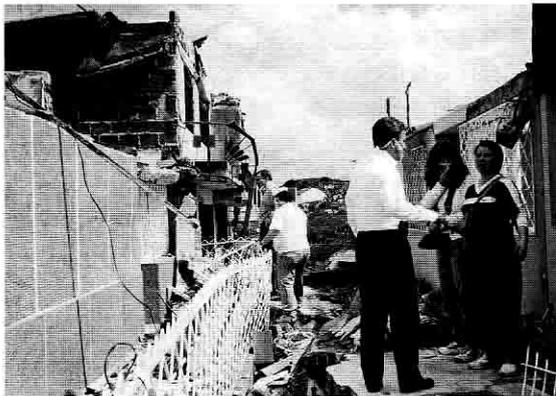
コロンビアの地震で、多数の末日聖徒に被害

今年の1月25日に、コロンビア西部の山間部にあるアルメニア地方を襲った地震によって、およそ750人の教会員が深刻な被害を受けた。しかし、近隣の教会員が速やかに救援の手を差し伸べた。

「神権組織が非常によく組織されていて、人々は食糧、衣服、医薬品を得ています」と七十人で南アメリカ北地域会長会会長のフランシスコ・J・ビーナス長老は語っている。ビーナス長老の話によると、地震後直ちに、この地域を管理するボゴタとカリにある福祉委員会が、アルメニアに船で物資を輸送した。

報道によると、この地震による死者はおよそ920人に上る。またアルメニアの各所で崖崩れが生じた。ビーナス長老によると、教会員は3人が死亡、10人が負傷した。アルメニアで働いていた20人の宣教師にけがはなかったが、使用されていなかった教会堂が壊滅的な被害を受けたほか、147世帯の教会員の家屋が深刻な被害を受け、または倒壊した。教会員の被災者の数は、成人485人、子供222人、幼児47人に上る。近くのカラルカとペレイラの町も地震に見舞われたが、幸い会員に被害はなかった。

コロンビア・カリ伝道部のアレクサンダー・ヌニェス部長の話では、地震の翌日には、ボゴタ市内のステーキカ



コロンビアの地震で家を失った教会員を慰問する教会指導者。

写真/チャールズ・E・カートミル



1月25日にコロンビアのアルメニアを襲った地震による被害を伝える写真。

左は、地震により大きな被害を受けた教会堂。

写真/チャールズ・E・カートミル

らのトラックがアルメニアに到着し、3トンもの食糧と衣類、それに水が届けられた。その後、カリとメディンからも救援のトラックがそれぞれ2台ずつ到着した。食糧の一部は教会が購入したものだが、そのほかはすべて教会員の寄付によるものであった。

地震の後、アルメニアでは6家族が一時的にカステリヤナの教会堂に、8家族がグラナダの教会堂で、そして約8家族がトレスエスシナスの教会堂でそれぞれ避難生活を送った。

ヌニェス部長の説明によると、ダスティン・パーリンとジェイデン・アル

レッドの二人の長老は緊急医療援助を施す訓練を受け、2日間赤十字の医療援助に参加した。ほかの宣教師も市内での救援活動に加わったが、最終的には宣教師の健康と安全を考慮して、宣教師全員がアルメニアから引き上げた。

ヌニェス部長は、地元の神権指導者によって幾つかの委員会が組織され、次のような活動が繰り返げられたと語った。「一つは、建

築委員会で、会員ではありませんが、かつて教会堂の建設に当たった人が長を務めています。彼は、損害を受けた家屋の被害状況を調査して、取り壊す、あるいは建て直す必要がある家屋の査定を手伝ってくれています。

また、医師をリーダーとする医療委員会も設置しました。この委員会のリーダーも会員ではありませんが、両親が会員で、家を失った二人は現在教会堂で避難生活を送っています。この委員会は、救急医療に当たっており、各地から送られてくる医薬品の分配も手がけています。

ほかに、物資の輸送を担当する委員会や、支部長に食料を支給する委員会もあって、長老定員会がその配給を行っています。これらの委員会は非常に効果的に機能しているため、アルメニアには飢えに苦しむ会員は一人もいません。わたしたちに食料や衣料品、寝具などを送ってくださったステーキと地方部の会員の皆さん全員に心から感謝しています。わたしたちは、ほんとうにすばらしい援助を頂くことができました。」□

【チャーチニュース】(Church News)の厚意により、1999年2月6日付けの記事から掲載。

インターネット 上での 総大会説教

教会のホームページ(www.lds.org)上で、総大会の説教を19か国語で読むことができる。まず教会のホームページ左下の「languages」と表示されているボタンをクリックする。利用可能な言語の一覧から言語の一つを選びクリックする。次にその言語で「総大会」を意味する単語が表示されているボタンをクリックする。

現在、利用が可能な言語の一覧は以下のとおりである(ホームページの一覧順に掲載)。

インドネシア語
チェコ語
デンマーク語
ドイツ語
英語
スペイン語
フランス語
イタリア語
ハンガリー語
オランダ語
ノルウェー語
ポルトガル語
スウェーデン語
サモア語
フィンランド語
トンガ語
ブルガリア語
ロシア語
ウクライナ語

英語であれば、説教は総大会閉会后2、3日でホームページに掲載される。その他の言語は大会後1、2か月ほどで、翻訳が完成次第掲載される。□

宣教師の葬儀

十二使徒定員会会員のデビッド・B・ヘイト長老は、1月30日にユタ州モロナイで行われたジャール・マイケル・ペイブンファス長老(20歳)の葬儀で話しをした。ペイブンファス長老は1月28日カナリア諸島ででき死した二人の宣教師のうちの一人だった。管理監督会のリチャード・C・エッジリー第一副監督は、バージニア州テール市で行われたもう一人の宣教師ジョシュア・マシュー・プライマック長老(19歳)の葬儀を管理した。

彼らはスペインのラスパルマス伝道部で働いていたが、準備の日にほかの宣教師たちと岩場の多い海岸で写真を撮っていたところ、プライマック長老ともう一人の長老が波にさらわれた。

もう一人の長老は岸にたどり着いたがプライマック長老は戻らなかったため、ペイブンファス長老は彼を見つけるために海へ入ったのだった。二人の遺体は2日後に発見された。

幕のかなたの伝道活動に触れ、ヘイト長老は「二人の宣教師は新たな召しを受けたのです」と語った。また教会員はどのようにすれば自らの証の力によってこのような悲しみを乗り越えられるかということについても語った。「皆さんの中にはわたしのよう長生きをする人もいるでしょうし、早い時期にこの世に別れを告げる人もいるでしょう。しかし、これは福音の計画のうちの一部なのです」と92歳になるヘイト長老は語った。□

教会のステーク総数2,500となる

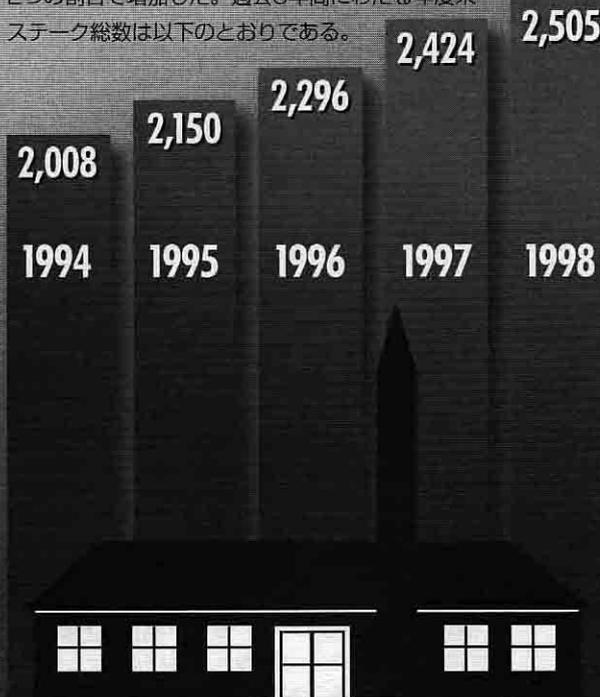
エズラ・タフト・ベンソン大管長は1991年に「『杭』という語は象徴的な言葉です」と語った。「大きなテントを思い浮かべてみてください。テントを支える綱は『杭』でしっかりと地上に固定されています。預言者たちは末日のシオンを地上を覆う一つの大きなテントにたとえました。このテントは多くの『杭』に結ばれた綱で支えられています。もちろん、これらの『杭』、つまりステークとは全世界に広がる様々な地理上の組織単位を指しています。現在、わたしたちイスラエルの民は各地のシオンのステークに集合しています。」(「『杭』を強めよ」『聖徒の道』1991年8月号、3)

教会の最初のステークは1832年オハイオ州カートランドで組織され、2番目のステークは1834年ミズーリ州

クレイ郡で組織された。1840年までにオハイオ州、ミズーリ州、イリノイ州

ステークの数

1990年代に、教会のステークは1週間につき平均しておよそ2つの割合で増加した。過去5年間にわたる年度末ステーク総数は以下のとおりである。



に11のステークが組織され、30年後、教会の12のステークはすべてユタ州にあった。1882年までに、ステークの総数は27にまで増加し、さらに1940年までには177を数えるまでになった。1960年には、教会の321に上るステークのうち19は同じ英語圏でもアメリカ以外の国々にあり、一つはメキシコにあった。1991年、教会のステーク総数

は全世界で1,800を超え、1998年にはついに2,500となった。

ステークを「特定の地域に住む聖徒たちにとって、教会組織のひながた」と呼んだベンソン大管長は、教会のステークのために4つの目的を明らかにした。その4つの目的とは、「教会のプログラムを提供し、様々な儀式を執り行い、福音を教えることによって、会

員たちの一致をはかり、彼らを完全な者にすること」、「正義の模範、標準となること」、一つとなり、各自が献身的に自らの義務を果たし、「過ちや邪悪、不幸から守られる」こと、「全地に嵐が吹き荒れるときの『避け所』」となることである（『聖徒の道』1991年8月号、5）。□

一国の門戸を開くきっかけを作った一言 50年前一人のウエーターの改宗によってホンジュラスでの教会の第一歩が始まった。

ジョン・L・ハート

今から約50年ほど前に一人の十二使徒が、宿泊したホテルのウエーターに福音を紹介したことがきっかけで、やがて全土に福音が広まるという出来事があった。当時そのウエーターだった、長身で立派なあごひげを蓄えたホセ・サントス・オルテガ・フロレスは、ホンジュラスに教会が設立されたころのことを懐かしげに思い出し、スペンサー・W・キンボール大管長に深い敬愛の念を示しながら、次のように語った。

「当時十二使徒だったスペンサー・

W・キンボール〔長老〕が、わたしの勤めていたホテル・ブラドにいらしたのは、1952年11月17日のことでした。翌日、わたしはたまたま長老たち〔キンボール長老とそのご一行〕の朝食の席のお世話を勤めさせていただくことになりました。今でもはっきりと覚えているのですが、わたしがコーヒーをつごうとすると、キンボール〔長老〕が片言のスペイン語で、『わたしどもはコーヒーは飲みませんので、レモネードかほかの飲み物にしていただけませんか』とおっしゃいました。『かし

こまりました』と申し上げると、キンボール長老はさらに続けて、『わたしたちは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員で、宗教上の理由でコーヒーは飲まないのです』と説明し、13節ある信仰簡条が印刷された小さなカードを下さいました。』

その席には、当時七十人第一定員会のブルース・R・マッコンキー長老のほか、数人の伝道部長が同席していた。翌日、出発直前にキンボール長老は、オルテガ兄弟にある望みを託した。

オルテガ兄弟は、そのときのことを次のように語っている。「キンボール長老は、わたしの名前や住所、そのほかいろいろわたしについてお聞きになりました。そして、その場にいた方々はわたしに『モルモン書』と『教義と聖約』を下さり、これからもわたしと連絡を取って、宣教師をわたしのもとに送りますから、もっと教会のことについて学んでほしいとおっしゃいました。』

「キンボール長老はわたしの肩に腕を回して」、オルテガ兄弟は声を詰まらせながらさらに話を続けた。「申し訳ありません、でも愛するキンボール〔長老〕のことを思い出すと、つい涙が出てしまつて。とにかく、そのときキンボール長老はこうおっしゃったんです。『わたしはあなたにここホンジュラスで最初の教会員になっていただきたいのです。わたしたちの教会には神権の力があります。あなたはこの国で最初にその力を受ける人になるでしょう。』」

1952年にスペンサー・W・キンボール長老の導きによってホンジュラス最初の改宗者となったホセ・サントス・オルテガ・フロレス兄弟。

写真/ジョン・L・ハート、「チャーチニュース」(Church News)の厚意により掲載

一行が去ってから、27歳のオルテガ兄弟は、自分に起こった出来事についてあれこれ思いを巡らせた末、とにかく『モルモン書』を読み始めることにした。そして分からないことがあると、その度にキンボール長老やマッコンキー長老に手紙を送り、その返事をもって勉強を続けたのである。

それから程なくしてホンジュラスに宣教師が到着し、ホテルで仕事をしてきたオルテガ兄弟のもとを訪れた。「最初の宣教師がホンジュラスに到着したのは1953年の1月のことでした。一人は、テキサス州のエルパソから来た、背が高く、ブロンドの髪をしたジョージ・W・アレン長老で、もう一人は、カリフォルニア出身のジェームズ・T・ソラップ長老でした。御二人はわたしの家を訪れ、わたしに福音を

教えてくれました。わたしは、勧められたとおりに聖文を読み、祈りました。やがて、強い証^{あかし}を得たわたしは、少々葛藤^{かつどう}はありましたが、バプテスマを受ける決心をしたのです。当時、我が家は手狭でしたが、ホンジュラスで最初の教会の集会が我が家で開かれることになりました。その場に出席したのは、わたしと、アリシア・カステネダ、アントニタ・メンドーサ・デ・チャヒフ、アントニタのおばのコロナ・メンドーサ、そして12歳になる娘の5人でした。バプテスマを受けたこの5人が、ホンジュラスで最初の教会員となりました。」

それから間もなくして教会員の数は増え、たくさんの求道者が教えを求めて日曜日に教会を訪れるようになった。また、大勢の子供たちも初等協会の集会に参加するようになった。その

年の4月に新たな10人の宣教師が送られてきたことによって、教会員の数はさらに増えた。

その後、オルテガ兄弟はホンジュラスの教会を訪れた愛するキンボール長老とマッコンキー長老に再会した。長い教会員生活を経て、オルテガ兄弟は神権の昇進を受け、第一副支部長としてや、長老定員会会長会の中で責任を果たしてきた。

オルテガ兄弟の見守ってきた、ホンジュラスにおける教会の発展ぶりは奇跡的なものであった。46年前、たった一人のバプテスマから始まった教会は、現在約8万2,000人の教会員が集い、20を超えるステークと8つの地方部を抱える規模にまで発展したのである。□
【チャーチニュース】(Church News)の厚意により1999年2月13日付の記事から掲載。

「分かち合いの時間のためのアイデア」追加分 1999年6月



以下は、初等協会の指導者が『リアホナ』6月号に掲載の「分かち合いの時間」とともに使用できる「分かち合いの時間のためのアイデア」追加分である。これらのアイデアに対応するレッスン、指示、活動は本号「フレンド」4、5ページ「いましめをまもりなさい」を参照する。

1. 「祈りがこたえられる話で好きなものは何か」と問いかける（子供からの回答例——ジョセフ・スミス、エノス、ダニエル、ニーファイ、個人または家族の話）。以下の単語をそれぞれ紙に書き、裏面にその単語に対応する質問を書く。表面「だれ」裏面「祈る必要があるのはだれですか」「わたしたちはどなたに祈りますか」「どなたの名前で祈りますか」「だれが祈りにこたえてくださいますか」表面「何」裏面「祈りとは何ですか」「どのような祈りがありますか」（集会での祈り、個人の祈り、家族の祈り、聖餐の祈り、子供の祝福）表面「いつ」裏面「わたしたちはいつ祈るべきですか」（アルマ34：17—27および『わたしの達成の日』の小冊子参照）表面「どこで」裏

面「わたしたちはどこで祈るべきですか」（マタイ6：5—6および『わたしの達成の日』の小冊子参照）表面「なぜ」裏面「わたしたちはなぜ祈るのですか」（天父と話すため、天父の御心を尋ねるため、天父に感謝するため、祝福を求めるため）表面「どのように」裏面「もし祈りの方法を知らない人がいれば、どのように祈りの方法を教えますか」（「信じていのる」『聖徒の道』1991年3月号、こどものページ、5参照）上記の紙をクラスに配る。答えを考えさせ、パネリストを一人選び、簡単に発表させる。発表の後、ほかの子供たちにパネリストに関連した質問をさせる。祈りについての歌を歌わせる。個人的な経験を分かち合い、一人か二人の子供に、祈りがこたえられたことに関する個人または家族の経験を話させる。年少の子供には教会付属図書館にある絵または『福音の視覚資料セット』からの絵を用いて、祈りに関する物語を聞かせる。天父に呼びかけてから祈り始め、イエス・キリストの御名^{みな}によって終わることを教える。「信じていのる」を歌う。いつ、どこで祈ることができ

るか話す。『わたしの達成の日』の小冊子に書かれている声明「わたしは、いつでも、どんな所にいても、天父に祈れます」を繰り返させる。

2. 出エジプト20：8—11をともに読む。子供たちにこれが十戒の一つであることを話し、安息日^{きよ}を聖く保つことがとても大切であると話す。「日曜日でいちばん好きなことは何ですか」と問う（子供からの回答例——教会や初等協会に行くこと、友達に会うこと、家族と過ごすこと、週のほかの日とは違うこと）。土曜日にはやっておけば、日曜日にしないで済むことがあると説明する。一人の子供に土曜日の活動をパントマイムさせる。ほかの子供たちにその活動が何であるか当てさせる。黒板に「土曜日」と書き、その下にその答えを記載する。何種類かの活動が挙げられるまで続ける。「安息日にすると良いことは何ですか」と問う（子供からの回答例——教会に行く、聖餐を取る、聖文を読む、賛美歌を歌う、家族を訪問する、病人や孤独な人を訪問する、宣教師やほかの人に手紙を書く、日記をつける）。土曜日は準備をす

るのにふさわしい日でありであり、日曜日は日曜日にするように勧められていることを行う特別な日であると子供たちに思い起こさせる。土曜日にすることを日曜日にすれば、日曜日の精神を失ってしまう危険がある。安息日を聖く保つことに関する経験を話す。戒めを守る人への、特に安息日を守る人への主の約束を話して締めくくる（教義と聖約59：12-24参照）。

3. 「主はみ子をつかわし」（『子供の歌集』20；『聖徒の道』1992年4月号、こどものページ、10-11）を歌う。最後の晩餐の絵を見せ、イエスは十字架にかけられる直前に、いつも御自身とその犠牲を覚える方法として、また御自身の御霊が常にともにあるよう、十二使徒に聖餐を配られたことを説明する。自分たちのワードや支部では、アロン神権者が聖餐を配る責任がある。あらかじめ執事、教師、祭司を一人ずつ（監督または支部長と事前に相談の上）初等協会に招待しておき、聖餐に

関する義務について、またどのようにその大切さを理解したかについて短い話をするよう依頼しておく（ジェフリー・R・ホランド「わたしを記念するため、このように行いなさい」『聖徒の道』1996年1月号、72-75参照）。各々の責任についての質問に答える準備をしてくるよう頼む。祭司にパンの祝福の祈りを読んでもらう（モロナイ4：3参照）。祭司が読む前に、わたしたちが聖餐を取るときに約束する3つの事柄を聞き取るように言う（イエス・キリストの御名を受ける、常に御子を覚える、戒めを守る）。「主はわたしたちに何を約束されていますか」と問う。祭司に再び「いつも御子の御霊を受けられるように」という個所を読んでもらう。御霊がともにあることの大切さについて、また聖餐を取ることの祝福について証を分かち合う。年少の子供にはキリストの生涯の絵を見せ、主について話し、主がどのように小さな子供を愛していらっしゃるか話す。「主

はみ子をつかわし」を歌う。聖餐の間、キリストについて考えるように話す。再び「主はみ子をつかわし」を歌い、歌っている間、絵を見せる。子供たちができるだけ敬虔で静かにしている間、絵をもう一度見せて、イエスについて考える練習をする。聖餐の間にイエスのことを考えるようにすれば、祝福されることを話す。

4. 聖文を学ぶことに関するそのほかの参考資料。「サミュエルの聖典」『リアホナ』1999年6月号、フレンド、2-3；「どこにあるでしょう？」『リアホナ』1999年2月号、フレンド、8-9；「ゲーム——『旧約聖書』のものがたり」『聖徒の道』1998年10月号、こどものページ、13）戒めを守ることに関するそのほかの参考資料「正しい選択」『リアホナ』1999年6月号、フレンド、13；「食物の祝福」『リアホナ』1999年6月号、フレンド、14-16；「ボールを落とさないように」『聖徒の道』1998年9月号、こどものページ、2-3）□

●ローカル・ニュース

「われらはみ旗を高く掲げ」

身近な場で福音を掲げる末日聖徒の青少年たちの活動をレポートします。

「教会の標準週間」……横浜発

横浜ステーキ横浜中ワードの青少年たちは今年2月のバレンタインの週に、標準週間（Standards Week）という催しを計画した。これは同ワードのタトル監督がかつて住んでいたニューヨーク州パルマイラでワードの恒例行事となっていたものだ。この標準週間の間、青少年たちは身だしなみや行動において『若人のために』という小冊子に記された福音の標準に厳密に従って生活するのである。横浜中ワードにはインターナショナルスクールに通っている生徒が何人かいる。彼らは学校へ行くときにも、聖餐会に出席するようなきれいな服装をすることになった。すなわち男子はネクタイを着用、女子

はドレスなどで登校したのである。ジーンズにトレーナーといったラフなかつこの生徒たちの中で彼らは周囲の注目を集めた。

「普段よりちょっとおめかしして通学するのは楽しいものです。」（アリシャ・タトル姉妹、12歳）「最初は、周りのみんなが自分のことをどう思うだろうと考えると気が気ではありませんでした。でも2、3日好奇の目にさらされた後は、みんなぼくの服装に慣れ、そうしている理由も分かってくれました。」（ジャック・ソレンセン兄弟、14歳）「わたしがバレンタインのために着飾っていると見た人がいることを知ったとき、わたしは必死に笑いをこらえました」（ステファニー・ソレンセン姉

横浜中ワードの青少年たち。



妹、12歳）と彼らは感想を述べた。

また監督は、『若人のために』を毎日読んで、1週間、全部の標準を守るようにチャレンジした。最初は軽い気

持ちで始めた青少年たちも、普段の生活を改めて検証して、それがどれほど難しいことかだんだん分かってきたという。またこのプログラムには教会員だけでなく、会員の友達も何人か参加し、彼らもそこからそれぞれ貴重な経験を得ることになった。

「友人に教会や、教会の標準について話す機会がありました。かなりの人が『モルモン』について知っていることに驚きました。でも彼らの知識の内容は、大量の食糧貯蔵、一夫多妻、スーツ姿で自転車に乗る宣教師といった偏ったものが大半でした。ある友人は、自分も1日『モルモン』になると宣言しましたが、彼は真剣にわたしたちの信条を尋ね、教会に興味を示してくれました。」(アシリー・ソレンセン兄弟, 17歳)

『標準週間』のおかげで、自分とは何かの人とは少し違うことと、それはちょっと悪いことじゃないんだということにも気づきました。」(ジャック・ソレンセン兄弟)

標準週間の最終日、2月14日は安息日だった。聖餐会において彼らは壇上に立ち「標準」というテーマでそれぞれの経験を分かち合った。そしてどこにあっても自らの標準を掲げ、光となることの大切さを学んだのである。□

ボーイスカウト活動の成果を学校へ報告……仙台発

ボーイスカウト仙台45団に属する5人の若い男性は、昨年の夏、スカウト活動のボーイ隊の年齢層における最高の達成である菊スカウト章を受けた。彼らのうち4人は当時中学3年生で受験を控え忙しい時期だった。現在、ベンチャースカウトの隊長を務める泉ワードの大森淳一副監督は、彼らの達成を大変価値ある

ことだと考えた。そこで彼らの通う中学校へ出向き、校長先生や担任の先生にあいさつして、彼らの普段行っているスカウト活動の実践について話し、菊スカウト章を受けたことを報告したのである。各校の先生方は、学校では知ることのできない普段の生徒の姿がよく分かった、と大変喜んでくださった。

大森隊長はこう語っている。「彼らの一生の財産になるだろうと思います。菊章は人生のある時期にしか取るチャンスがありませんから。ただ、章の目的はあくまでもスカウト活動本来の『誓いと掟』を実践させることです。初等協会とか日曜学校とか、教会でいろいろ学んだことを実際に実践する場がスカウト活動なのです。そういう彼らの側面を学校側にも知っていただけてよ



仙台45団のスカウトたち。98年夏の秋田日本ジャンボリーにて。後列の5人が菊章を受けた。左から佐々木昭仁兄弟、泰楽 剛兄弟、猪股雄介兄弟、鈴木光志兄弟、境田尚久兄弟。前列右が大森隊長。

かったなと思います。」

地域のボーイスカウトの進歩委員を務めている仙台ステーキの大沼繁弘副会長はこのように語る。「スカウトの誓いの中に、『神と国とに誠を尽くし、掟を守る』という項目があります。スカウトの進歩状況を判定するために子供たちと面接する機会がよくありますが、現代の子供たちの多くはこの誓いの意味をどうとらえるのか、具体的にどういう行動を指すのか分からないようです。しかし末日聖徒のスカウトたちはこの点について非常にしっかりした考えを持っていることを誇らしく思いますね。」

日ごろの地道な活動が評価されてか、この春、高校に進学した彼らの多くは推薦で合格することになった。□

マッケイ・クリステンセン兄弟、アメリカ大リーグに復帰

1994年から2年間日本で伝道したマッケイ・クリステンセン兄弟は、1999年4月7日、アメリカ大リーグ、シカゴ・ホワイトソックスの外野手として正式に開幕戦へ出場、デビューを果たした。

「わたしは宣教師になりたいという望みを胸に抱いて成長しました」と彼は語った。「それにしても、あのときはほんとう大きな決断が必要でした。ただドラフト指名を受けただけでなく、非常に高い順位での指名だったからです。それに伴って、当然、数多くのチャンスにも恵まれるはずでした。17歳か18歳のときです。わたしは残りの人生を非常に大きく左右する決断に迫られました。」高校卒業から数週間後、アナハイム・エンジェルスがクリステンセン選手をドラフト1位で指名した

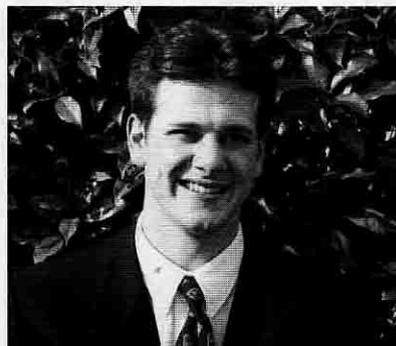
とき、彼はすでに日本に向かっていた。「わたしは必ずしも、伝道に出るかどうかという基準でとらえていたわけではなく、自分が信じ、生きがいとする事柄に従うという観点で、この道を選んだのです」と彼は語る。

日本滞在中に、彼はホワイトソックスにトレードされた。しかし、野球界への復帰は容易なことではなかった。予想以上に体が鈍っていたためである。クリステンセン兄弟はその当時のことを思い出して笑う。「夜帰宅して、『昔

の勤がなかなか取り戻せない』と思ったことが何度もありました。不振を経験しなければならなかったのは、わたしにとってつらいことでした。」

ゆっくりりとはあったが、徐々に調子が出てきた。1996年から1998年までAリーグ(大リーグより2ランク下のマイナーリーグ)で活躍。クラスA以上で試合の経験がなかったにもかかわらず、彼はシカゴでの開幕戦で出場登録選手に名を連ねた。打率2割6分2厘、長打率3割8分1厘という打撃力に加え、守備も堅実なことから、ジェリー・マニエル監督の高い評価を得ている。

ただ、いつ限界が訪れようと、クリステンセン兄弟に後悔はない。「わたしはどんなことがあっても決して日本で過ごした2年間を後悔しません。」□



弱

ハンディキャップとともに
福音に生きる

特集

強変

自分も友達もともに変わり成長する機会を 筋ジストロフィーの青少年が普通高校に進学

仙台ステーク泉ワード
まつだかずのり
松田和徳 兄弟

学校へ通う車の中で。
送り迎えは家族で行うが
時にはタクシーを
使うこともある。



この春、宮城県で公立高校に進学した2万104人の生徒の中に松田和徳兄弟がいる。和徳君はパソコンで作曲・編曲することが得意な明るい音楽好きの高校生だ。ただほかの高校生とほんの少し違うところは、進行性筋ジストロフィーという筋肉が委縮していく難病を抱え、自分で体を動かすことがほとんどできないということだ。小・中学校を養護学校で過ごしてきた和徳君は、しかし高校の進学先に養護学校の高等部ではなくあえて普通高校を選んだ。その事情をお父さんの松田照夫兄弟はこう語る。

お父さん「受験する前に、もし合格したら、仙台市教育委員会で介護の先生を和徳のために一人つけてくれるという、口頭での約束を頂いたんです。



自宅でお父さんと。

やっぱり学校の受け入れ体制ができないということとは難しいと思うんですね。送り迎えはできても学校にいる間が……和徳は鉛筆は持てても、重い本を持ち上げたりすることはできないので、やはり介護が必要なんです。でも一般教科の先生では、ほかにいろいろな仕事がありますし、なかなか……。やっぱり専任の介護教師という形である程度サポートしていただかないと授業ができませんから。和徳の場合、そうした環境に恵まれてほんとうによかったなと思いました。」和徳君の通う高校は、随所に車椅子用のスロープが設けられ、校舎内に2基のエレベーターを備えている。以前、和徳君と同じ病気の生徒が車いすです学生生活を送り卒業した実績もある。しかし専任の介護教師がいたのは宮城県で初めてのケースであり、画期的なことだという。また校長先生は片耳の聴覚に障害を持っており、教頭先生も片足が不自由で松葉杖で過ごされているという。

お父さん「そういうこともあって、先生たちにも生徒たちにもハンディを持っている人に対する優しい気持ちというのが自然と醸し出されているんじゃないでしょうか。それで和徳はずっと前からこの高校を目指して『合格』ってはり紙をしていたね。」

松田家のご両親にお姉さん、お兄さん、二男の和徳兄弟の5人家族。最初に改宗したお姉さんの良い影響で、家族一人一人がだんだんとバプテスマを受け、最後に家族全員が教会員になった。末っ子の和徳君のバプテスマは8歳のときだった。

お父さん「わたしが改宗した一つの理由には、和徳の病気が神様の力によって一日も早くよくなりますようにというのありましたね。そういうことで和徳も、病気そのものは治療方法がないんですけど、明るく毎日生活することができたのでね、今回の普通高校に入るという、やる気や力強さも出てきたんじゃないかと思うんですね。」

障害も含めた存在そのものが祝福

入学してまだ1か月足らずだが、和徳君は高校生活についてこう語る。

和徳君「養護学校ではすぐ先生たちが手伝ってくれるんですけど、普通高校では先生でも友達でも自分からちゃんと言わなければいけないから、そういう違いを感じました。今は周りも当たり前のように手伝ってくれるようになってうれしいんですけど、やっぱり最初は、みんなちょっと周りの目を気にして恥ずかしがってましたね。」

校内の移動は電動車いすです。介護の先生とはいつも一緒にいるわけではなく、ほとんど友達が助けてくれます。体育のときは、例えば今日、みんなは授業でラジオ体操をやったんですけど、ぼくは図書室に行って、ラジオ体操の歴史を調べて先生に提出しました。みんなは運動をしてぼくはレポートをする、っていう感じですね。

まだ始まったばかりですけど……同じクラスの友達と仲良くなって、自分も成長できるし、友達も、変わってくれたらいいな、と思います。ぼくみたいな障害を持った人に、ほかの人たちが自然に接するようになってもらいたいっていうことですけど。」

お父さん「先生方や生徒さんたちにも学びの場になっているんじゃないでしょうか。障害者が普通高校へ行きたいと言ってもこれまで制度がそれを受け入れる態勢になかった。それがだんだん、障害のあるなしに関係なく希望する教育を受けられるチャンスを与えよう、と変わってきているようです。ほんとうに和徳の役割ってというのは大



マッサージと柔軟運動をする和徳君。
毎日やっているんで体はとても柔らかい。

きいんですね。学校に行ったり社会に参加したりすることで、一つの教育制度が変えられるような存在感があるわけです。これはやっぱり祝福だろうと思うんですよ。和徳にとって障害があること自体が逆に祝福になっているんですよ。

家族にとってもそうです。和徳を中心に動いているようなところがありまして、その存在は非常に大きいんです。」

お母さん「筋ジストロフィーって初めて聞いたときはどうしていいか全然分からなかったんです。最初、医師に



治験薬を勧められて飲んだんですけど、何の効果もなく副作用だけが強く、朝起きてみるとシーツが鼻血で真っ赤に汚れている……1年間それを繰り返して、薬に頼らずに何とかならないか、ということで家族で挑戦が始まったんです。主人がほんとうに一生懸命、最善の方法を尽くしてやりたいって気持ちで、筋ジストロフィー協会という、患者さんと家族で作っている団体からいろんな情報をもらってきました。そして、とにかく起立台とか食事療法とか、それからマッサージとか、そういうことも主人が言い出したんです。ほんとうに単純作業なんですけど、それが結果的に効果があったんです。」

お父さん「和徳がいるので家族のきずなが強まります。それはやっぱり祝福だろうと思うんです。だから学校に行っても、そういうものは周りの人たちに与えていると思うんですよ。本人がどのくらい自覚しているかは別にしても、存在していること自体、そして自分が社会参加しようとしていること自体、自分の持っている役に立つものを少しでも磨いていこうと思っていること自体が、周りに良い影響を与えている。ハンディキャップを負いながらも頑張っている生活している、学校行けるっていうこと、そういうこと自体がすでに祝福じゃないかなと思いますね。」

福音の福祉の根本——自立を目指して

そうは言っても、ご両親は和徳君を特別扱いしているわけではない。教会の福祉の根本理念は自立である。和徳君の自立



和徳君は、毎朝起床時と学校から帰った夕方に、マッサージと起立台での全身矯正を欠かさず行う。血行を良くし、萎縮していく体の筋肉をできるだけ伸ばすためである。「とても効果がありました。普通この病気は筋萎縮で体が変形し、その影響で内臓が悪くなったりしますが、和徳は見たところ変形していません。丈夫でまったく風邪を引いたこともありません」とお母さんの松田ともし姉妹は語る。

というものを親として最重要視しているからだ、とお父さんは語る。

お父さん「家族としてね、ハンディになっている部分だけは手助けするけれども、あとはもう、3人の子供を同じ様に扱っています。だから両親が仕事で出かけて行くときも、兄や姉、またはタクシーの送り迎えなど周りのだれかが助けてあげればいい。必ずしも親がやらなきゃならないとは思いません。ま、本人は結構寂しい面もあるようだけど(笑)。お父さんとお母さんが10日も出張でいなくなったりするとね。

まさしく自立で、とても大事なことじゃないかなと思うんですね。わたしたちも、かくまうことはしないで開放しようって思っています。和徳自身も、できるだけ社会参加しようというふうな気持ちでいますので。」

これまで和徳君は筋ジストロフィー協会のツアーで韓国へ行ったり、家族でオーストラリアへ行ったりという経験をしている。障害にとらわれず開放しようというご両親の考え方が表れている。また日本よりも外国の方が障害者に対する社会の受け入れ態勢は徹底していると感じさせられることも多いという。

お母さん「空港に行くとき、前もって連絡しなくても別扱いにしてくれて、ちゃんと車いすの人が搭乗する専用の車があるんですね。リフトがぐーんと上がって、車いすごとそのまま乗せていただけるんです。特に和徳は子供だったから、コックピットを特別に見せていただいたり、機長さんとお話しさせていただいたりして、飛行中にね。

パソコンに向かい、自動演奏ソフトを操る和徳君。
パソコン歴は4年、中等部の卒業式では
和徳君が編曲・構成した曲が発表された。

操縦していいよなんて言われて、操縦桿を回してぐーっと機体をほんとうに動かしてくれて。」

お父さん「すごかったよね、あれはオーストラリアへ行くときだったね。」

お母さん「主治医の先生は30何年間、筋ジスの患者さんだけを診てきて、和徳のように体が変形しない例は初めてだとおっしゃるんですね。最初はとにかく無理をさせないようにと言われていたんです。訓練する必要はあるけれど無理をさせてかえって逆効果になる例もある、と。でも今は、もちろん極端な無理はしませんが、ちょっと無理するぐらいがかえって筋肉を維持するには大切なことじゃないかな、と実感



しているんです。ええ、精神的にもちょっと無理して留守番をさせたりして、寂しさに耐える心を養うとか。(笑)」

和徳君「完璧に養われてます。(笑)」

お母さん「20歳になったら普通の成人ですから、だからわたしたちも大人としておつきあいをしていこうと思いますし、今は無理してでも、手がかかってもお金がかかっても、一人で社会に出て行くために準備をしている状態

クラブ活動では情報処理部に入っていて学校でもパソコンに触れる毎日。「これから友達と共同で作曲できたらいいな」と話す。

でいるんですよ、本人もそういうつもりです。だから学校に行っても、健康で、いつでも何でもできるっていう人とは心構えがちよっと違うと思いますよ。」

和徳君「まあ、みんなと一緒にいいんですけど。(笑)普通高校へ来ると、これまでの養護学校と比べてまず人数が違う、いろんなことが見えてくる。たくさんいろんな人がいて、いろんな考えがあって、視野が広がる、勉強させられるな、と思います。これから自分が何をしたらいいのか、より将来が開けて来るんじゃないかと思うんです。そして自立できたらいいなと思っています。」□

弱 強 変 弱

わたしにとってアメリカへ行くのは 宇宙へ行くのと同じでした

重度筋ジストロフィーの姉妹が念願のソルトレーク神殿を訪問

宜野湾ステーキ宜野湾ワード
かよう ゆみこ
嘉陽由美子 姉妹



嘉陽姉妹、
国際線の機内にて。

嘉陽由美子姉妹(50歳)は肢帯型筋ジストロフィーの患者さんである。12歳ごろより歩行困難で発症し、現在四肢、体幹筋の筋力低下、筋萎縮のため食事以外の日常生活に介助を必要としている。呼吸困難のため7年前に気管切開を行い、人工呼吸器を使用する。彼女は1996年12月にパテスマを受けた。気管切開の跡から水が入らないように慎重に行われたという。そのときパテスマに立ち会った宣教師のジェフリー・ラム長老は1つのチャレンジをした。「嘉陽姉妹、再来年の1998年5月にわたしが帰還するとき、ふさわしい心と一緒に聖なる主の宮へ入って儀式を受けましょう！」嘉陽姉妹は決心した。当時の伝道部長夫人より贈られたソルトレーク神殿の絵を病室の天井にはり、毎日眺めて努力した。「わたしはお祈りで主とお話をしました。『自分はいきたい気持ちがあるが、この状況ではどうにもなりません。どうすればいいのですか?』そのとき祈りの答えと

して、肉の腕に頼るなということ(エレミヤ17:5,7参照)、主が助けてくださるということ(ヨシュア1:5,9参照)を確信しました。」嘉陽姉妹は神殿推薦状を受けるため、監督と勉強会を始め、福祉バスで教会に週3回通った。ラム長老のお父さんは医師であり、現地の医療体制が調べられたこと、また看護婦の兼本ゆかり姉妹、訪問教師の比嘉涼子姉妹が同行、介助することになったこと、さらに旅行代理店を営む与那嶺幸子姉妹の、主治医や航空会社など関係各方面との交渉によって、不可能と思われたソルトレーク神殿訪問が実現することになった。以下は比嘉姉妹、兼本姉妹による旅の記録である。

わたしは1997年頃より嘉陽姉妹の訪問教師でした。その年の12月、嘉陽姉妹からもらったクリスマスカードには、「一緒にアメリカへ行こうね」と書かれていました。みみずが言うような字で、やっとの思いでその1行を

書いたようでした。

その後病院を訪ねたとき、嘉陽姉妹は「どうせこのまま一生を病院のベッドで過ごすのなら、多少危険が伴ってもアメリカへ行ってみたい。神殿には入れないかもしれないけれど壁を触るだけでもいい、わたしはそこから力をもらえる」と話しました。

自分の部屋へ戻ると、一緒に行くと言っていいの不安が募りました。主に折りつつひとまず準備を進めることにしました。そして支障があるなら考え直しますが、すべてが順調に進むなら主が助けてくださっていると受け取ることになりました。

それから数日後、机に向かっていたとき、「行って来なさい」と主が確かにおっしゃっているように感じました。それからは不安は消え、躊躇することはありませんでした。主が嘉陽姉妹を連れて来るようおっしゃっているのです。無論、常識的に考えると無理なことだ

と思えますので、周りの方、特に教会外の方に安心していただけるよう、物質的な準備は十分にと心がけました。

必要なものは次から次へとそろいました。車いすを動かすバッテリー、充電器、吸引器その他の医療用品……不思議なことに、嘉陽姉妹が一つ一つ考えていると、ひょいとエンジニアが現れ、必要なものを調達してくれました。人工呼吸器を運んで保護するためのカートも特注で、機内持ち込み容積の規定内に納まるいいものができました。中でも吸引器は、ハンディタイプの掃除機を改造したものでした。嘉陽姉妹はこれを一晩寝ずに考え、翌日現れた電器屋さんに注文しました。届いたのは出発の1日前でしたが、これはほんとうに重宝しました。市販の携帯用吸引器では吸引力が弱く役に立たなかったのです。「方法は全部神様が教えてくださった」と嘉陽姉妹は語ります。

主がともにおられる

1998年5月13日、いよいよ那覇空港を出発です。日本の国内線では人工呼吸器と電動車いすの機内持ち込みができず、嘉陽姉妹は弟さんに背負われてシートに着きました。奇跡的に嘉陽姉妹は、機内を含め6時間も人工呼吸器なしで過ごしました。これは彼女にも初めての経験でした。しかも那覇をたつてから東京神殿に着くまで一度も吸引をしませんでした。

東京神殿で嘉陽姉妹は、自身のインシアトリとエンダウメントの儀式を日本語で受けました。人工呼吸器を付け、時々セッションを中断してたんを吸引

しながら、皆で介助しての儀式でした。嘉陽姉妹にとってその2時間は体力的に精いっぱいでした。途中で苦しくなり、「もう向こうまで行けない、あんたが代わりに行って」とも言いました。しかしわたしたちはアンビオ(手動の人工呼吸器具)と吸引セットを肩に担ぎ、日の栄えの部屋に人工呼吸器を待機させて何とか儀式を終えることができました。

神殿の方にはとても親切にしてくださいました。車いすのパンク修理、介護用ベッドの調達、歩道との段差などすぐに対応してくださいました。車いすが通るということで、神殿長は朝から車いすの寸法を測らせたり、加湿器を備えたりで大忙しでした。主が皆さんを通じて助けておられると感じ、ありがたさが身にしみました。

●神殿長の前で嘉陽姉妹は、「今日までわたしが生きていたのはまさにこの日のためでした」と語った。出発からこの方、わたしたちはたくさんの心優しい人たちに出会い、幸福な3日間を送った。……わたしと嘉陽姉妹は二人で明日のために荷造りに取りかかった。嘉陽姉妹の整理整頓の才はすばらしく、持って行くべき必要なものと、東京へ預けていく物をはっきりと分類し、わたしに的確な指示を与えてくれた。これは彼女の才能だ(兼本姉妹の手記より)。

しかしわたしたちはこの時点で、アメリカへは行かず沖縄へ帰ることを嘉陽姉妹に勧めました。彼女の様子はすでに苦しそうでしたし、体力がもたないのではと思いました。さらに国内線の機内に入るための専用車いすのシートが硬く、尾てい骨の肉を切ってしまいました。おしりの筋肉がないので痛みが直接響いて大変つらそうでした。これから8時間から11時間も同じ体勢で座ることはきついと思われました。離陸時のバッテリーも心配でしたし、吸引器も電池では吸引力が弱くなりあまりたんが取れません。最悪では窒息してしまうことも考えられます。それにもかかわ

らず彼女の意志は変わりませんでした。
●「死んだらどうするの?」と聞くと「喜んでアメリカの土になる」と言うので、わたしは明日について考えるのが恐かった(兼本姉妹の手記より)。

しかしともあれ予定どおりアメリカへ向かうことになりました。

成田では、デルタ航空の社員が丁寧に対応してくださいました。人工呼吸器を嘉陽姉妹のシートの隣にしっかりと固定しました。

●離陸後、嘉陽姉妹に人工呼吸器を装着するが、気圧が違うせいか調子が悪いと訴える。時々人工呼吸器を付けた外したりした。本人の自発呼吸があるためとても助かる。嘉陽姉妹は機内でとても苦しいらしく、何も食わず。臀部が痛いとのこと、わたしたちは何度も何度も体位を変え、頭を前にしたりする。涼子姉妹は眠らずに大活躍した(兼本姉妹の手記より)。

嘉陽姉妹の体は筋肉が使えないため、それほど体重がなくても重く感じます。体を移動するときは、わたしたち2人で両サイドから肩に手を回し足を抱えて持ち上げました。そうしても数分たつとすぐ痛むようで、結局、嘉陽姉妹は機中ずっと痛みをこらえることになりました。わたしは大柄な外国人男性を見つけ、「緊急時にはこの人に手伝ってもらおう」と思っていました。数時間して、彼の方から話しかけてきました。何と彼はわたしの伝道中の知り合いだったのです。彼も何年か前に日本で伝道していました。わたしたちは彼の奥さんに福音を分かち合いました。彼も最初わたしたちを見たとき、「何かあれば手伝います」と協力するつもりだったと言ってくれました。とてもうれ

彼女の病状から考えれば航空会社が懸念を示すのも無理はない、何しろ当初わたしたちさえ無理だと思っていたのですから。でも嘉陽姉妹と会い、その強い信仰に、何としても行かせてあげたいと、夫と二人で何度も祈り、時に断食しました。長時間の飛行、かなりの重量の電動車いす、重さ60キログラムの人工呼吸器と酸素ボンベなど……20~30にわたるクリアしなければならぬ事項。最終的に許可が出たのは出発間際でした。何度も涙が出てきて……粘り強い交渉を続けてきてよかったと思っています(与那嶺幸子姉妹の日記より)。

前列左から嘉陽姉妹、嘉陽姉妹、後列左からこの旅行をアレンジした与那嶺ご夫妻、看護婦の兼本姉妹。与那嶺幸子姉妹は今年2月、癌で急逝された。



しい言葉でした。終始、キリストがわたしたちとともにおられたことを感じました。

機内で嘉陽姉妹は、「白い雲を見ていて、わたしは主の庭を駆け抜けていると感じた。ただひたすら信じていた」と語りました。

主の愛はすべてを潤し

乗り換えの長い時を耐え、オレゴン州ペンデルトンへ着いたのは、東京神殿を出てから24時間以上たったころでした。機内で嘉陽姉妹は痛みに加えてほとんど断食していたので、大変疲れていました。しかしラム長老のお母さんが急いで温めてくれたスープを飲むと少し元気になり安心しました。ペンデルトンの家はゆったりしていました。家の周りがある木々を見て、「帰りたくない」と嘉陽姉妹はもらしました。ほんとうにアメリカに来たんだ、と実感して、わたしは神に感謝しました。

●アメリカに着いてからまた問題が起きた。電動車いすが動かなくなってしまったのだ。……ラム長老の家族はできる限りすべての助けを与えてくれた。車いすが直ったときは家族みんなで大騒ぎして喜んでくれた。また毎晩、必ずみんながわたしたちの部屋に来て家族の祈りをしてくれた。車いすの修理をはじめ、ユタでの電動式ベッドの借り入れや移動など、あらゆることにラム家は力を尽くしてくれた。わたしは嘉陽姉妹のおかげでこんなに理想的な家族に出会うことができたのだ。わたしが嘉陽姉妹にいちばん感謝しているのは、問題を乗り越える強さを与えられたことである（兼本姉妹の手記より）。

ペンデルトンからソルトレーク・シティーに向かうキャンピングカーは、飛行機よりもだいぶ楽でした。シートが柔らかく、彼女の体に優しくかったか

らです。ラム長老のお父さんは、車やベッドへ嘉陽姉妹をおぶって運んでくれました。ソルトレークまで13時間ほどの旅でした。途中、窓から見える風景を嘉陽姉妹は静かにずっと見ていました。美しい山々がさらに夕日に染まって暮れていきました。

翌日、外からソルトレーク神殿を眺めました。5月のテンプルスクウェアは花が咲き誇り、神殿はとてもきれいでした。うかつにもものどの切開の跡から花粉が入ってしまったようで、嘉陽姉妹は後で苦しくなり大変でした。しかし帰ると落ち着きました。

日本へ帰る1日前、ソルトレーク神殿に入りました。体力の関係で直接、日の栄えの部屋に通していただき、廊下には神殿職員の皆さんがずらっと並んで歓迎してくださいました。

神殿の中でわたしたち——ラム長老とお父さん、兼本姉妹とわたし、それに嘉陽姉妹は、沖縄からの道中を思い出して楽しみました。わたしたちは喜びの気持ちでいっぱいになりました。主の愛はすべてを潤してくれるようで、わたしの心に喜びが、後から後から尽きることなくあふれました。

まさに奇跡の旅でした

帰りの飛行機はわたしたち3人だけでしたのでさらに大変でした。搭乗するとすぐに尾てい骨の傷が痛むようで、頻繁に体をずらしたり上半身を前にかがめたりしました。行きと同じく力のありそうな外国人男性を一人決めてお手伝いをお願いしました。この方も飛行機が日本に着くまでわたしたちを気に留めてくださいました。同時に主が励ましてくださっていることも感じました。沖縄の人たちが祈ってくれていることも感じました。しかし次第に嘉陽姉妹の具合は悪くなり、わたしはどうしたらいいのか分からなくなってしまいました。本人が眠ってしまうと呼吸が止まりそうになり、必死で吸引と体ずらしを繰り返しました。何度も何度も祈りながらどうやら成田へ着きました。

●アメリカから成田まで8時間で着いたの

は奇跡だった。普通だと11時間はかかるらしい。……まさに奇跡の旅だった。嘉陽姉妹が生きて帰れたのは、神様によって生かされていたのだ。人工呼吸器のバッテリーが10時間しかもたないことはアメリカに着いてから初めて知った。帰りの飛行機の中でバッテリー切れになったらどうしようとひどく心配した。オレゴンからユタへ着く前に人工呼吸器のバッテリーが切れて呼吸困難を起こしたのでとても大変だったのだ（兼本姉妹の手記より）。

大変疲れていたので東京でもう一泊するか迷いましたが、そのまま頑張って沖縄へ直行することにしました。

●羽田から沖縄までの飛行機の中は大変だった。機内に入ると涼子姉妹はすぐ眠ってしまった。ほんとうに疲れていたのだ。わたしは機内で嘉陽姉妹の隣に座っていたが、途中で呼吸苦が来て、だんだん嘉陽姉妹の意識が遠のいてきたため、わたしは死ぬんじゃないかと心配になり、必死でアンピオを押した。スチュワーデス呼んで人工呼吸器を持って来るよう頼んだが、貨物置き場の奥にあるから取って来れないと断られた。それでも何とか無事に帰り着き、家族に引き渡したときは心からほっとした（兼本姉妹の手記より）。

2時間後、飛行機の車輪が那覇空港の滑走路に着いた瞬間、主の守りを強く感じました。

迎えに来ていた与那嶺姉妹からは、後になって「みんな疲れている様子で何もしゃべらなかつたね」と言われました。よれよれになって帰国したわたしたちの様子を想像すると何だか無性におかしく、嘉陽姉妹を囲んだわたしたちは病室で大笑いしました。

その後間もなく、嘉陽姉妹のお母さんが亡くなられました。彼女は神殿での経験から、戸惑うことなくその状況を受け入れることができたと話していました。また、「この旅から、主が生きておられることへの証が生活の中で強くなりました。療養生活は病気との闘いで、日々進行すればするほど、主に頼ることの大切さを感じる。沖縄に一日も早く神殿が建つことを願っています」と語っています。（レポーター：比嘉涼子 ステーク初等協会第一副会長）



弱よく強ちやう変へん弱じやく

特集

わたしは「盲人」に召されています

主の業に献身する全盲の専任宣教師

仙台伝道部専任宣教師
むさしのひろし
武藏野 博長老



現在、秋田地方部酒田支部では専任夫婦宣教師の武藏野 博長老・信子姉妹が奉仕している。武藏野長老は全盲という障害を抱えながらも、奥様の信子姉妹の助けを得て、その持ち味を生かしたユニークな伝道を行っている。酒田市に武藏野ご夫妻を訪ね、お話をうかがった。(編集室)

わたしは終戦後、英語の必要性が高まったので、英語学校に行きました。東京、大井町の日米文化学院、名前は立派ですが、焼け残ったような大変な建物でした。そこで宣教師に会ったのです。彼らは頼まれて英語を教えつつ、福音もそこで話すことを許可されていました。わたしはいつべんに彼らが好きになってしまって、19歳でバプテスマを受けました。1948年のことです。

このころはまだ目が多少見えていました。5歳のときに病気になって、右の目を完全に失明して、左の目にわずかに視力が残りました。人の顔だと50～60センチ、文字だと3～4センチぐらいに近づけるとどうやら読めました。

23歳のとき、その視力を少しでもよくしようと思って手術を受けたのです。19歳で教会員になっていますから、手術を受けたときは当時の伝道部長、それからアンドラス長老——この長老がわたしを改宗に導き、その後7年間日本で伝道部長も務めました——それから佐藤龍猪兄弟、彼らが来て、手術の直前に癒しの祝福をしてくれました。彼らは言いました、「武藏野兄弟、日本中の教会員が断食をして祈りをしてくれています」と。そういう大変に恵まれた状態で手術を受けました。

ところがその結果わたしは完全に失明してしまったのです。わたしは、「な

ぜですか、どうしてですか」と神様に質問しました。そうしたらこういう答えが心に返ってきました。「あなたが失明したのは、わたしがあなたを盲人の世界で必要としたからです」と。ところが、わたしはその言葉を頭では理解できたのですが、心では受け入れることができませんでした。というのは、何にも見えない世界に入ってしまったものですから、怖ろしかったのです。生涯まったく何も見えないのだという、つらさ、苦しさ。そのために神さまの言葉を素直に受け入れることができなかったのです。そしてわたしは、「盲人にさせられてしまった」と感じました。医者が失敗したということと、神様は全知全能であられるのでわたしの目を治そうとすればそれができたはずであるにもかかわらず、そうしてくださらなかったということ、そういう思いを持っていた時期が、わたしにとっての最も不幸なときでした。それからだいぶ時がたってからも、「盲人になってしまった」と強く感じていました。あきらめの気持ちですから、これも不倖せな思いでした。

盲人をさせていただいている

そうこうしているうちに、盲学校に行って、卒業して、間もなく盲学校で知り合った人と結婚しました。そのころ日曜学校の会長から「武藏野兄弟、日曜学校の教師をしていただけませんか」と言われました。28歳のときでした。わたしは召しを受け入れたかったのですが、しかしキリストの福音は、幸せになるためのものですから、それを教えるわたしが不幸な思いを持っていたのでは教える資格がないと思いました。それでわたしは、自分を説得し

始めたのです。「武藏野兄弟、あなたは幸せなのですよ、なぜならば……」というふうに、その理由を幾つか挙げていったわけです。そして最終的にわたし自身を説得し、納得させた考え方は、「あなたは盲人にさせられたのではなく、盲人をさせていただいているのです」というものでした。わたしはそれまで自分が盲人であるのは不倖せだと思っていたのですが、この考え方を取り入れたことにより、不幸な思いと縁を切ることができました。盲人であることにはまったく変わりありませんが、幸せになることができたのです。

それから現在まで40年間ずっと教師をやっています。というのは、それ以外わたしが教会でできることがなかったからです。盲人が福音を理解することは、ほんとうに大変なことです。現在点字訳が出ているのは『新旧約聖書』だけですが、これはわたしたちの教会で出版したものではありません。ですから福音を教えるためには、まずレッスンをテープに録音してもらい、それを点字に直し、大切なところを頭に入れてレッスンをするわけです。そういうことをずっとやってきたもので、福音をどうやら理解することができました。それでなければ、この教えるを理解するのはわたしにとって非常に難しかったと思います。

教会員になってから20年後、仙台の支部長さんからわたしは手紙をもらいました。「こちらに目が見えなくて耳も聞こえない人がいます。どうかその人と文通してもらえませんか」と。それでわたしは早速、点字で彼に手紙を書きました。そうしたら断られてしま

いました。ところがそれから約2年後に、彼の方から「文通したい」という手紙が来ました。そのやりとりの中で、彼は、こういうふうに書き出しました。「あなたもわたし同様に大変つらい思いをしてきた、だからわたしはこれまで、たとえ話したとしても理解してもらえないと思ってだれにも話さなかったことを、あなたにだけは話しましょう。」そして、彼が11歳のときに病気で目が見えなくなり、半年ほどたって今度は耳が聞こえなくなり、音と光のない世界で40年くらいずっと過ごしてきたつらい経験をわたしに書き送ってくれたのです。それを讀んだときに、再びわたしは神様の声を聞きました。「あなたが失明したのは、わたしがあなたを盲人の世界に必要としたからです。」そのときには、心の中に沁みいるように、温かい思いがしました。これがわたしにとって、盲人になったことへの神様からの最も大きな証です。自分が盲人でなかったら、彼のような人を助けることはできなかったと思います。

身体障害者は召しである

福音が身体障害者に対して持っている考えについて、わたしなりに苦勞して分かってきたことがあります。ヨハネによる福音書第9章にあります。盲人が道ばたに座っていたとき、弟子がイエス様に聞きました。「この人が生まれつき盲人なのは、本人の罪のせいでしょうか、それとも両親の罪のせいでしょうか」と。それに対してイエス様は、「そのいずれでもない、彼が生まれながらにして盲人なのは、彼のう

えに神のみわざが現れるためである」と。そう言ってイエス様は彼を癒されたのです。わたしは彼が、盲人であったのを癒されたところに神の業が現れたのかなど、最初に讀んだころにはそう理解していました。しかし、もしそうなら、わたしを含めてたくさんの盲人が癒されていないのはなぜか、そういうふうに解釈するのはおかしいのではないかと、わたし自身盲人になってから考えたのです。では、これはどのように理解したらよいのか、神の業が現れるためとのイエス様の言葉はどういう意味かと考えてみました。そしてわたしが到達したのは、彼が生まれながらに盲人であるほうが神の業をなすのに都合がよいからであると、またそのほうが、自分自身が神様に近づくのに、また自分の周囲にいる人を神様に近づけさせるのに有利であるから、そのために彼は生まれながらの盲人であったと、そのように解釈したわけです。やはり、盲人というのも一つの召しだと、その召しは予任されていたのだと思います。神権を持っている人たちは皆予任されていたと書いてありますので、ほかのことも予任されていたと思うのです。この世の中には非常に心がたたくまで、わたしたちが福音を伝えたときに「あなたがたは大変に恵まれているからそのように宗教だの、神様だのと言ってられる。しかしわたしたちのように不遇な者にとって、そんなことは言われてはならない」と断る人もいます。けれどそのような人たちにも福音がスムーズに入っていくための方法があります。それが身体障害者とい

う召しです。「特別な状態で彼らに福音を宣べ伝える人、すなわちハンディキャップを持って福音を伝えてくれる人はいませんか」と前世で募られたとき、それに対して「はいはい」と手を挙げ、生まれながらの召しを抱えてやって来た人たち——これが身体障害者であると思います。そう考えると、盲人でもほかの身体障害者でも励まされ、元

になるのではないかと思います。かたくなな人が、「あなたは恵まれているから……」と言おうとした途端に、口からその言葉が出なくなってしまうような、そういう特別な使命があってこの地上に予任されて来た人たちが身体障害者だと感じるのです。

わたしの友人に、生まれながらの脳性小児麻痺で、首がぐらぐらで手足が動かない方がいます。彼は電話でこう話しました。「武藏野兄弟、神様は、わたしを罪が犯せないような状態に作ってくださったのです。わたしに泥棒ができると思いますか。手も足も動かさないからできないですよ。ソドムとゴモラに、わたしたちのような身体障害者をもっと多くいたら、それらの街は滅ぼされなかったと思います」と。また「わたしの家族はみんな、優しく親切なんです。わたしのおいやめたちも同じなんです。わたしが身体障害者であることによって、両親も兄弟姉妹も親戚もみんな優しくなっています。そういう祝福があるんです」と。言われてみるとわたしの兄弟姉妹たちも皆、優しく親切です。これは、やはり障害者が、周りの人たちを祝福するために前世から召されていたからだと思えないことです。このことを知るならば、障害者の方やその家族がほんとうに希望を与えられ元気になると思います。どうしてわたしの息子だけが、娘だけが、手足が動かない、目が見えない、耳が聞こえないのだろうかと思っている人がかなりいると思います。そのような人たちをわたしたちの教会の教義はほんとうに元気にしてくれるのです。わたしは機会があるごとにそういう方々にこのことをお話しています。

専任宣教師になった動機もその辺りにあります。わたしたちを元気に、幸せにしてくれる福音を伝えたい。子供たちが伝道を終えて帰って来たので、感謝の気持ちで、今度はわたしたちが出なければ、と思いました。40年ほど鍼治療専門でやってきましたが、仕事はたんで来ました。子供たちを育て終えたら夫婦で伝道したいと思っていましたから。召しが来たときには、最



雪の中を伝道する
武藏野長老。

上—武蔵野ご夫妻はレッスンのとき、視覚資料の代わりに触れて分かる様々な形の物体を用いてレッスンをします。右下—鍼灸治療の才能を使って奉仕する武蔵野長老。
左下—77歳でバプテスマを受けられた姉妹。

後のお務めだという気持ちがありました。大変な仕事ではあるけれど、でも心は喜び躍っていました。神様が助けてくださるはずだと確信し、頑張ろうと思いました。

「弱さを強さに変え」

専任宣教師の申請をするときに、盲人であることが障害になる可能性がある、召しが来ないかもしれないですよと言われていました。でもヒンクレー大管長は十二使徒のころから40回近く来日され、わたしたちのことも知っておられますから、まず大丈夫だろうとは思っていました。実のところ、わたしは人に一度お会いすると覚えていただけの特徴を持っているのです。

目が見えない人が伝道することの特別な点は、目立つということです。わたしたちが何かをすると、目が見える人がするよりも目立つのです。わたしは、目が見えていたころからコンプレックスの固まりでした。背が低いうえに目が悪かったため、それがわたしを不幸にしていると長い間考えていました。そんなとき、キンボール大管長（当時は使徒だったかもしれませんが）が羽田空港においでになりました。京浜地区の兄弟姉妹が、握手をしたいと皆、空港へ押しかけました。わたしも握手をしようと思って出かけ、列に並ぼうとしたのですが、すごい人垣でできません。仕方なく、列の終わりまで待っていたのです。ようやくキンボール長老が来られ、わたしは手を差し出しました。その途端、その手をぎゅっと引っ張られて、次の瞬間には、すっぱり彼に抱き締められてしまいました。わたしにとってはとても長い時間で、ほかの方に申し訳ないと思いました。皆さんは握手だけなのに、わたしにだけは長老の体温が伝わってくるからです。その後、なぜキンボール長老がわたしのことを覚えていらっしゃるのだらうと思いました。わたしはそれ以前に2度、キンボール長老にお会いしていました。1度は横浜の建物の廊下で、2度目は、わたしが日曜学校でレッスンをしていたときです。レッスンの途中

で伝道部長さんとキンボール長老が入って来られ、終わる少し前に出て行かれたと、後で生徒さんから聞きました。わたしを緊張させまいと、何も言わずに立ち去られたのだと思います。以来彼は、わたしを覚えていてくださいました。どうもわたしは、盲人であるうえに特徴が豊かなようです。盲人で、わたしのように小さい人はあまりいません。わたしが死ぬほど嫌でコンプレックスの原因だった、目が悪いということ、背が低いということが、実はわたしを非常に印象深くしているとそのとき気づいたのです。1回だけわたしと会った人も記憶に残してください。そしてそれだけでなく、わたしが話したことも強く印象づけられるということに気づいたのです。わたしは神様から、盲人であることを大いに活用しなさいと言われてました。盲人であり背が低いことによって普通の方よりも強い印象を与えられる、これは非常な長所になります。だからそれを大いに活用したいと思います。

主の用向きのために

伝道に出て酒田支部に召されると、支部長さんが、あるお休みをしている兄弟のお宅にわたしたちを連れて行ってくれました。するとその兄弟が、もう一人のお休みしている会員のところへわたしたちを連れて行ってくれました。この方は80歳のおじいさんでした。改宗以来20数年間教会を休んでおられました。玄関で少しお話をして、「ぜひ教会においでください」と言うと、その方は「はい」と言われ、次の日曜日からずっと教会に集っています。後で、わたしの言葉から大変、励ましを受けたと言っておられました。彼を紹介してくれた兄弟も教会に集うようになりました。

わたしは、これまでずっと鍼灸治療をやってきましたので、鍼灸とマッサージの奉仕活動を、老人ホームへ週に2回出かけて行っています。鍼灸治療を通して求道者を見つけるという方法



で伝道してきました。これまでに77才のおばあちゃんが教会員になりました。この方とは老人ホームで知り合いました。わたしは、マッサージをしているときに教会のことを話しました。すると「教会に自分も行ってみよう」と言われました。それでちらしを差し上げたところ、すぐに教会に来てくれました。真理を求めていたのだと思います。彼女はご主人を亡くし、先祖の救いにも興味があり、お年ですが『モルモン書』も一生懸命読んでくれました。レッスンはお年寄りなのでゆっくりゆっくり進めました。昨年11月末の彼女のバプテスマの日、その喜びをわたしは短歌に詠みました。

「聖き夜 霊の瞳に主は見する

輝く老女 白く立つ様」

彼女は今でも毎週教会に来ることを楽しみにしています。

……わたしは、盲人であることと、盲人であるがゆえに培ってきた信仰に感謝し、鍼灸の技術を伝道に役立たせていきたいと思います。わたしの肉体と精神をほんとうに苦しめ、コンプレックスの根源になっていたこれらのものが、今大切な主の業に役立っていることに感慨を覚えます。わたしは盲人をさせていただいています。そして、その召しを、この酒田の人のために、わたしの妻のために、そして主の用向きのために役立てていきたいと心から願っています。□

専任宣教師

1999年4月(235期生)24人 海外3人 ●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット



あまのしのぶ
天野 慈信
神戸伝道部
東京北ステーキ
川越ワード



いいたよしたか
飯田 理敬
東京北伝道部
福岡ステーキ
藤崎ワード



うめはらあきこ
梅原 章子
仙台伝道部
神戸ステーキ
北六甲ワード



おおうち りょう
大内 亮
名古屋伝道部
福岡ステーキ
井尻ワード



きな まさる
喜納 優
東京北伝道部
那覇ステーキ
那覇東ワード



きやうたにあきこ
京谷 亮子
東京南伝道部
大阪ステーキ
河内長野ワード



さいとうたつひこ
齋藤 竜彦
神戸伝道部
山口地方部
宇部支部



ささよしかほ
佐々 佳彦
神戸伝道部
札幌ステーキ
豊平ワード



ささき まこと
佐々木 誠
神戸伝道部
我孫子ステーキ
水戸ワード



さわ ゆうすけ
澤 祐介
広島伝道部
旭川ステーキ
新琴似ワード



しおだ ゆか
塩田 由香
東京南伝道部
仙台ステーキ
上杉ワード



すずき けんたろう
鈴木 健太郎
福岡伝道部
ユタ・ワイバーンステーキ
カントリーヒルズワード



たかやしき だんし
高屋 敦悟志
東京南伝道部
仙台ステーキ
長町ワード



たかやましんいち
高山 真一
福岡伝道部
我孫子ステーキ
つくばワード



チェック・セルギイ
東京北伝道部
ウクライナ
レフトバンクステーキ
ノボルネツキワード



はやし ひでのり
林 英範
福岡伝道部
福井地方部
福井第一支部



ますやましのぶ
升山 忍
仙台伝道部
神戸ステーキ
北六甲ワード



まつもとこういち
松本 光市
名古屋伝道部
広島ステーキ
広島光ワード



もりしげたかひろ
森重 崇弘
東京北伝道部
広島ステーキ
徳山ワード



やかげあきこ
矢景 章子
東京南伝道部
大阪ステーキ
枚方ワード



やじ ともこ
谷治 知子
福岡伝道部
大阪ステーキ
ひばりヶ丘ワード



やまなか かのざさ
山中 麗沙
神戸伝道部
仙台ステーキ
山形ワード



ゆあさ けんいち
湯浅 健一
東京南伝道部
神戸ステーキ
北六甲ワード



よしものむつこ
芳野 睦子
福岡伝道部
東京東ステーキ
長生ワード



かとう のぞみ
加藤 希
オーストラリア
シドニー南伝道部
新潟地方部
新潟支部



くろかわけんいち
黒川 健一
マサチューセッツ
ボストン伝道部
東京西ステーキ
府中ワード



みずの ひとみ
水野 瞳
オーストラリア
シドニー北伝道部
東京北ステーキ
川越ワード

役員の変動

1999年4月9日から1999年5月12日まで
に管理本部会員統計記録課に通知のあ
った役員の変動(敬称略)

- 静岡ステーキ焼津支部
支部長: 鎌田 修平
- 青森地方部八戸支部
支部長: 鳥越 勇
- 札幌西ステーキ手稲第二支部
支部長: 風間 雅彦
- 盛岡地方部北上支部
支部長: 永瀬 修
- 高崎ステーキ桐生ワード
監督: 大木 俊一

ユニットの変更

1999年3月7日付で、富山地方部魚津支部
が富山支部に合併閉鎖された。

皆さんの原稿を募集しています

◎地域のニュース、あなたの証などを
ご紹介ください。

◎ご投稿の際には連絡先(住所・電話
番号・ファックス番号)、教会での責任
(役職名)、所属ユニット名を記入し、
できれば写真(投稿者または投稿内容
に関連するもの)を同封のうえお送り
ください。

◎お願い——海外に召される日本人宣
教師を紹介いたします。伝道の召しを
受け取り次第、編集室に写真を添えて
お知らせください。(氏名〔フリガナ〕、
所属ステーキ/地方部、ワード/支部、
MTC入所月、伝道部名を明記)

◎あて先: 〒106-0047 東京都港区南麻
布5-10-30 末日聖徒イエス・キリス
ト教会 『リアホナ』編集室

TEL.03(3440)2666 FAX.03(3440)3275

専任宣教師

1999年4月(235期生) 24人 海外3人 ●上から氏名、任地(伝道地), 出身ユニット



あまのしのぶ
天野慈信
神戸伝道部
東京北ステーキ
川越ワード



いいたよしなか
飯田理敬
東京北伝道部
福岡ステーキ
藤崎ワード



うめはらあきこ
梅原章子
仙台伝道部
神戸ステーキ
北六甲ワード



おおうち りょう
大内 亮
名古屋伝道部
福岡ステーキ
井尻ワード



き な まする
喜納 優
東京北伝道部
那覇ステーキ
那覇東ワード



きょうたにあきこ
京谷亮子
東京南伝道部
大阪堺ステーキ
河内長野ワード



さいとうたつひこ
齋藤電彦
仙台伝道部
山口地方部
宇部支部



さ さ よしひこ
佐々佳彦
神戸伝道部
札幌ステーキ
豊平ワード



さ さ き まこと
佐々木 誠
神戸伝道部
我孫子ステーキ
水戸ワード



さわ ゆうすけ
澤 祐介
広島伝道部
旭川ステーキ
新琴似ワード



しおだ ゆか
塩田由香
東京南伝道部
仙台ステーキ
上杉ワード



すずき けんたろう
鈴木健太郎
福岡伝道部
ユタ・ワイバーンステーキ
カントリーヒルズワード



たかやしき ごとし
高屋敷悟志
東京南伝道部
仙台ステーキ
長町ワード



たかやま しんいち
高山真一
福岡伝道部
我孫子ステーキ
つくばワード



チェメフ, セルギイ
東京北伝道部
ウクライナ・
レフトバンクステーキ
ノボダルネツキワード



はやし ひでのり
林 英範
福岡伝道部
福井地方部
福井第一支部



ますやま しのぶ
升山 忍
仙台伝道部
神戸ステーキ
北六甲ワード



まつもと こういち
松本光市
名古屋伝道部
広島ステーキ
広島光ワード



もりしげ たかひろ
森重崇弘
東京北伝道部
広島ステーキ
徳山ワード



やかげ あきこ
矢景章子
東京南伝道部
大阪東ステーキ
校方ワード



や じ もとこ
谷知子
福岡伝道部
東京ステーキ
ひばりヶ丘ワード



やまなか かずさ
山中麗沙
神戸伝道部
仙台ステーキ
山形ワード



ゆあさ けんいち
湯淺健一
東京南伝道部
神戸ステーキ
北六甲ワード



よし の むつこ
芳野睦子
福岡伝道部
東京東ステーキ
長生ワード



かとう のぞみ
加藤 希
オーストラリア・
シドニー南伝道部
新潟地方部
新潟支部



くろかわ けんいち
黒川健一
マサチューセッツ・
ボストン伝道部
東京西ステーキ
府中ワード



みずの ひらみ
水野 瞳
オーストラリア・
シドニー北伝道部
東京北ステーキ
川越ワード

役員の変動

1999年4月9日から1999年5月12日まで
に管理本部会員統計記録課に通知のあ
った役員の変動(敬称略)

- 静岡ステーキ焼津支部
支部長: 鎌田 修平
- 青森地方部八戸支部
支部長: 鳥越 勇
- 札幌西ステーキ手稲第二支部
支部長: 風間 雅彦
- 盛岡地方部北上支部
支部長: 永瀬 修
- 高崎ステーキ桐生ワード
監督: 大木 俊一

ユニットの変更

1999年3月7日付で、富山地方部魚津支部
が富山支部に合併閉鎖された。

皆さんの原稿を募集しています

◎地域のニュース、あなたの証などを
ご紹介ください。

◎ご投稿の際には連絡先(住所・電話
番号・ファックス番号)、教会での責任
(役職名)、所属ユニット名を記入し、
できれば写真(投稿者または投稿内容
に関連するもの)を同封のうえお送り
ください。

◎お願い——海外に召される日本人宣
教師を紹介いたします。伝道の召しを
受け取り次第、編集室に写真を添えて
お知らせください。(氏名〔フリガナ〕、
所属ステーキ/地方部、ワード/支部、
MTC入所月、伝道部名を明記)

◎あて先: 〒106-0047 東京都港区南麻
布5-10-30 末日聖徒イエス・キリス
ト教会 『リアホナ』編集室

TEL.03(3440)2666 FAX.03(3440)3275